

1.psd

(  
空  
白)

3.psd

4.psd

——終わった。

——もうこの体は指一本すら動かせない。

——確かに勝負には負けたけど、私の計画は続いている。きっと、あの計画だけは成功する。

茜は僅かに口元を緩めた。

「四割くらいは満足してるの」

少女の独り言がゆっくりと宙に溶けていく。辺りに広がるのは、崩れかけたコンクリートの残骸たち。荒廃したという表現が相応しいこの現場で、彼女は目を閉じた。

空氣中に舞い散る埃に煩わしさを感じながらも、茜の体は未だ死に到達することはない。

——四割、ううん、五割かな。

口に出す気力もなく、茜は脳内で自身の計算をやり直した。絶望的な現状を反転させる確率、少しくらい多めに見積もつても誰に叱られることはないだろう。

そもそも、彼女の死はすぐそこだ。世界も既に彼女のことを見捨てている。今更、何を言おうと死人の戯言となってしまうに違いない。

ふと、舞い散る埃が光に反射して雪のように見えた。

彼女の視界には晴れ渡った空と舞い散る雪。徐々にぼやけていく彼女の視界は、やがて一面真っ白に変わった。それはまるで雪が降り積もったかのように幻想的な表現だが、現実は彼女の脳がその役割を停止したからである。

最期の光景を思い出しながら、茜は再び口を開いた。

「……どうせなら、四月に降る、本物の雪を見ながら死にたかった」

四月。始まりの季節。

茜は昔読んだ小説のストーリーを思い出していた。

——春に降る、暖かい、真っ白な雪。

そんな矛盾を彼女は愛していた。そんな矛盾を彼女は見たかった。

「きっと綺麗に決まってるもの」

そういって、茜は小さく笑った。彼女の目からは涙ひとつこぼれない。

これでも自身の行動には満足しているのだろう。

今、全てが壊れ切つたこの場には、たつた二人しか残つていなかつた。

茜ともう一人。

「四月に降る雪、か」

男は彼女の側に腰掛けると、静かにその頬を拭つた。

「そんなもの、空想でも何でもない。四月でも降る所は降る。まあ、今は残念ながら夏だがな」

——夏、葉が茂る、緑と青の世界。

茜はそんな季節に死ぬのは惜しいと、頭の片隅に思いながら再び口を開いた。

「八月に、クリスマスを望むよりは雪の方が現実的だったのね」

「南半球のクリスマスは夏だ」

容赦なく反論する相手に、茜は僅かに信頼を感じた。なぜなら、男はこのまま自身の最後を見届けてくれるのだろうとわかつてしまつたのだ。

「あのさ」

「何だ」

「最後は笑つて死にたいの。だから、最後に写真撮つてくれない？」

「死人を撮る趣味はない」

「ふふつ、まあそうだよね」

無味乾燥とした男の返答に、茜は笑つた。そして、満足したかのように大きく息を吐く。

9.psd

「予言は外れたのかな」

「さあな」

「最後までつれないのね」

そう言いながらも、茜は彼の返答をわかっていたのだろう。不満も絶望もない。ただ彼女の心残りはひとつだけだった。

「こんなに早くいくとは思わなかつた。残念……とても……私にはまだ、やるべきことが……のに」

もはや、喉に力が入らないのだろう。彼女の声は聞き取れないほど掠れていつた。しかし、その口の動きは確かに最後の言葉を表している。

「さよなら」

誰に向けた言葉なのかもわからないまま、彼女はゆっくりと瞼を閉じた。降り積もる埃は、皮肉にも彼女の体に被さり、積もっていく。

せめてもの、これが四月であつたなら、彼女の心も少しは晴れたのかも知れない。

「Memories#1」 End. -

12.psd

「リニア、聰太のことよろしくね」

「は？」

淡々とした茜の声に、リニアは思わず顔を上げた。東京某所——戦闘を終えた彼女たちは、未だ煙が燻る建物を背にして立ち尽くしていた。

「よろしくって。いつになく弱気だこと。まるでこれから死に行くみたいな口ぶりね」

「死ぬよ」

「まさか。あんたは、そんな簡単に死ぬような奴じやないでしょ」

「私だって人間だもの、死ぬときは死ぬよ」

そういうつて茜は僅かに笑みを浮かべた。

リニア・イベリンは尽紫茜のことがあまり好きではなかつた。なぜなら、彼女は明るく快活な面と、どこか影のある表情の両方を併せ持つていたからだ。そんな矛盾した人間をリニアはよく知つていた。おそらく自己嫌悪に近いものを彼女に感じていたのだろう。もしかしたら別世界の自分は彼女と同じルートを辿つっていたのかもしれない。そう思うと、リニアは一層茜に嫌悪感を覚えた。

今もそうである。

彼女は自身の未来を、それも絶望的な未来を平然とした様子で口にした。まるで登校時の会話のように、まるで休み時間の会話のように。茜は自身の死をさらりと予言した。予言——、そう、尽紫茜の能力は『予言』だ。キルヘンスイート以降、最も彼女に近いとされる能力。だが茜の能力は、確実に予言がその通りに起こるというわけではない。過去に何度も予言が外れたこともある。それ故、リニアは聞かずにはいられなかつた。

「予言が外れる確率は?」

「外れる確率を聞くなんておかしなこと。けど、うん……未来は常に変動するものだから」自身の命が関わっているというのに、茜は未だ他人事のような口ぶりをしていた。未来は変わる。仮に事故が起ると予言されても、細心の注意を図ればその事故は未然に防がれるということである。

ふと、茜がリニアを振り返った。互いの視線が絡み合う。彼女の瞳に自身の顔が映り込んだ。その時、リニアは無意識の内にその瞳が訴えていることを察してしまったのだ。

「リニア、聰太のことよろしくね」

「何度も同じことを言わないで。それに、そんな軽々と私に頼み事なんかしないで」

つづけんどんに突き返すリニアだが、態度がきついのは茜相手だからではなかつた。何故か、心のどこかが胸騒ぎをしている。苛立ちかあるいは不安だろうか、リニアはその原因がわからないまま再び茜の顔を見た。

彼女は何も言わない。だというのに、リニアはその顔を見てしまった。

「……わかつた」

「ありがとう」

リニアの返答を受け、茜は本当に嬉しそうな笑みを浮かべた。自身の命は保証されていないというのに。

そんな彼女の顔を直視できず、リニアは思わず視線を反らした。広がるのは、コンクリートの瓦礫の山。灰色の世界しか広がっていない。

現在、東京と千葉は戦場だ。表向きには自衛隊と警察の力で魔法関係の騒動は隠蔽されているが、研究所と協会の戦闘が終わつたわけではない。不意の襲撃はいくらでも起きる可能性がある。

しかし、東京はまだいい方であつた。このingショックによつて、一番ダメージを受けているのは、中東や南米の地域だろう。テロなども同時に起つており、多くの一般人が犠牲になつていたからだ。

そんな国に比べればここはまだ安全だ。リニアはそう思うと、壊れかけた建物を見ながら、この場に似合わない独り言を呟いた。

「聰太は私よりあんたの方が好きだろうね」

どこか皮肉を交えた聲音に、思わず茜は大きな声で笑い始めた。それもお腹を抱えるほど、彼女のツボに入つたようである。当然、その反応はリニアにとつて不快なものであつた。

「……何がおかしいんだよ」

「だつて、そりやそうだよ付き合つてる時間の長さが全然違うんだから」

「……そうだけど」

茜が言つてゐることは事実である。しかし、彼女の中の乙女心はそう簡単に納得できるほどの簡単な構造をしていなかつた。リニアは、なおも口を曲げたままである。

そんな彼女を気にすることなく、茜は笑い疲れたのか瓦礫の上に腰を落とした。  
こんな風に普通の女同士の会話をしても、この場には不釣り合いだ。なぜなら、彼女たちの瞳に映るのは灰色の世界だからだ。

「2000年代はといへん始まつていたね」

茜の呟きに、リニアは頷いた。しかし、彼女の隣に座る」ではない。この距離感が彼女たちには合うのだろう。

「死んだら聰太が悲しむ」

これはリニアの本音だ。茜とはまだ出会つて間もない仲だが、彼女にはリニア自身と重なる面があつた。だが、根本的な部分は異なる。リニアはこの短期間の間にそれだけは理解していた。自分と似ていて、自分と異なる存在。心のどこかで、リニアは茜の存在をもつと知りたいと思つていた。

しかし、茜はそんな彼女の本音も平然と受け止める。

「私だけができるなら死にたくないよ。まだ女子高生だよ?あーあ、こんな展開になるなら  
めんどくさい」としどとけば良かつたな」

「いいがでも平然と。いいがでも達観とした口ぶりで、茜はそう呟いた。

「Memories#2」End. -

19.psd

——視界の片隅を虫が飛んでいる。

煩わしい羽音を立てながら、それは少年の頭の上を飛んでいた。普通の人間なら何かしら反応を示すだろう。しかし、少年は眉一つ動かすことはなかった。

### 夏。太陽が真上に上る頃。

少年は滑り台の上に腰掛けていた。その滑り台は日中の日差しを凌げるよう、頂上に屋根のようなものが被せており、彼はその中にいた。当然、屋根が死角となり、道行く人々には少年の姿を捉えることができない。

彼はそんな小さなアジトの中から、じつと外の世界を眺めていた。まるでビデオカメラのように、最低限の瞬きしかせずに、じつと過ぎゆく人々を眺めていた。

やがて、彼の周囲を飛んでいた虫たちも、その余りにも機械じみた少年の挙動に違和感を覚えたのだろうか。彼らは、少年の側から離れていった。

それから数時間、太陽が傾き始めて、少年はじつと外を眺め続けていた。周囲がオレンジ色に染まり、青い影に包まれていく。彼はそんな世界の移り変わりも含めて、外界の様子をじつとその両目に焼き付けていた。いつのまにか、彼自身も自分が何をやっているのかわからなくなっていた。

——何でこんなことをしているんだろう。

少年の問いに答えるものはいない。

ふと、公園の前の街頭にたくさんの蛾が集まっているのが見えた。近づきすぎれば死んでしまうというのに、彼らは何度もその明かりに迫つていく。ついに街頭に当たつた蛾は、その光の熱に羽を焼かれて落ちていった。

あるいは、近くの蜘蛛の巣に引っ掛かり、今晚の夕食にされるのだろう。

蛾の末路はそのいぢれかしかなかつた。落ちて死ぬか、食べられて死ぬか。少年は、一瞬たりとも見逃すことなく、彼らの行く末を眺めていた。

日が落ちる。正確にいうと、まだ真っ暗というわけではない。青色の世界、所謂、禍時といふものだ。

——これからどうしよう。

少年はやつと思考することを始めた。これから彼が家に帰宅したとして、怒られるのか。それとも心配してくれるのか。少年はあれこれと思考するが、彼の脳内ではあまりいい反応を

示してくれる人間はいないようである。

そう、彼は今、人生初の家出を行つてゐるのだ。しかし、幼い彼にとつては行く當もなく、手段もなく、こうしていつもの遊び場にたどり着き、せめてもの身を隠すためにこの滑り台に籠つていた。

——僕を探さないでください。

——僕を忘れないでください。

相反する想いを抱きながら、それでも少年は誰かが自分を見つけてくれるだろうと、微かな期待を胸に一日中ここに留まつていた。

瞬間、先ほどまで公園にいた鳥たちが一斉に大きな音を立てて、空に舞い上がつた。彼らは

群れをなして、遠くの空へと過ぎ去っていく。

その光景を目の当たりにしたとき、少年の心にも焦りが走った。

——僕は？ 僕は、いつ帰れるんだろう。

脳内を巡る言葉は、決して彼に答えをくれない。疑問だけが頭に浮かび、消えていく。それ  
の繰り返しだ。少年は思わず両耳を塞いだ。

——うるさい、うるさい。

それでも少年の心の声は決して黙ることはなかつた。やがて、目の前の景色すらぼやけてい

く。少年はつい、土で汚れ切った手で目元を拭おうとした。

「だめ」

突然、彼の背後で少女の声がした。

思わず、少年は後ろを振り返ると、そこにはいつからいたのか、少年と同じくらいの少女がいた。

「汚い手で目をこすると、大変なことになるよ」

「……お前には関係ないだろ」

見知らぬ人間がいつのまにか背後にいたことに、不快感を覚えたのだろう。だが、それと同時に、まるで旧知の仲のように答えていた自分に、彼は内心驚いていた。

「ほら、手出して」

少女は、当たり前のように彼の手を握り、優しく土を払い落とした。小学生とはいえ、二人が入るにはこのアジトは少し窮屈な場所だ。それでも、少年は不思議と居心地の悪さを感じ

てはいなかつた。

「……お前誰だ」

「あかね」

少女は自ら名前を名乗つた。少年もつられて、自身の名を口にする。

「ところで、こんなところで何をしてるの？」

唐突に、少女は核心をつく質問をした。彼は躊躇しながらも、その訳を答える。

「……家出」

「何で？」

「家にいたくないから」

「どうして？」

「姉さんは、僕のことが好きじやないから」

すると、少女は一瞬間を開けるが、すぐに小首を傾げる様子を見せた。

「何で？」

「わからない」

「変なの」

「……うん、変。みんな、姉さんがいなくなつてからおかしくなつた」

その言葉を聞いた瞬間、少女はただでさえ狭い空間だというのに、ほんの少し彼の方へと近づいた。

「いなくなつたの？」

「うん、お父さんもお母さんも、姉さんはずっと旅行に行つてゐるって言う」

だが少年は気づいていた。おそらく、自身の姉はもう二度と戻つてこないのだということを。

「同じだね」

少女の言葉に、思わず彼は顔を上げた。そこで初めて、彼は少女の顔をまじまじと眺めたのだ。

「私の親も、弟は遠くに行つたって言うの」

「遠く……どこに行つたんだろうね」

本当に彼女はそれを信じているのだろうか、少年が考え方をしていると、再び少女の口が開いた。

「ねえ、ここで寝るつもりなの？」

「うん」

「ここに蚊が多いと寝れないよ？ずっとここで暮らすの？」

「……行く当てもないし」

少年は本当に家へ帰るつもりはなかつた。だからこの場に留まるしか選択肢はないのだ。

「じゃあ、私の家に来なよ」

「え？」

突然の少女の提案に、思わず少年は目を丸くした。しかし、彼女は本気だつた。明るい笑みを浮かべ、少年の手を引いていく。

「大丈夫。弟ができたって言えば、きっとお父さんもお母さんも喜んでくれる」  
少女の聲音はどこか乾いていた。だからこそ、少年は察してしまつたのだ。

——ああ、そうか。同じなんだ。

少年は何も口に出すことなく、そつと彼女の手を握り返すと、揃つて公園を後にした。空はすっかり闇に満ちていた。

\*\*\*

公園出て十分程歩くと、二人は足を止めた。四階建てのマンション、どうやらここが少女の家の人だ。しかし、奇妙なことに少年にとつてこの場所は初めてではなかつた。むしろ、普段から見慣れている場所である。

「私の家はこゝ」

「……僕の家、あっち」

少女は右奥の部屋を指し、少年は正反対の左の部屋を指さした。

「え？」

少女の驚きも刹那、突然少年が指さした部屋の中からひとりの女性が出てきた。少年の母親だ。彼女は、少年を見つけるや否や、奇声のような声を上げて彼の腕を勢いよく掴んだ。

隣にいた少女が彼を夜遅くまで連れまわしていた、母親はそう解釈したのだろう。彼女は物凄い形相で少女を睨むと、引き摺るように少年を自身の部屋へと押し込んだ。

ヒステリック。そんな母親を少年はよく知っていたため、別段驚く様子も見せず、されるがままに家の中へと入つていった。

ただ、扉が閉まる直前、一度だけ後ろを振り返った際に見えた少女の瞳だけが、彼の心を揺さぶつた。

『どうして私のものを持つていくのか』とでも言いたげな瞳。

ある意味、少年の心を揺さぶつたのは恐怖だったのかもしれない。

「メロン、おいで」

私の呼び声に、ベットの猫がこちらに歩いてくる。そして、私が座ってるベッドの上に飛び乗ってきた。優しく頭をなでると、満足げに喉を震わせて私の膝の上に横たわった。もう一度なでると、メロンはくすぐつたそうに身をよじり始める。

ふと、外が気になつたのか、メロンは突然起き上がると窓の方をカリカリとこすり始めた。  
「お外に出たいの？仕方ないな、早めに帰つてきてよ」

そう言つて、私が窓を開けると、メロンは一度も振り返ることなく夕焼け空の下に駆けていった。

そんな様子を後ろで見守る、いや正確には私とメロンの行為に一瞥もくれない男が床に横たわっていた。

六畳と少しくらいの狭い空間に、思春期真っ盛りの男女が二人。緊張しないわけがないといふのに、彼は熟年夫婦さながら、更年期を迎えた夫婦のように、自然とした態度のままだ。内心、ドキドキしていたらな、なんていう私の乙女心を理解する素振りも全く見せない。

彼が来るからと、私は普段より髪の毛も服装も整えたというのに、目の前で雑誌を読みふけるこの男は、ジャージだ。

てつきり本日の私の服装を見て、そんな服も着るんだな、という一言でも期待したのに、彼は本当に本当に、何も反応を示さなかつた。

「あ、あのさ、実はずつと話そうと思つてたんだけど」

「何」

「こないだクラスの男子に告白されて」

「へえ」

彼はいつも通り。驚くこともなく、適当に返事をする。せめて、私の方に視線くらい向けてくれてもいいと思うんだけど。

「……反応が気に入らない。もつと驚いてよ」

「別に。お前が小学生の頃からモテてるのは知ってるから。十六歳にもなって、今更すぎる」

彼は大きくあくびをした。そして、床に横になつてゐるのも辛いのか、私のベッドに背中を預ける体制に戻した。視線は未だ、雑誌の中だ。

「好きです、付き合つてくださいって言われた」

「……お前、馬鹿か」

「え？」

「だから、お前が今まで何回も告白されてんのは知ってるよ。男子の間じや、振るか振らないかの賭け事に使われる位にな」

そんなことがされているとは。

思わず私は動揺を隠せずにいた。それと同時に、そんな話題をぐく自然に持ち出してくるこの男も気に食わない。

「……今日はOKしようかなって思つてるんだけど？」

「あ、そう。じゃあ俺はしばらくここに来れないね、その彼氏に申し訳ないから」

そう言つて彼は、途中まで読んでいた本をぱたりと閉じた。もともと、読みたかったわけでもないのだろう。あれは私の本だ、適当にその場にあつたものを手にしたに違いない。

それにしても、もう少し驚いてほしい。

やつぱり私たちの関係は『家族』なのか。いや、家族であればこそ、もっと戸惑いの表情を見せてもらいたい。少なくとも、どんな奴かくらいは聞いてほしかった。

「それじや、俺帰るわ。彼氏持ちの女の家に入り浸るほど無神経な奴になりたくないんで」「待つてよ!!そもそもまだ付き合つてるわけじやないし」

「付き合うつもりなんだろ」

「……別にそんなつもりもないけど」

「じゃあ、何でそんな面倒くさい言い回しするんだよ」

先ほどから何度も貶されているが、そんなに気分が悪くない。なぜなら、今はちゃんと私の顔を見ていてくれるからだ。大体、帰るといつても同じ階に住んでるのだから、ここも自分の家と同じようなものではないかとさえ思つてしまふ。

「そりや、退屈だったから。君はずつと本読んでるし……せつかく同じ空間にいるんだから、私と遊んでよ」

「退屈だから告白のネタを話したつてことか、本当にお前馬鹿だな。大体、来たくてここに来てるわけでもないし、別に他の場所で時間潰してもいいんだけど。俺の家の事情、わかってるだろ。そもそも……遊ぶって言つたつてゲームのひとつもない部屋でどう遊べと」

そうか、男の子はゲームとかがないと何して遊べばいいのかわからないのか。

そういうものなのか。

私が内心ひとりで納得していると、彼は再び床に腰を落とした。どうやらまだいてくれるみたいだ。

「ていうか、お前。いつもは黙つて勉強してるくせに、今日は遊べって我儘すぎるだろ」

「今日は遊びたい気分なの」

「なんだそれ」

そういうと、彼はふつと小さく笑つた。ちょっと照れくさそうな笑い方。そう、私たちの関係は変わらない。こんな日々が、私はとても愛しいのだ。この先もずっとこのままがいい。

こうして彼は夜の十時くらいまで、私の部屋で時間を潰す。

「お前、塾とか行かないの？」

突然、彼が話題を振ってきた。塾……考えたこともなかつた。

「時間の無駄だもの、限りない青春をそんなことに費やしたくない」

「まあ、お前頭はそれなりにいいしな。けど、もつと上を目指そうと思えばいけるんじやな

いか？それにはこの家、そんなにお金に困ってるわけでもないんだから

「たしかに」

「俺が毎日、晩飯お世話になつても嫌味のひとつも言われないし」

そんなことを言つても、彼はほとんど夕飯を食べていかない。お母さんが食べていきなさいと言つても、彼は殆ど断る。お父さんが勧める時ぐらいしか食べて帰らないくせに。

でも、私はわかつていた。

別にお母さんのご飯が嫌いなわけじゃない。きつと家族團欒とした雰囲気が、彼は苦手なのだろう。顔には全く出さないが、感謝とか幸福な気持ちがちよつとした態度で伝わってくるときがある。私にはわかる。私が一番彼を理解している。だから私は彼の側にいるために同じ高校にした。私が彼の居場所になつてあげないといけないと思つたからだ。

——まあ、これも全部私の勘違いかもしれないけど。

「というか私が塾に行つたら、君、放課後に遊ぶ相手いなくなるじゃない」

「むしろ遊びたがつてるのはお前だろ。迷惑なら帰るけど」

せつからくお姉さんぶつた態度を取つたのに、彼は先ほどからペースを崩すことがない。だめだ、逆に私が焦つている。

「別に迷惑じゃないけど、ほら、同じ家なら帰るのもそんなに面倒くさくないじやん」

「けど、母さんは俺がこの家に遊びに行くの、あまりいい顔してない」

彼の母親……初対面が最悪だつたせいもあるが、私はあの人をあまり好きじやない。向こうも、きつと私のことを嫌つているだろう。

「とにかく、明日も遊びに来て。あと、朝も迎えに行くからね」

暗い雰囲気を紛らわすように、私は先ほどよりも大きな声をあげた。当然、彼はやかましそうな目を私に向けてくる。

「……勝手にしろ」

そういうつて、彼は再び机の上に置いた雑誌に手を伸ばした。

「なんか、ムカデみたい」

「どういう思考回路をすれば、ムカデだとと思うのか訳がわからないね」

また彼の視線は雑誌に戻ってしまった。

仕方ない、私もそろそろ自分のことをしよう。とつとと課題を終わらせてしまいたい。私は立ち上がり、自身の机に向き直った。彼は別段、私の行為を気にすることない。

「ねえ、宿題終わつた？」

「俺は明日、友達に見せてもらう」

「だめだよ、自分の力で解かないと。お姉さん、怒るよ？」

「お前は俺の姉さんじやないだろうが」

すると、彼は雑誌を読み終えたのか本棚方へと向かっていった。急激に跳ね上がる私の心臓。なぜなら、その本棚の一一番下にあるアルバム、それを見られるのは絶対にダメだ。何としても阻止しなければいけない。

「あ、漫画はその本棚にないよ」

「漫画？別に、漫画が読みたいわけじゃないけど」

「いや、そこ問題集とか参考書とかしかないからさ。奥の本棚に小説とかあるんだけど」

すると、彼は面倒くさいなとつぶやきながら、奥の方へと歩いて行つた。何とか作戦は成功したようである。そして彼を掌で転がせたことに、思わず私は笑ってしまった。

「なんだよ」

「いや、別に」

「変な奴だな」

怪訝そうな顔を浮かべて、再び彼は読書の海へと飛び込んだ。今度こそ、私も勉強に集中することにしよう。

「それじや、そろそろ帰るわ」

後ろで彼の声がした。思わず、私は携帯の画面を確認する。十時ぴったりだ。

「もうこんな時間になつちやたんだ。もうちよつとゆつくりしてけばいいのに」

「母さん、俺が十時に帰らなかつたら何し出すかわからぬぞ」

そう言つて彼は、しぶしぶ立ち上がると本棚の方へと向かつた。

「あ、いいよ。私が後で直しとくから」

「いや、さすがに。読んだのは俺なんだから自分で戻すよ」

ほんの少し照れ臭そうに聞こえるのは、やっぱり私が自意識過剰なだけだろうか。

「いつからそんな風に気を回すようになったの？」

「さあ。お姉さんが勉強している邪魔はしたくないからね」

——姉さん。

その言葉に私の心臓は再び跳ね上がった。まるで私の中の空気が変わったかのように。瞬間、彼のポケットから着信音が響いた。発信者は確認するまでもない、彼の母親だろう。

「ああ、うん。わかつた、ごめん。そう、茜の家。一分もしないうちに帰るよ。そう、うん、わかつたから」

離れていても聞こえてくる女の人の高い声。矢継ぎ早に返事をして電話を切ると、彼は長いため息を零した。

「ということで、俺は一分以内に帰らないと」

「うん、気を付けてね」

「気を付けても何も、扉開けて十歩も歩かない距離で何が起ころうて言うんだよ」

「まあ、それもそうだけど。何が起こるかわからないじゃない」

彼が帰つてしまふのが寂しい。ほんの少しでも長く会話を続けたいがために、私は下らない冗談を言う。でもやっぱり、今の彼にとつての一番は私ではないらしい。彼はもう一度携帯で時間を確認すると、慌てた様子で扉に手をかけた。

「じゃあ、また明日な」

「うん、また明日」

「あ、もしかしたら明日お前の宿題写すかも」

「了解っ」

「即答OKかよ、さつきは自分でやれって言つてたくせに」

「あれ、そだつけ？」

そう言つて私たちは笑いあうと、今度こそ本当に彼は私の家の扉から手を離した。それからまもなく、彼の母親と思われる声が外から聞こえると、バタンと音と共に鍵が閉められる音がした。

「あ、危なかつた」

私は自分の部屋に戻ると、へなへなと床に腰を落とした。ちらりと本棚の方を見る。一番下の段にある分厚い冊子——私の大切なアルバムだ。

傍から見れば普通のアルバムだが、そこにあるのは私の秘密。神域といつても過言ではない。丁寧に保存されたそれを、私は恐る恐る開いた。そこには小学生時代の彼の写真が何ページにも渡つて貼つてある。いや、このアルバムには彼しか写つていない。

そしてその半分以上は、私が密かに撮つたもの。隠し撮りというやつだ。写真を撮られることが自分嫌がる彼だ。こんなものを発見されれば、没収されるに違いない。

私は幼い彼の顔をひとしきり両目に焼き付けると、アルバムを思い切り抱きしめた。

「間違つてない」

これが姉としての感情だ。弟が大切なのだから、私は何も間違つてない。

私、尽紫茜は現在十六歳。華の高校二年生だ。

\*\*\*

これは俺の記憶であり、昔話だ。といつても、あまり話せるほど覚えてはいない。だが、楽しいころを思い出せと言われば、真っ先に思い浮かぶのは中学三年生の頃だ。すべてが上手くいったから、一番愛着もある。

それに自分で言うのもなんだが、そのころの俺は意外と素直だった。

ただ、素直過ぎるというのもいけないのだろう。俺は思つたことをそのままに口にしては、周囲に煙たがられていた。どうやら、すべて口に出していくというわけではないらしい。おかげで親友と呼べるような友人などできるわけがなかつた。ただ一人を除いて。

それでもその頃が一番気楽だつたのは間違いない。人生をやり直すことができるというなら、真っ先に俺はその頃に戻るだろう。

——むしろ、その頃を永遠とループしていい。

小学三年、四月。

周りが見知らぬ顔ばかりでも、唯一彼女だけは知っていた。  
「やつたね、三年生も同じクラスになれた!」

「うん」

「お姉ちゃんがずっと側にいてあげるね」

＊＊

中学三年、六月

誰も知らないと思っていたのに、ひとりだけ見知った顔があった。

「まさか、お前……あの時の」

「うん、また会えたね。嬉しい？」

「半分、半分かな。驚き半分、悲しみ半分」

「悲しみって何よ、勝手にがつかりしないでよ」

\*\*\*

高校一年、四月

彼女は隣のクラスのはずなのに、ズカズカと俺の教室に入ってきた。

「何で、同じクラスじゃないのよ、せつかく同じ高校入ったのに」

「俺はやつと解放された気分だよ」

「解放つて……もう一回クラス替えしてくれないかな」

「別に俺とあいつは同じクラスになれたから満足なんだけど」

ちらりと彼女の様子をうかがうと、本当に悲しそうな顔をしていた。気づくと、無意識の中に俺の口は勝手に動いていた。

「そんな死にそうな顔するなよ。登下校くらい一緒に行つてやるから」

「本当!? 約束だよ、絶対だよ」

「わかつたからつて」

さつきまでこの世の終わりみたいな顔をしてたくせに。なんでそんなにも嬉しそうな顔をするのか、俺にはわからない。でも、この顔は見ていて落ち着く。理由、何故かは俺には全くわからないけど。

「まあ、なんだ。今年もよろしく……特に朝とか」

「へへ、出しゃる=:」

「 Memories#3 」 End. -

52.psd

——23年前。

一人の女性がベッドに横になつていた。茶髪という程、茶色でもなく、かといって黒髪でもない微妙な色の髪を、彼女は優雅に枕元に預けている。

「あら、キルヘン。こんなちは」

女性は来客の気配を察知すると、ゆっくりと起き上がつた。室内は暖かいというのに、彼女は律義にも上着を羽織る。決して体調を崩すまいと宣言しているかのようである。

その理由は誰が見ても明らかなる程、大きく膨らんだお腹。そう、彼女は妊娠していた。臨月を迎える、おそらく出産の日もそう遠くはないだろう。

そんな妊婦に比べ、來訪してきた女は底抜けに明るい声を返した。

「こんにちは、暇だつたから遊びに来たわ。体調はどう？」

「順調よ。あまり動いている様子がないけど、私の子供だからきっと元気な子に違いないわ」

そういつて彼女は、自身のお腹を優しく擦つた。

「それより、キルヘン。その体は何？前よりもだいぶ若くなつたように見えるわ。顔も違う。会う度に別人と会つているみたい」

言葉とは裏腹に、彼女はどこか楽しげな様子で女に問いかけた。すると、女は軽く腕組をして、わずかに背中を反らすと、意気揚々と説明し始めた。

「私も詳しくはわからないけれど、どうやら私の魂と波長が合う肉体を探して、憑依させられたようだ。研究所の連中が何を考えているのかはわからないけど、若返るのも悪くないね、昔に戻つたみたい。どう？ サラー」

サラード呼ばれた女性は、訝し気な様子で首を傾げるが、彼女にとつてはそう珍しいことでもないようである。彼女は女の様子を気に止めることなく、再び自身のお腹をさすつた。

「この子、どうなるかしら」

「……この子が生まれるために選択肢はこれしかなかつた。etcの文書とひとつになるか、あるいはその生を放棄するか。私たちの選択によつて、この子には未来が生まれた。それは間違ひない。けど、その未来が平和なものとは限らない。多くの試練がこの子を襲うと思う。サラード、本当に君はこれで」

「イベリンの子だもの。試練はつきものよ。それに、そんな一冊の本なんかに私の子供が負けるわけないわ。きっと私に似て、頑固で負けず嫌いな子のはずよ」

サラ一の言葉を聞いた女は大きな声で笑い始めた。見た目は十一歳前後の少女だが、その言動ははるかに異なる。しかし、彼らの会話にぎこちなさはない。まるで旧年来の友人のようである。

「ところで、この子は男なのか？女なのか？」

「まだ聞いてないわ、それは生まれてからのお楽しみ」

「もし女だつたらどうする」

「それなら素晴らしいじゃない。本当に私そつくりなお転婆な子になるわ」

そういうながら、彼女は懐かしそうな笑みを浮かべた。静かな沈黙が二人の間に落ちる。互いにわざと避けている話題。先に口を開いたのは、やはり女の方からだった。彼女はサラ一の顔をまっすぐと見据える。

「君は出産後死ぬかもしれない」

「そうね」

「それを知つていながら、何故許可した」

「さあ、どうしてかしらね」

「サラー!!」

おどけたような顔で首を傾げる彼女を、女は声を荒げて叱責した。

「キルヘン、私にもわからないの。何も、何も思わなかつた。この子を生かすことしか考えていなかつたわ。だから、私は何も抵抗することなくあの本を受け入れた。あの瞬間は本当に驚いたわ、やっぱり魔法つてすごいのね」

ふふつと彼女は小さく笑つた。その笑顔はまるで真夏の太陽のように眩しく、そして消え入りそうな程優しく見えて、女は彼女の顔を直視することができなかつた。再び彼らの間に沈黙が落ちる。

「もう、そんな悲しそうな顔をしないで、キルヘン。私もあなたに恩返しをしたかつたの。あなたのおかげで、私はこの狭い箱庭から外に出ることができたんだもの。叶うはずのなかつた、世界というものを、この目で見ることができた。私はそれだけで十分贅沢が過ぎるわ。だから、そんな顔しないで、年相応にどんどん構えてよ」

「年……年相応つて」

「何百歳だつけ?」

「……ああ、そうだな、私は年寄りのババアだつた。奇跡的にこの娘と相性が良かつたから、こんなナリをしているだけだつたな」

拗ねるようキルヘンはそつぽを向く。だがすぐに、機嫌を取り直したのか再びサラ一の方へと向き直つた。

「……私の本当の名を教えてやる」

「え?」

「これはチップのようなものだ」

そう言つて彼女は、静かに口を開いた。

「スイート。私の名は、キルヘン・スイートだ」

「スイート……」

しんと静まり返る室内。しばらくして、サラードは開いたままの口を動かした。

「似合わないわね」

彼女の素直な感想に、女は怒ることなく深く同意を示した。

「元は私も農奴の出身だから、こんな苗字なかつたんだがな。気づいたら、ついていたどうか。私も気に入つていない」

「でも私が特別に知つているのね」

「そう、特別だ。金色の魔女が素性を語つたのは、サラード・イベリンただ一人」

誇らしげな様子で胸を張る少女をサラードは微笑ましそうに見守つていた。

「それは、それは、とても光榮なことです。けど、そんな姿じや説得力ないわね」

「これは仕方ない。私の魂と合うのはこの娘だつたんだから」

和やかな雰囲気で会話を続けていたが、まだ女は聞き足りないことがあつたようである。一度、ため息をつくと、再び彼女はサラードへと問い合わせた。

「旦那の方はどうなんだ？まだ怒っているのか？」

彼女の質問に、サラードはこの日初めてその顔に暗い影を落とした。

「彼は、彼は今も反対しているわ。子供より私の方が大事みたい。彼、結婚の条件に婿養子として来てくれるほど、私を愛してくれているの。だからこそ、その愛情はわかつているの。けど」

「未だ仲直りはできていない……か」

サラードはぎこちない笑顔で頷いた。

「……ごめん」

「キルヘンのせいじやないわ。この選択をしたのは私だもの。それにこれは私たち夫婦の問題」

そういつてサラードは、イベリン家の邸宅から庭園を見下ろした。外では数十人以上の庭師が忙しく植木の手入れをしており、遠くでは家政婦の女性たちが楽しげに会話をしていた。

「約束するよ、サラード」

サラーレは窓の外から女へと視線を移した。

「キルヘン？」

「君がどういう結末になろうと、私は君の子供の面倒を見よう。その子の成長を見守ると約束する」

女は床に膝をつき、胸に手を当てて、帝国の騎士のようにまっすぐな瞳で彼女に誓った。そんなまるで劇中の一幕のような光景に、サラーレは思わず息をのんだ。そして、自分が答えるべき言葉が正しいのかもわからず、彼女は照れ臭そうに女の誓いを受け入れた。

「ありがとう、キルヘン」

「……私にも責任があるからな」

「あら、じゃあこの子が金色の魔女の一番弟子になるつてことかしら？」

「それは、まあ……その子次第だらうけど、そうなるかな」

女は決まりが悪そうな顔でサラーレへと返す。すると、彼女は一度目を伏せると、本当に幸せそうな顔を浮かべて、キルヘンへと笑いかけた。

「それは、本当に光榮なことだわ。ありがとう、キルヘン」

その翌日も、そのまた翌日も女はサラ一の元を訪れた。昼も夜も彼女の側に座り、世界中の話をした。ある日は街中ビルだらけの国の話、ある日は年中真夏のように暑い遠い砂漠の話。ある日は一面氷だらけの国の話。来る日も来る日も、サラ一は女の話を通して、世界中を旅しているような気分だった。

そしていくつもの国の話を聞き終えた日の夜、彼女は子供を産んだ。それから数分の後、サラ一は一度も我が子の産声を聞くことなく、この世を去つていった。

\*\*\*\*\*

——暗い。何も見えない。何も聞こえない。何も感じない。

自身の肉体すら把握できているか怪しい。どこか暗いところを漂つていて。わずかに残つている理性が、現在の状況を把握しようと必死になつていてるのがわかる。

ここはどこなのか、何故ここにいるのか。

しばらくして脳が記憶の再生に成功したようだ。

俺はキルヘンの能力でここに吸い込まれた。空間と空間の狭間とでも言うべき場所だろうか。黒い闇が自身の体に覆いかぶさつてくる。この闇は、おそらく自身が集めてきた子供たち。

何故未だにこの生命が存続しているのか。

何も、何もわからない。

「キルヘン」

彼女の顔を思い出す。

あの女は誰だ。彼女はそう、キルヘンは天城紫乃という女に騙されているんだ。彼女の体が真実を歪ませた。そうに違いない。キルヘンが、俺の愛する女があんな態度を取るわけがないだろう。

「キルヘン……!!」

彼女の名をつぶやくと、少しづつ自身の体に力が湧いてくるような気がした。

帰らなければいけない。etcの文書を取り戻して、ingを覚醒させ、キルヘンをあの女の体から救い出さなければいけない。

「キルヘン……!!」

勢いよく伸ばした腕が、暗闇を裂いた。暗闇と思しきそれは、子供の体だ。構うことなく、俺はその先へと進む。何かが俺の足を掴んだ。子供の腕だ。構うことなく、俺はその先へと進んだ。口元には笑みが浮かんでいる。早く、早くキルヘンを助けなければいけない。

やがて、強烈な光が俺の体を包んだ。

そこは見慣れた場所だ。俺と彼女が最後に言葉を交わした、最期の場所。誰一人いないその場所は、あの日と変わらぬ朝日を浴びていた。

——そうだ、群れを成したのがいけなかつた。最初はひとりで追い求めた。駄目だつた。そのあとは何としてでも彼女を会いたくて、憑依実験をした。駄目だつた。そのあとは組織を作つて、本当の彼女を追い求めた。駄目だつた。

今度は一人で実行しよう。慎重に、確実に。

まずはリニア・イベリンだ。あの女を捕えれば、ingも自然とついてくるはずだ。この二人

を囮にキルヘンを分離させる機会を掴むしかない。

ベルコルは立ち上がった。

季節は変わる。

生暖かい風が桜の木を揺らしていた。

「-」End. -

65.psd

66.psd

## Track.10 I'm Yours

肌から伝わる厳かな雰囲気。周囲にはいない。俺が早く来すぎたせいだろうか、入り口にいた住職でさえも眠そうに瞼をこすつていた。

「久しぶりだな」

俺はひとり、冷たい墓石の前でそう呟いた。刻まれている文字に彼女の名前を見つけ、不意に俺は携帯を取り出す。写真の中の彼女は笑っていた。少しも動くことはない。何故なら彼女は、ずっとこの写真の中に留まっている存在なのだから。

「そう、お前は昔からそんな風に笑つてたな」

たくさんの花に囲まれて、明るい笑顔を振りまく少女——尽葵茜の最期の写真だ。

茜が死んでから、数年の月日が流れている。今更、その死について何も言うことはない。泣き喚くことも、苛立ちを覚えることもない。誰かの死を受け入れるということは、こんな感

じなのかも知れんだろう。終わってしまったのだから、戻ることはないのだから、ただそれを受け入れるしかないのだ。

以前より少しだけ大人びた俺を、やはり写真の中の少女は笑っていた。

「お前はずっと高校生のままか。俺たちはすっかり大人になつちましたよ」

不謹慎かもしれないが、高校生の心をずっと持つていらるのは羨ましい。俺たちはこの先、社会の波にもまれて、社会という枠組みにはめ込まれていくのだから。もちろんそれが間違ってるわけではない。俺は今も昔もずっと、そうやって周りに合わせて生きている。ただそれでも胸を張れないのは、

「俺は現実を受け入れたと思つていただけで、本当はその現実から目を逸らしているのかもしれない」

俺の声は寒空の下に溶けていく。

「だから俺は、その矛盾を抱えてこれからも生きていくよ。これからも今まで通りに」

口元から零れる白い息が俺の決意の証拠だ。茜は何も反応しない、その代わりに俺が彼女の写真を優しくなぞつた。心なしか、暖かい気がする。

「今日はお前の誕生日だから。会いに来ようと思つたんだ、誕生日おめでとう」

言うべきことは終えた。しかし、何故か彼女の墓の前から離れることが惜しくなり、俺はその場に腰を落とした。ほんの少しくらい世間話をしても、彼女は怒らないだろう。

「最近、色々なことばかり起つてるんだ。本当に、信じがたいことばかりで……天城紫乃、ハンス・ブリーゲル、アンダーソン・カイル……普通の人間なら、まず出会うこともない奴らばつかりだよ。本当、俺は普通に生きたかったのに」

あまりにも非現実的な自分の言葉に、思わず俺は笑つてしまつた。そして、俺は何も言わない墓石を見上げた。どこか彼女に似て、どんと構えてるような気がしなくもない。

「お前のことだ、どうせそつちの世界でも明るく笑つてるんだろうな。あまり周りに迷惑はかけない方がいいぞ、俺も葵もお前の面倒を見るにはまだまだ先が長そうだからな」

そういうと、俺はやつと重い腰を上げることにした。先ほどよりも、どこか心が軽くなつたような気がする。

「じゃあ、俺はそろそろ行くか。また来るよ」

帰つてくる声はない。当然だ。けれども、やっぱり彼女は笑つている気がする。

いつものあの笑顔で。

墓参りを済ませると、入り口で待っていた人物がぱつと顔を上げた。

「何で、お前は来なかつたんだ？」

「いや、そこまで親しい仲でもなかつたし……気まずかつたというか」

「……変なところで人見知り出してくるなよ」

思わず俺は笑いそうになつてしまつた。いつもの彼女のイメージとは真逆すぎる。

「さてと。外も冷えるし、とつとと帰るか」

「うん」

そういうと、彼女——リニアは俺の腕に手を回してきた。いつもの俺なら、離せとかいつて振り払うのだが、今はそんな気分になれない。ただでさえ気温は氷点下だ、単純に暖かさを欲しているのだろう。それにバス停まではあと少しだ。たまには、いや、一年に一回くらいは黙つてこのままでいてやろう。

ちらりと、彼女を横目で見る。てつきり振り払われるはずでいた腕が何もしないせいで、ほんの少し動搖した様子が伺える。そんな態度をされたら、俺も気まずくなるだろうが。

結局、彼女の腕は離れることのないまま、俺たちはバス停にたどり着いた。数分でいける距離のはずなのに、三十分以上もかかつたような気分だ。

ふと、何かが頭上に落ちた気がした。ぽつり、ぽつりと次々にその白い塊が空から落ちてきた。

「雪だ」

今日は快晴になると聞いていたはずなのに、いつのまにか空は灰色に覆われていた。

「わー!! 雪だ!!」

俺の腕から離れたりニアは、子供のように嬉しそうな顔をしながら空を見上げた。そして天に向かって両手を広げる。初めての雪でもないだろうに、何故そこまで盛り上がるのか。だが、彼女の横顔を見てると、自然と俺の口元にも笑みが浮かんでいた。

「聰太？ どうしたの？」

「いや、何でわなー」

リニアは不思議そうな顔をしたが、再びその顔は笑顔へと戻った。随分♪機嫌なのか、彼女はそのままバス停の前でしゃしゃりと鼻歌父じりに回り始めた。

「Well you done done me and you bet I felt it.... I tried to be chill but you're so hot that I melted I fell right through the cracks and now I」

綺麗な歌声だ。そう言えば、リニアはヨーロッパの北の方で生まれたんだつか。通りで雪が似合うわけだ。透か通るような銀髪が、雪で霞む世界に溶け込む。柄でもないが、俺はそれが綺麗だと思ってしまった。

「Before the cool done run out I'll be giving it my best. And nothing's going to stop me but divine intervention...」

「リニア、やれなんて曲〜」

俺が尋ねる、彼女は照れくらべうな笑みを浮かべて、俺の腕を握りしめた。

「——I'm yours]

翌日。俺は大学の図書館にいた。しばらく事件がごたついていたので、全く勉強をしていかなかったからだ。参考書とノートを広げ、準備は万端だ。しかし、俺の視線は携帯に向けられていた。勉強前の一休みというやつである。かれこれ一時間は経とうとしているが。

メールやカレンダー、様々なアプリを暇つぶしに触っていたが、気まぐれに俺は電話帳を開いた。思った通り、電話帳は数人ほどしかない。何百人も登録できるなどという謳い文句は俺には必要ないのだ。

大学生活も残すこと約二年。別に自ら孤独を選んでいたわけではない。ただ忙しさに追われていただけだ。友人なんていらないというわけではない。人間関係にも時間と金銭は必要なわけである。

それに全くいないわけではない。たまに会えば、軽く会話する程度の友人はいる。もちろんそんな人たちとは、卒業すれば二度と連絡をすることもない、そんな薄い縁だろう。

三月末、季節もそろそろ変わる頃である。俺は春から大学三年生になる。

先のことを思うと気が重くなつた。俺は携帯をしまうと、目の前の参考書に向き直つた。まるで文字が生き物のようで、全く頭に入つてこない。誰かが、果たしてお前にこの文章が理解できるのか？と問いかけているようにも思える。

「こんな気分で勉強できるわけがないだろ」

俺は早々に予定を切り上げて、図書館を後にした。来た時よりも、足が重たく感じるのは気のせいではないだろう。

\*\*\*

「がお～」

「……」

「がお～」

「何やつてんだ」

図書館を出ると、見慣れた女が妙な声を上げて立っていた。リニアだ。ある意味驚きはあるが、それ以上に冷静さが勝ってしまい、俺は至極真っ当な返事をしてしまった。

「が、がお！」

「腹でも減つてんのか」

すると、彼女は不満げな様子で地団駄を踏む。どうやら不正解のようだ。そのおかげで、やつとりニアは奇声をやめて、人間が理解できる言葉を話してくれるようになった。

「お、驚かせようと思つたの」

「あー……全然驚かなくてごめん」

「ちよ、謝らないで!!」

リニアは恥ずかしそうに俺の肩を叩いてきた。地味に痛い。

「うん、今度はびっくりさせてあげるから。もう少し研究しとくわ」

「いや、まじでやめる」

俺にも、周りにも迷惑すぎる。

俺は再び歩き始めて、学校の出口へと向かつた。もちろんリニアは後を追つてくる。

「それで？お前は何の用だ？また遊びに来たのか？」

「ううん。そうちやんに会いに来たの」

そういつてリニアは後ろ手に組み、ご機嫌そうにスキップをする。見るからに、のんびりそうな日々を過ごしているように思える。

「昨日もあつただろうが」

「そうだけど、今回は私から提案しようかなって」

何が違うのか俺にはまったくわからん。乙女心とは複雑なものだ。

しかし、隣を歩くりニアの顔はとてもたのしそうだった。だからだろうか、いつの間にか俺の足取りも軽くなっていた。

リニア・イベリン。俺の隣を歩く女。年は教えてくれないが、おそらく俺より上なのは確かだろう。背もでかい。といつても、俺より数センチほどなので、今後俺にも勝算はあるはずだ。楽観的にいこう。外見は、悔しいが美人といえるだろう。何よりもきれいな銀髪に碧眼の瞳、それに加えてスタイルも整っている。おかげで俺は彼女と歩くたびに、周りからの視線に怯えなければいけない。それほどまでに彼女は周囲からも注目の的だった。

問題は性格の方だが、今となつては俺も慣れたものだ。男性でも女性でも気さく話しかける奴。何より自由人という言葉が当てはまるのかもしれない。

歩きながら、俺は改めて彼女について分析した。俺が訓練所を出て、魔女の弟子と認められた三年前。リニアとはその時に知り合つた。初対面からぐいぐい迫つてきていたが、突然姿を消した奴。いろいろと事情はあつたと聞いたが、それでもやっぱり彼女は自由だつたと結論づけるのが一番似合うのだろう。

大学の校舎を出て、俺は思わず空を見上げた。今日こそ見事な冬晴れだ。この寒ささえ、青空をすつきりと感じさせるためにあるように思えるほどである。

ふと、リニアが俺の前を歩いた。一瞬、彼女の髪が俺の鼻先をかすめる。仄かに香る女のにおいに、思わず俺は顔を背けた。しかし、リニアにはバレバレのようである。

「今、私の髪の毛のにおい嗅いだでしょ」

「は？ そんな変態みたいなこと、するわけないだろ」

「えー、わざと当たるようにしたのに」

この女……確信犯か。

ほんの少し、拗ねたように頬を膨らませるリニア。だが、すぐにその顔はいつもの明るい笑顔へと戻った。やはり、彼女には笑顔が似合っている。

三月も後半、平日ということもあるのだろう、大学はもちろん、帰り道にもすれ違う人は殆どいなかつた。

隣を歩くりニアは楽しげな表情をしているが、何も話さない。対する俺も話題が見つからずにいた。なぜなら、以前よりもリニアが俺に付きまとつてくるからである。これだけ引つ切り無しに会っていたら、自然と話すこともなくなるだろう。

そう、彼女は前回の事件から何かおかしい。

不安……のようなものを抱えているのだろうか。彼女は自分が普通の人間ではないとわかつてしまつた、俺もどうやら普通の人間とは程遠いようである。だから、これはきっと似た者

同士と過ごして不安を和らげたい。そういうことなんだろう。

ケラーの催眠でリニアの体に何か変化があつたのも間違いない。実際、俺は当人ではないから何もわからないが。大きな力を秘めていて、それを自覚しているという点で俺とリニアは根本から異なっている。俺には彼女の心を理解することはできないだろう。

しばらくしてバス停が目に入つた。

さすがに数人の客はいるようで、俺たちは最後尾へと並ぶことにした。三月の末とはいえ、未だに風は冷たい。いつのまにか晴天から曇り空になり、わずかに小雪もちらついていた。そういえば、雪が降っているというのに、傘を差すことも忘れていた。

「春が待ち遠しいね」

ふと、リニアは俺の顔を見て言つた。俺が空を見上げていたところを見ていたのだろうか、彼女は俺の髪に積もつた雪をふつと息で払いのけた。突然近づいた彼女の顔に、俺の心臓は跳ね上がる。努めて冷静さを保とうと、俺は彼女から顔を背けた。そしてすっかり冷え切つた自身の両手に息を吐く。煙のようく白い息がふわりと立ち上がつた。次いで両手を擦り合わせる。多少は暖かくなつたであろう。俺はそのまま両手を、リニアの頬へと当てがつた。

「え、聰太!?」

「……なんだよ」

俺の行動が完全に予想外だつたのだろう。リニアは両目を開けてぽかんと口を開いていた。

「あつたかいか？」

「……うん、聰太の愛情を感じる」

「阿呆」

そんなもの欠片も籠つてないわ。俺は両手でリニアの頬を押しつぶすと、再び自身のポケツトの中へと戻した。

バスはまだ来ない。

「ねえ、そうちやん」

ふと、リニアが口を開いた。数秒間程、何かを考えた後、

「四月になつたらさ、どこか綺麗な花が咲いているところに遊びにいかない？」

「まあ、たまには皆で出かけるのもいいんじゃないか？先生と奏と、葵には俺から声かけと

くよ。あと、ノエルと赤城さんたちも誘うか」

頭の中でいろんな人の顔を浮かべる。しかし、リニアはどこか気に入らないようである。

「そうじやなくて……」

「わかつてるよ……一人で行きたいってことだろ」

「そう」

俺の返答がそんなに嬉しいのか、リニアはふわりと笑つた。そして周囲の視線に目もくれず、くるくると踊り出す。

「おいつ、大人しくしとけよ」

「えへへへ、つい嬉しくて。歓喜の舞だよ」

「こんなところで踊るな」

——三月の終わり、粉雪の舞う昼過ぎ。冷え切つていた俺の両手は、いつのまにか仄かに熱

を帶びていた。居心地の悪さもない、もう彼女との距離感は慣れたのだろう。なんてことない、これが当たり前の平穏。

だが、平穏な日々はすぐに終わつた。

まるで俺には非日常がお似合いだと、言われているかのように。

＊＊

一週間後の早朝、俺はコンピューター室にいた。別に図書館での勉強をあきらめたわけではない。春休み中に履修登録を済ませておかねばいけないからだ。

暖房がついた、ちょっと息苦しい室内で俺は淡々とした表情でマウスをクリックしていく。共通科目の方は取り終えている。あとは必修と選択と……。いろんな科目を見ているうちに、今までに受けた授業の項目に目がいった。懐かしさと共に、内容を思い出してみるが全く記憶にない。そういうものか。

俺は自嘲気味にため息を零した。ふと、窓に目をやる。コンピュータ室は、ほかの教室より窓が大きく作られているため、自然と外に目が行つた。

——今日も雪か。

窓の白さが余計に外の寒さを物語つて いる ようで嫌になる。

再び俺はパソコン画面と向き直つた。俺は基本的に午後の授業は受けないつもりだ。おまけに月曜と金曜も入れたくない。三年にもなれば、多少の融通は利くような日程になつた。俺は満足げに入力を終えると、足早に出口へと向かう。

やはり外は寒かつた。暖房のきいた室内だつたため、余計に寒さが染み入る。

「お？ 鈴木じ ゃんか」

すぐ目の前で聞き慣れた声がした。

「先輩」

「おー、久しぶり」

掛け声とともに先輩が迫つてくる。もちろん俺は先輩からの熱い抱擁を華麗に躲した。

「おいおい、何で避けた。寂しいじやないか、久しぶりの再会だろ」

「何が久しぶりですか。ついこないだ会つたじやないです、俺だけが出席したやつ」

「あー、まあそんなときもあるだろ」

そういうつて先輩は悪びれた様子を一切見せることなく、からからと笑つた。

「……それより、先輩こんなところで何してるんですか？」

「何つて、履修登録だけど。寮のパソコンが壊れちまつてさ、おかげにルームメイトも貸してくれないし、仕方ないからここにきたつてわけよ」

驚いた、こんな雪が降る中、わざわざ学校に。思わず俺は気の抜けた声を返してしまつた。

「先輩も卒業しようという意思があるんですね」

「お前は俺を何だと思ってるんだ」

そういうつて先輩は俺の頭を軽く小突いた。だが彼の顔から笑みが消えてないあたり、まだ冗談の内に済まされているんだろう。ふと、先輩は外の寒さを思い出したのか、自販機で暖かいコーヒーをおごってくれた。おかげで、もうしばらくは彼に付き合わなければいけない、別にいやだというわけではないが。

先輩の口からは何てことない世間話ばかりが出てきた。しかし相手を退屈にさせないあたり、さすがとも言うべきか、俺との圧倒的なコミュ力の差に多少の腹が立つた。まあ、その代償として単位が取れない体になつてしまつたというのなら、それも仕方のない話である。

「そういえば」

最後の一囗をぐいっと飲み干した後、先輩は突然真面目な顔で俺に問いかけてきた。  
「外国人の彼女とはまだ付き合つてるのか？」

思わずコーヒーを吹き零しそうになつたが、何とか俺は踏みとどまつた。

「何ですか急に……それにアレは別に恋人とかでもないですよ」

「何言つてんだ、お前らは立派なカツプルだつただろうが」

どうやら反論の余地はないようである。大人しくその設定を聞き入れるしかないようだ。

「それで？あいつがどうかしたんですか？」

俺は半ばやけっぱちな口調で、先輩に聞き返す。しかし、返ってきた声はまたしても真剣な声音をしていた。

「そばについててやれよ」

「え？」

何故彼がそんなことを気にするのか、そんな疑問より先に先週のある出来事が俺の頭をよぎった。しばらく出かけてくる、と彼女は何てことないよう言っていた。理由はわからない。いや、それ以前に俺はそれを冗談だと思つていたし、今も冗談だと思つている。きつと今頃は幼稚園でゴロゴロしているはずだ。それなのに――、

――胸騒ぎがする。

「ん？ 鈴木、お前このニュース知らないのか？」

ふと、携帯を眺めていた先輩が訝しき声をあげた。俺が聞き返す間もなく、先輩は画面の文字を読み上げる。どうやら、何かの記事を開いているようだ。

「外国人襲撃事件。近所で起きてるらしいぜ、死んだ人もいるんだって。何より、おかしな事件だつて噂で、発見された遺体の髪はみんな白く変色してたらしい、変な話だよな」

先輩は気味が悪そうに顔を歪める。対する俺は、先輩の手元を覗くことで精一杯だった。

「お、監視カメラの映像だつて」

先輩は再生ボタンを押す前に、ちらりと俺の顔を伺つた。先輩なりの気遣いだろう。俺は何も言わずに領き返した。それを合意と捉え、先輩は携帯の画面に指を滑らせる。

動き出した映像。ほんの数秒間の動画だった。しかし、その映像の端には、あいつが——俺の良く知る人物が映つていた。

「……すごいな、よくもこんな映像が世間に流れてるもんだ」

そういうと、先輩はすぐに携帯をしまった。

「鈴木？お前、大丈夫か？」

「あ、俺、ちょっと用事が」

「鈴木、お前顔色悪いぞ」

先輩が心配そうな顔で俺を覗き込んだ、気がする。

いつのまにか俺の体は走り出していた。遠くで先輩が俺の名前を呼んでいる。

しかし、俺は一度たりとも振り返らずに走り続けた。早く、早くと俺の心は焦るばかりだ。汗が頬を濡らしていく。この汗は走ったからなのか、それともこの胸に湧き上がる不快感故の冷や汗か。考えたのは一瞬だった、すぐに俺の思考はクリアされた。今は一刻も早く、あいつに、リニアに会わなければいけない。

「あの馬鹿ツ……」

彼女への苛立ちを吐き捨て、俺は雪の降る街を走り出した。

雪は止まない。世界は真っ白に染め上げられていた。

一步、また一步と足を進めると、踏みつけられた雪の音が繰り返し聞こえる。昔から、この音が好きだった。柔らかさと、それと同時に自身が歩いていると確かに感じさせてくれるこの感触も、誰にも踏みつけられていない白銀の地面でさえも、私は大好きだった。

小さく息を零す。

冷え切つた手足に比べ、自身の熱を確かめる方法はこれしかなかつた。私は一層、きつく傘を握りしめる。微妙に積もってきた。道路にもうつすべりと白い塊ができる。

——昨日も見た景色だ。

余計なものは何も持たず、一週間ほど、私はこの周囲の土地を見回っていた。誰に言われたからでもない、私が決着をつけるべきだと思つたからだ。

私は再び空を見上げた。

うつすら銀色を帶びた空。まるで私の髪のような色をしていた。

＊＊

「なぜ魔法を習つたのか？」

この質問に、幼いころのリニア・イベリンならこう答えただろう。

「父さんに見せたいから」

数年後、それは間違いだと、彼女は気づいた。いや、認めたといつたほうが正確だろう。

「なぜ体術を学んだのか？」

この質問に幼いころのリニア・イベリンならこう答えただろう。

「父さんに見せたいから」

数年後、それは間違いだと、彼女は気づいた。いや、認めたといったほうが正確だろう。今の彼女ならわかつていた。何故自分はそういうふうに答えてしまったのか。それは、すべて自分の都合のいいように解釈しなければいけなかつた、言わば自分に対する理由付けが必要だつたのだ。リニアはそう思つてゐるが、果たしてこれが正解なのかさえも、彼女にはわからない。数年後、再びこの結論が間違いだと気付く可能性もあるからだ。

——人の心は、複雑で、自分勝手で、矛盾している。

リニアは遠い記憶を思い出していた。

彼女の父親は、リニアが妻に似ているという理由だけで彼女を避けていた。それは憎しみでも、怒りでもなく、現実という名の絶望あるいは恐怖からの行為である。

リニアの母親、サラ・イベリン。彼女はリニアを産んで間もなく亡くなつた。それ故、リニアは彼女の顔を知らない。写真もすべて処理されていた。ただ一枚を除いては。

それはハンス・ブリーゲルとの、二人だけの秘密だ。

彼が内密に所持していた一枚、随分と古臭く、おまけに保存状態も決して良いとは思えないものだつたが、リニアはその一度だけ母親の顔を挙むことができたのだ。

当時の彼女には、自身が母親に似ているかはわからなかつたが、この写真に写る女性のような雰囲気を出せば、父親も自身に向き合つてくれるのではないかと、何度も何度も父親に会いに行くも、冷たくあしらわれていた。

当然、子供の心には深い傷跡が残る。そんな時だつた、ハンス・ブリーゲルが彼女に体術を教え始めたのは。ハンスなりの気遣いなのだろうと、大人になつた今の彼女なら理解できる。しばらくして、リニアは自我が確立する年代にまで育つた。様々な感情に揺れる思春期、彼女は金色の魔女に出会つた。突然、家を訪ねてきた、自身の母親の友人だと名乗る女性に、リニアが興味を惹かれないわけがなかつたのだ。彼女が金色の魔女の弟子になるのに、数日もからなかつた。リニアは父親にはもちろん、ハンス・ブリーゲルにも内緒で家を飛び出した。

母親と友人だったから、それだけではない。魔法が使えない体の彼女に、魔女は魔法を教えるといつたからだ。結果的に彼女は魔法を体得したわけだが、それにはいくつかの条件が設けられていた。それは、彼女のような体の場合、魔法を扱う代償として自身の生命を支払わなければいけないというものだつた。魔法を一秒使うごとに、彼女の未来は一秒無くなる。おまけに、綺麗な茶髪は徐々に儂い銀色へと変色した。

銀髪の魔法使い——リニア・イベリン。

全てが見せかけの、作り物でできた名前だ。

だが、彼女は自身の名前を誇らしげに思つていた。リニアという名前には彼女の意思と意志が込められているからだ。ただ唯一、心に残るのは、イベリンという苗字をどうしても捨てられなかつた。理由、それは彼女自身も未だわからないままである。

辺りは夕方になつていた。

リニアは傘を差すことをやめ、くるくると回りながら歩いていた。傍から見れば、非常に機嫌な女性と思われるだろう。しかし、彼女の瞳は薄闇に浮かぶ、小さな雪を捉えていた。何も言わずに、ただただ前に歩き続ける。幼稚園に帰るつもりはなかった。ここ一週間ほど、彼女は自身の財布を片手にネットカフェなどで宿を凌いでいた。

ふと、コンビニのゴミ捨て場に新聞が挟まっているのを見かけた。連日の外国人襲撃事件に関する記事を、リニアは真っ先に探し当てる。

「被害者は、髪の毛が真っ白になつた状態で発見された、か」

リニアは思わず苦笑した。

「そろそろおいたが過ぎる頃合いね」

そういうふう、リニアは再び新聞をゴミ箱に返した。そして、彼女は歩き出す。

「And nothing's going to stop me but divine intervention. I reckon it's again my turn to」

静かな闇に、綺麗な歌声を響かせながら。

\*\*\*

「……何の用だ」

午後。

俺は目の前の、不機嫌丸出しの男の視線を一心に受けていた。

数時間前、大学を飛び出した俺は真っ先に協会日本支部へと足を運んだ。つい先日の一件もある、また葵との交流もそれなりにあると聞いていた柳公平に会うためだ。もちろん葵自身や、アンダーソン・カイルに連絡を取る方が簡単だが、二人とも連絡がつかなかつた。そのため俺は無茶を承知で、彼に会いに来た。

何もアポイントメントを取っていないにも拘らず、俺は数分待たされた後に案内された。大きな会議室のような扉の前で秘書の人とは別れ、俺は一瞬の躊躇もなくその扉を開けて中に入った。

案の定、彼の表情は好ましいものではなかった。心底、面倒くさそうな顔だ。おまけに壁に貼られた禁煙マークのシールに、思い切り煙草の煙を吹きかけている。俺はただ茫然とその姿を眺めていた。柳が灰皿に煙草を置く。さりげない所作からも、彼は重度の喫煙者だとうことが把握できた。

柳はしばらくの間、何も言わずに俺を見つめていたが、どうやら他にもやることがあるのだろう。その視線はすぐに、目の前の机に置かれた大量の書類に移った。

こうして互いに何も口にすることなく数分が経つた頃だ。柳は無言で俺を手招きした。俺も何も言わず、彼の指示に従つた。机を挟んでの距離まで近づくと、やっと彼は口を開いた。

「……何の用だ、何故ここに来た。まだ前回の件から、一ヶ月も経つていないだろうに、本当、いろんな意味で君はすごいな」

呆れたような乾いた笑み。おそらく作り物の笑顔だろう。もともと、彼が俺たち金色の魔女側の人間をよく思っているわけがない。前回の一件で、彼とは敵対した関係だ。俺だつてできればこんなところに来たくはなかつたが、事が事だ。

「新聞を読みましたか？」

そういうつて俺は、机の上に先ほどコンビニで購入した新聞を置いた。前面に出しているのは、例の外国人襲撃事件の記事だ。彼は、その記事を目にした瞬間、あからさまに表情が変わつていた。

「これ、こちら側の人間による事件ですよね」

「なるほど、君は私の口からこの事件に関すること、いや協会と研究所に関するこことを聞きに来たつてことか」

「はい」

俺が頷くと、柳は疲れたように大きなため息を零した。

「あのなあ、前回の騒ぎの後始末がやつと終わつたつてところなのに、私たち協会側が何か仕出かすわけないだろ。それに研究所とも不可侵条約を結んでる。しばらくは何も起きな

いはずなんだよ」

「不可侵条約？」

俺が首を傾げると、柳は馬鹿丁寧に反応をしてくれた。

「はつ、お前のようなガキに話すわけないだろ。常識的に考えてみる、前回の一件でこちらもあちらさんも後始末で忙しいのは間違いない」

怠そうに背中を曲げる柳、そんな男に構うことなく俺はパソコンに手をかけた。そして柳の制止に構うことなく、俺は先ほど先輩が開いていたサイトのリンクを検索する。例の監視力メラの映像だ。

「おいおい、勝手に変なサイトに繋いでくれる……な、よ」

柳は俺の腕越しにその映像を見た。数秒ほどしかないものだが、その一瞬で彼の顔は即座に真剣なものへと変わった。

そして、映像が終わると何度も何度も再生ボタンをクリックする。彼は何も言わずに、じつとその画面を眺めていた。

まるで人が変わったかのような真剣さに、思わず俺は躊躇いつつも、再び彼に問い合わせた。

「本当に、この事件には協会も研究所も関わっていないんですか？」

「いや」

柳はすぐにそれを否定した。

「こいつは、この男はベルコルに違いない」

柳は冷や汗を浮かべながら、画面を必死に凝視していた。

「そうか……こいつか。事件の概略は知っていたんだが、まさかまだこの男が生きていたとはな」

そういうつて、男は一度背もたれに深く座りなおした。事件が心配ということではない、おそらく今後に控えている案件に気が重いのだろう。

「こいつの目的は一体何だと思いますか？」

「目的、目的ねえ……リニア・イベリンしかないだろ」

その名にやつと俺は答えを得たような気がした。遺体の髪を白く染めるなんて行為、無駄以外の何でもない。もしくは、メッセージ性のある仕業だ。それも特定の誰かに向けての。

「そうか……あの男が関わっているのか。やつと後始末も終えて、落ち着いてきたって言うのに。研究所内でも冷静且つ賢明な男だと聞いていたが、所詮は噂か。もしくは、あのテロ事件の一件から本当に蘇ってきたキチガイか」

「狂っているには違いないだろ。今回の事件、関係ない一般人も巻き込まれている」

いつのまにか俺は敬語を使うことを忘れるほど、自身の拳が熱くなっていた。対する、柳はあくまでも冷静な表情をしている。この男の場合、自分には関係ないと思っているのかもしれない。

「この男、今どこにいるんだ」

「いや、わからないからこうして聞きに来たんですよ」

「この狂人を探しているのか」

俺は静かに首を振った。

「俺が探しているのは、リニアです」

その言葉に、柳はなるほどと小さく言葉を漏らした。

「リニア・イベリンが姿をくらましたと？ 賢明な判断だな、最小限に被害を抑えるためには。  
しかし彼女の見込みは甘かつた、か」

やれやれといった様子で、柳は俺を見ながら両手を振った。そして、今度は真剣な顔つきで  
口を開いた。

「あの男の狙いは、リニア・イベリンというよりはその中身、etcの文書だろう。あれはま  
だ彼女と完全に一体となつたわけではないはずだ。といつても、これも最近わかつたことな  
んだがな……胎児の中に隠す馬鹿がいるとは思わないだろ、普通」

私だつたら猛反対する、彼は小さく憤りの声を漏らした。この人にも想う家族がいるのかと、  
内心驚いていると、柳はふと俺に目を移した。

「お前も気を付けた方がいい。知つての通り、ingなしではetcの文書とリニア・イベリンの  
体を引き離すことは不可能だからだ。大人しく金色の魔女のところで、事態が収まるまで避  
難していた方がいい。彼女に比べたら、お前の方があんまり簡単に捕らえることができるだろ  
うからな」

そう言つて柳は再び煙草を取り出した。話を終えたつもりだらうか。俺にはまだ聞きたいこ  
とがあるというのに。

「それにしてもお前も厄介な能力を持つてゐるこつた。本来、etcはそれを所持している人間の性格が能力に反映されるもんなんだが、お前のbugは規格外すぎる。おかげで、何を仕出かすのかこつちも気が気じやない。というか、それ以上に研究所との厄介事を引き起こさないでくれ」

あくまでも他人事のような態度に、俺はだんだんと腹が立つてきたりニアに危機が迫つてゐるというのに、何の情報も得られず、おまけに俺は大人しく隠れていろだと?そんなことができるわけないじやないか。

俺が反論しようとした直後、彼は付け加えるように口を開いた。

「ひとまず、ここまで話に来たことは賞賛に値する。おかげでこちらも有益な情報を得られたからな。私たちから言えることは、ただ一つだ。今回の事件には、協会も研究所も関係ない。ベルコル単体で起こしている事件だ。そのうち収まるだろう」

「何もするなつてことか」

俺はじつと柳を見据えた。彼は何も言うことなく、煙草に火をつけると、ふつと俺の顔に目掛けて煙を吐き出した。

「けほつ……何すんだ」

「気分悪いだろ。俺らにとつて今のお前はそう映つている。頼むから、大人しくしていてくれないか。おそらく彼女もそう思つている、だからこそ一人で出かけたんだろ」

何も反論ができない。確かにそうだ、俺が今リニアの元に駆けつけても何の助けにもならなかもしれない。むしろ、余計に劣勢な状況にしてしまう可能性も否定しきれない。

柳は煙草の火を消すと、机の書類に手を伸ばした。

「これは前回の事件の後始末が書かれている報告書だ。アンダーソン・カイルが引き受けた件も処理しなければいけない。おかげで今、何が起きているのかすら十分に把握しきれていないのが現状だ。お前が知りたかった情報はここにはひとつもない、これが私の答えだ。もちろんお偉いさん方はすべて知つているだろうけどな」

柳は皮肉を交えて笑つた。これ以上ここにいても、何も新しい情報は得られないだろう、そういう判断した俺は彼に背を向けた。

「ありがとうございました」

一言だけ述べて、俺は部屋を後にする。扉が閉まる直前、ちらりと彼の姿を伺うと、柳は既に机の書類に取り掛かっていた。どうやら忙しいというのは本当のようだ。

ふと、俺は廊下の窓から外を見た。

相変わらず雪は降り続いている。

\*\*\*

三年前の話である。

彼は当時高校生で、まだ幼い顔が制服の上で気難しそうな顔を浮かべていた。一方、私はと  
いうと既に協会にも名前を連ねており、立派な協会員として働いていた。

みんなでの事件を解決した。三年前の出来事は、それで終わりだ。

一人の少女の死は、彼らの心に深い傷を残し、私たちはそれぞれ自身の道を歩いて行つた。  
私も、海外出張とは名ばかりの逃避生活を送り、ついでに彼が私の事を気にしてくれていた  
らしいな位のことしか考えてなかつた。

三年経つて、再び彼に再会した。彼は以前に比べて変わっていた。大人になつたのは確かだ

が、それとは別に、より現実に執着するようになつていていたとでも言うべきだろうか。しかし、三年前より素直に感情を表現できるようになつていたので、その点は本当に喜ばしかつた。

私は深く呼吸をする。至つて違和感はない。

もし、私の体が普通の人間で、彼がingという能力に苦しめられていたのなら、私はそつと彼に寄り添い続けるだろう。

けれど、この体は普通じやない。

能力を使う度に生命力というものが削られていくらしい。予想通り、その反動は凄まじかつた。etcという能力自体、能力者の精神力や疲労を伴うとされているが、彼らは自身でその力を制御することが可能だ。

しかし、この体は制御といふものがないようである。一定の力を放出することしかできないようだ。

そういえば、昔、先生が言つていた。

彼女曰く、etcとは頭の中にある一種の壁のようなものだという。生まれた時から能力を使用できる赤子は、その壁が既に壊れているに過ぎない。つまり後天的にetcを覚醒させるに

は、その壁を破壊すればいいと。壁とはすなわち、現実と虚構との壁だ。

人は自身の眼に映るものを真実、現実と捉える。そういう仕組みで生まれてくるのだと。しかし、それは偽りだ。目に見えるものだけで、世界は成り立っているわけではない。おそらく、奏の一件も同じ原理だろう。

奏は自身のトラウマ、いわば虚構と、現実とを受け入れて一つにした。だから奏はetcを覚醒させたのだろう。

果たして私は何なのだろうか、私の中にも受け入れていない虚構が存在しているのだろうか。それとも、この体は既にそういうものとは関係ない存在なのだろうか。

「怖い」

自分でも気づかないうちに言葉が漏れていた。

「そう、私はずっと弱虫のままなんだ」

雪は降り続いている。先ほどよりも勢いが増してきた。

私はしばらく雨宿りをしていた建物から立ち上がり、再び傘を手にした。

「あと少し。絶対に見つけてやる」

\*\*\*

一日中、歩いていると言つても過言ではない。

リニアは今が何時なのかさえもわからなかつた。携帯も置いてきたため、時間を確認する」とも、誰かが心配しているのかさえも、彼女は知る余地もなかつた。

雪は止まない。

ふと、彼女の前方に何か物体が転がっていた。リニアは近づき、その場に腰を落とした。物体と思われていたそれは、人だつた。死んではいないが、重傷を負っているのは確かだ。

物

リニアは懐から紙を取り出すと、けが人の体に張り付けた。ぼうっと、青い光が一瞬だけ周囲に浮かび上がる。完治はしていないが、血も止まり、朝には目が覚めるだろう。

そう思うと、再びリニアは歩き出した。

——近い。

この一週間、いろんな場所を巡り歩いていた彼女だが、徒歩で歩くことにより、この街の広さを改めて実感したようだつた。そして何より、人が少ない。例の事件のせいで、外国人はもちろん、それ違う人も殆どいない状況だつた。

ふと、リニアは道の真ん中で立ち止まつた。そして、傘を折りたたむ。真っ白な地面に立つ一つの影。闇夜に溶けることなく、男は彼女の前に立つていた。

——やつと、見つけた。

\*\*\*\*\*

雪は未だ止まない。いつのまにか灰色の空は、真っ黒に染まっていた。深い闇が辺りを包み込んでいくが、彼らはそんなことを気にすることはない。

一歩、また一歩。ゆっくりとリニアは目の前の男に近づいていく。彼はこの一週間、ずっと追い求めてきた存在だ。リニアは走り出したくなる衝動を抑えて、静かにその体の動きを止めた。

「随分と大きな騒ぎを起こしたみたいね。というか、あなた死んだんじやなかつたの？」

「死んでいたら、俺は今ここにいない」

「それもそうね」

リニアは、まつすぐと男の顔を見つめた。男の名はベルコル。彼女もよく知る人物だ。互い

に何も話すことのないまま数秒間が経つた。先に口を開いたのはベルコルだった。

「天城紫乃が完全にキルヘンを侵食したようだな。そうでなければ、彼女が俺にあんな反応見せるはずがない、理由が思いつかない。これは非常に問題だ。早くあの女から切り離さないと、キルヘンが死んでしまう」

「は？」

リニアは彼の言葉を一笑に伏した。そして憐れみを含んだ瞳で彼を見据えた。

「それはあなたの誤解よ」

「何だと？ 誤解？ そんなわけないだろ、そもそもキルヘンを知らないくせに、どうしてそんな風に言い切れる？」

ベルコルの顔は狂気に満ちていた。しかし、そんな男に構うことなくリニアは今一度、足を進めた。

「どうでもいい。そんなことはどうでもいいわ、それよりもあなたは今回の事件を引き起こした責任を取らなければいけない」

瞬間、リニアは勢いよく足を踏み入れた。そして、傘を持った手を思い切り振り下ろす。彼

はリニアの攻撃を素手で受け止めると、大きく後ろへ後退した。男の体重を受け止めた雪が、鈍い音を立てる。

しかし、リニアの攻撃はそれで終わりではなかった。まるで傘を剣のように見立てて、男の懷に目掛けて振り回す。ベルコルも慣れた様子で、彼女の攻撃を躱していた。

武器といつても、彼女が手にしているのは普通の傘だ。殺傷能力も低ければ、相手を威圧する力もない。

リニアは仕切り直しとばかりに口を開いた。

「生き延びることができたのに、何でまた戻ってくるかな。それに余計な騒ぎまで起こして、他人に迷惑かけないと生きられないのかしら」

「迷惑？ 何故、迷惑だと言い切れる、リニア・イベルン。大体、天城繁乃という女が悪いんだ。何故etcの文書などという大事なものをお前なんかの体に埋め込んだんだ。やはり、キルヘンは天城繁乃に取り込まれてしまっているのか」

「お前なんか、ね。あんたみたいなストーカーにそんな風に言われる筋合いないんだけど」

「黙れ!!」

112. psd

怒号と共に、ベルコルは彼女に急接近した。しかし、ベルコルは彼女の顔を見て、はたと目を大きく見開いた。

——リニア・イベリンは笑っていた。

普段の彼女の笑顔とは程遠い、見るものに恐怖を与えるほど不気味な笑い方を彼女はしていた。

ベルコルが迫る。リニアは傘を持ち上げ、柄の先を男に向けた。

瞬間、何か銃声のような鋭い音が響き渡った。それと同時に、深夜の街に男の絶叫が響き渡る。

「ああああああああ

ベルコルは地面に倒れ伏し、苦しげに体を曲げた。地面に積もる雪が赤く染まっていく。まるで絵の具を零したかのように広がっていく男の血を、リニアはじつと見つめていた。その瞳は、昆虫を観察する小学生のように、好奇心に満ち溢れていた。

「お前……俺に、何をした」

非常に荒い呼吸を続けながら、ベルコルは彼女を見上げた。何が起こったのか全く把握できていないのだ。対するリニア・イベリンは未だに不気味な笑みを浮かべていた。

ちらりと、男は彼女が手にしていた傘に目をやつた。一見、なんてことない普通の傘に見えるが、それはただの傘ではなかつた。傘の柄には弾丸のようなものが仕込まれており、いま、彼女は傘の先からそれを発射したのだ。拳銃よりははるかに威力は劣るが、男の体を貫くには十分だつた。かつて一大統領の暗殺にも使われたとされる仕込み傘。男は完全に虚をつかれたのだ。

「思つたより弱いのね」

リニアは男の前に立つと、再び傘を持ち上げた。ベルコルにとつて、今度こそそれは武器以外の何物でもない。

彼は一步、また一步と後ろに下がるが、

「ああ、あんたが生きていたと知つていたら、先生はきっと会いたかつただろうに——さよ

なら」

次の瞬間、鋭い音と共に傘の柄からは煙が立ち上っていた。

〔So I won't hesitate no more, no more. It cannot wait I'm sure...〕

倒れた男を一瞥やる、リリトばくねつゝ方向を変え、再び夜の街へ繰り出しついた。  
雪は未だに止まない。

\*\*\*

前回の事件が終わってすべてのことがある。

「今後どうするつもりだ」

俺はすべての戦闘を終えて、この場を立ち去ろうという男の背に声をかけた。男——ケラーは、協会のへりではなく、おそらく自身の仲間が乗っているへりに向かう途中だつた。彼は淡々とした表情で俺に振り返る。

「言つたはずだ、俺はしばらく身を隠す」

「俺には何も考えたくないからつて言葉が、後ろに付いているように聞こえるけど?」

軽く挑発してみるが、ケラーは相変わらずの無表情だつた。再び、彼はへりに乗りこもるをするが、ふと、何か言い忘れたかのようにこちらに振り返つた。

「おそらくベルコルは生きている」

ケラーは俺の眼を見て、そう言つた。だがすぐに彼は俺から視線を外し、

「いや、これは私の憶測に過ぎないな。それに俺には奴が生きていようが死んでいようが、どうでもいいことだ」

彼は明確に断言することはなかつた。そして、ケラーはそのままへりに乗り込むと、どこか遠くの空へと消えていった。

俺になんとも歯切れの悪い言葉を残して。

これが前回の事件の最終顛末だ。俺はてっきりベルコルは死んだものだと信じていた。だから、あの映像に映っていた男も、もしかしたら——と、心のどこかで否定したがっている自分がいた。

協会日本支部を出てすぐ、俺はポケットから一枚の紙を取り出した。柳との話を終え、廊下を出た直後、彼の秘書から手渡されたものだ。おそらく、あの建物のセキュリティはそれほど強固なものなのだろう。

「下手には喋れないってことか」

そつと、俺は紙切れを開いた。

するとそこには非常に簡潔な言葉で、『例の廃ビルに行け』との内容が書かれていた。例の廃ビル、思い当たるのは一か所だ。一番初めの、最も本格的な戦闘を行った場所だ。Mr. Modificationがいた、あのビル。協会が管理する権限を得たとはいって、現在も誰にも手を付けられず、そのままの状態であることを以前誰から聞いた覚えがある。

あまり気が進まないが、今手元にある唯一絶対的な手がかりに違いない。

俺はバス停へと急いだ。

\*\*\*

俺はバスの中からぼんやりと流れしていく風景を眺めていた。何も考えず、ただ目的地の名前が呼ばれるまで、俺はずつと降り続ける雪を見ていた。ただ黙つて、先生のところで隠れているよりはこうやつていろんな所にぶつかりながら進んでいく方が、よっぽど俺の性に合っていた。

バスに乗つて数十分、道が混んでいたとはいえ、思つていた以上に早く着いてしまつた。いや、単に俺の気が進まないだけで、普段なら遠いと感じていたに違いない。

建物外観は以前と変わらなかつた。入り口も封鎖されていない。

俺は手袋をはめて、そつと中へ入った。壁に所々戦闘の跡が残っていた。戦闘の後といつても、血はひとつもなく、崩れた瓦礫や、何かが焦げた跡といったくらいだが。

俺は懐中電灯を片手にさらに奥に進んだ。

ふと、俺は高校時代を思いだした。親には無料で勉強を教えてくれる先生のところに行く、などと適当な嘘をつかされ、日々地獄のような訓練を行つていた。まあ、その訓練時代があつたおかげで俺も簡単な魔法くらいは扱えるようになつたのだが。

思わず、俺は昔の事を思いだして笑つてしまつた。おかげで張りつめていた緊張の糸が、徐々にほぐれていく気がする。実際、俺はこんな真っ暗で、戦闘があつた場所を平然とした顔で歩けるほど図太い神経をしていない。楽しかった過去を思い出して、恐怖を紛らわせていたのだ。

一階の奥までたどり着くと、改めて俺はぐるりと内部を見回した。

血は一滴も落ちていないといつたが、室内には至るところに「影」であつた機械人形の残骸が散らばつていた。微かに腐臭も漂つていて。

「葵のやつめ……いつたいどれだけ暴れたんだ」

俺は思わず懐からマスクを取り出した。一度意識してしまうと、徐々に腐臭がきつくなつていく気がしたからだ。

「冗談じゃない」

今にも人形が起き上がりつて俺に襲い掛かるのではないか、そんな恐怖を抱きながら俺は階段の方へと向かつた。

ふと、途中でエレベーターに目をやる。前回の戦闘では、影に囲まれて使う余裕がなかつたものだ。

「え」

俺は思わず自身の眼を疑つた。

「地下……？」

エレベーターの表示には確かに『B1』と書かれていた。前回、上に向かうのに精いっぱいで全く気にも留めなかつたが、この建物には地下があるのか。

電気は通つていないので、さすがにエレベーターは使えないが、どこかに下る階段があるはずである。俺はひとまず二階に上のをやめて、地下に下ることにした。

「秘密は地下にアリつてのが定石だな」

地下への階段は思いのほか、簡単に見つけられてた。上の階段とは別の方向、鉄の扉一枚挟んだ向こう側だ。鈍い音を響かせながら、その扉を開けると、中は完全に闇だった。

「……行くしかないか」

正直、この先に行くのは怖かつた。暗いのはもちろん、何がいるかも、何が置いてあるのかもわからない。ホラー映画なら、ここからが見せ場だとばかりに恐怖の連続になるはずだ。

俺は首を振つて、自らの想像を否定した。そもそも協会の管理下に置かれているなら、彼らも事前に内部の調査は済ませたはずである。大丈夫、何も出てこないぞ。

ゆつくりと階段を降りていく。前方を照らす明かりは手持ちの懐中電灯ひとつだが、このよう人に一人分ほどの狭い階段にはびつたりだ。

「えつ」

思わず心臓がひゅつとなつた。目の前に人間の足のようなものが見えたからだ。俺はすかさず懐の紙に手をかける——が、それは動く気配を見せない。俺は静かに足元の明かりを上部

に持つて行つた。そして一息をつく。

その体に上半身はなかつた。むしろ、人間の足と思われたそれも、よく見たら関節部分に奇妙な線がいくつも入つてゐる。

「影……の失敗作か」

俺はさらに奥の方へと明かりを向けた。

すると、ちょうど俺は地下の階段を下りきつたようで、ここは狭い廊下の出口のような部分だつた。廊下の両側には複数の部屋が設けられており、先ほどの足は手前の部屋のものだろう。俺は、ちらりとその中を覗いてみた。

「なんだ、これ……」

開いた口が塞がらなかつた。それほどまでに、俺は衝撃を受けていたのだ。

部屋の内部は、狭い廊下からは想像できないほど広いスペースをもつた研究室、いや保管室とでもいうべきだらうか。SF映画でよくあるような、液体の入つたタンクに一人、一人、人形が収められていた。まだ開発途中だつたのだらう、タンクの側では無残にも破壊された影たちが転がつていた。

俺は急激に背筋が凍るような気がして、懷中電灯を持つていた腕を下ろした。特に意味はない、だが、どうしても人形たちの顔に明かりを向けてはいけない気がしたのだ。タンクの機械は止まっている、おそらく何かに襲われるという心配はないだろう。それでも一瞬、この人形たちはいずれ改造人間になるかも知れなかつた、そう考えると顔を見る気にはなれなかつたのだ。

ふと、部屋の奥の方に散らかつた机が見えた。ここでどんな研究がおこなわれていたのか、少しでも知りたかつた俺は、興味本位でその机へと近づいた。

机の上にはたくさんの資料のようなものがあつた。もちろん資料の殆どは、難しい外国語で書かれていたため、俺には読解不能だ。おまけに古いものなのか、黄色く変色しているものばかりである。だが、一枚だけ誰かの手書きで書かれた紙を見つけた。

しわ一つないそれは、おそらく一番新しい資料のようである。etc' imgという文字が書かれているのを見つけると、俺は何となくそれを手に取り、所々危うげな翻訳をしてみることにした。

『目的は単純だ。etcの文書を発見した後、ingを利用して無理やり分離する。そうなると、文書は私のものである。しかし、この作業は非常に難しい。まず初めにetcの文書がどこにあるのか。私は長年調査した結果、金色の魔女により、その文書は赤子の体内に隠されたと

わかつた。赤子の体内から文書を取り出すにはどうすればいいか、私はingの力を使うしかないと気付いた。以前とは別の理由で、imgという能力が必要になつた』

大まかに訳してみたが、こんなところだらう。自分ひとりで英文を訳せたことに満足感はあるものの、それ以上にこの紙に書かれていた内容に驚きを隠せなかつた。

「どういうことだ、この紙を書いたのは一体……」

ふと、もう一枚、似たように手書きで書かれた紙が視界の隅に入った。俺はすかさずにそれを手に取ると、再び翻訳作業を開始した。

『キルヘン、キルヘン。私は君のために準備をしている。墓場で会おうと言つた君の言葉を毎日、毎日思い出している。ああ、君は可憐で美しい。醜い体に閉じ込められて、君はまだ自由になれない。だから、私が助けに行こう。早く、今すぐに。そもそも研究所の人間が、無理やり君を復活させたのが間違いだつた。もつと慎重に行うべきだつた。だから君は復活した後、あそこから逃亡したのだらう。キルヘン、私の愛しのキルヘン、天城紫乃が君を支配する前に、私が君を救い出そう。これは私の現実だ、そしてこれは私の愛だ』

ストーカー、俺の頭に浮かんだのはその言葉だけだ。今すぐ紙を破いてしまったくなるほど、気持ちが悪い。間違いなく、この紙を書いたのはベルコルだらう。

俺は他にも彼が書いた紙はないか、机の上を探ることにした。

瞬間、右手の掌にいやな感触を感じた。このねつとりとした、いや、微妙にべつとりとしたこの感触。俺には覚えがあつた。

——血だ。

固まりかけた血が机の上に広がっていた。そう、固まりかけた血だ。

通常、血液というものは空気と触れて凝固する。この地下は俺が入るまで密閉されていた。もし、協会の人間が捜査を行つたとすれば、それはだいぶ前の話である。当然、ここに残されている血液も固まるだろう。

俺は妙に早くなる心臓の鼓動を感じた。

この血液は固まりかけているとはいえ、ほとんど濡れたままだ。まるでつい先ほど流れ出たものが、俺がここに侵入したことにより固まり始めたとでも言うかのように。

俺はすぐに懐に手を置き、辺りを懐中電灯で照らした。  
誰かが、この空間にいるのか。

「——いや、いたのか」

よく見ると、床には血痕のようなものが落ちていた。入るときには気づかなかつたが、それは入り口と出口を往復していた。おそらく、何者かがここにたどり着き、また出ていったといふことだらう。いや、もう何者かなどと言わなくとも正体は明確だ。

「ベルコル」

ここは奴のアジトのような場所だつたのだろう。しかし、これはどういうことだらうか。ベルコルは負傷しているとみて間違ひないだらう。  
では、誰にやられたのか。

考えていたのは一瞬だつた。いや初めから薄々、感づいていたのだ。柳がここを示した意味も、全てここに繋がる。これが彼の示したかつた、リニアに關する手がかりだ。

「くそつ、回りくどいことしやがつて」

彼女がペルコルを攻撃した。そして、今ペルコルはここにいない。導き出せる答えは一つしかない。

奴はリニアに復讐するつもりだ。

俺は勢いよく階段を駆け上ると、そのまま外に飛び出した。

\*\*\*

雪は未だに降っていた。

俺は勢いよく魔ビルを飛び出してきたものの、リニアがどこにいるかはわからない今までいた。ただひとつ、彼女に危機が迫っていることを除いては。

——考えろ、考えろ。冷静になるんだ。

そうして出てきた答えは、ひどく単純で、救いようがないほど情けない選択だった。

俺は最寄りのバス停まで走り、そこからは見慣れた道をできる限りの力を振り絞つて走り抜けた。

「あ……あ……」

口から白い息が次々と漏れていく。まるで全身から湯気が出ているのではないかと思う程、俺は汗だくの状態になっていた。

「見えた」

俺は目的の建物を見つけると、僅かに歩を緩める。ここはずつと俺がお世話になってきた場所だ。何があつても、あの人なら、金色の魔女である先生なら、今回の件もきっと何とかしてくれるはずだ。

そう思つて俺が玄関の扉を開けようとした直後、

「鈴木聰太？」

背後で声がした。振り返ると、そこには厚手のコートを身にまとつた少女たち。スコップを片手に声をかけてきたのはノエルだ。その横には奏もいる。

「お前ら……何してるんだ」

「雪だるま」

よく見ると、彼女のたちの後ろには、たつた今出来上がつたばかりの、のつぺらぼうの雪だるまが鎮座していた。

「……随分、大きい雪だるまを作るんだな」

思わず零れた自身の声が妙に落ち着いていて、俺も驚いた。だが、仕方ない。こいつらにはいつもと変わらない日常があるつてだけで、俺は安心したんだ。

「ところで、この雪玉はどうやつて持ち上げたんだ？」

「内緒」

130.psd

「うん、内緒」

そういうて、彼女たちは唇の前で人差し指を立てた。随分と仲良くなつたものだ、俺は風邪ひくなよと一言残して、再び幼稚園の扉に手をかけた。だが、中に入る前に何かが俺の服のすそを引っ張つた。奏だ。

「リニア、どこに行つたの」

「……さあ。雪が降るのが珍しすぎて、どつか遊びに行つてるだけだろ。きつとすぐに帰つてくるよ」

俺は奏の眼をまつすぐ見て、あくまでも平然とした様子で答えた。むしろ、俺はそうあつてほしいと願つているのだろう。

奏は何も言わずに、俺を見据えていた。

「多分、あいつは平気だろ。だからそんなに心配しなくても大丈夫だ」

必死に、俺は奏に心配をかけさせまいと声をかけた。だが相変わらず、彼女は何も答えない。俺の真意を測りかねているかのようである。

「そういえば、奏たちも春休みか」

「うん」

やつと奏は返事をしてくれた。その顔は無表情だが、先ほどより不安な様子は薄らいだように思える。

「あ、あそこの改造人間監督の雪だるま、あまり大きくしすぎないよう言つといてくれ。このままの勢いじや、とんでもない高さのやつを作りそ<sup>う</sup>だから」

「わかった」

いつのまにか、奏の手は俺の服から離れていた。名残惜しそうに俺を見上げる目を避け、今度こそ俺は幼稚園の扉を開ける。

「奏、大丈夫だからな」

扉を閉める直前、最後に俺は奏の頭を軽く撫でた。

ふと、俺を見上げる瞳は仄かに熱を帯びた気がする。

いや、これも今まで全速力で走ってきた俺の体が持つ熱のせいだろう。

いつも通りに扉を開け、いつも通りに靴を脱ぐ。

先生は教室にいた。普段は怠けているように見えて、やるときはやる。社会人としての務めを果たしている姿はやはり凄いなって思つてしまふ。

彼女は俺が室内に入つても手を止めることはなかつた。敢えてそうしているのか、仕事に熱中しそぎて、俺が入つてきたことにも気づいていないのだろうか。

「ここにちは

「うん、久しぶりね」

先生は驚くことなく、簡単な返事をしてくれた。おそらく後者の可能性はゼロだつたのだろう。

「ソファー、座つていいか?」

「別にわざわざ聞かなくてもいいわよ」

そういつて先生は再び目の前の書類へと取り掛かった。コンピューターがあるというのに、何故か彼女は自筆にこだわっており、おかげで室内にはストーブが燃える音と、ボールペンを滑らせる音のみだ。

俺はどう切り出すべきか悩んでいた。早く聞きたいが、うまく言葉をまとめられる自信もない。

そんな感じで無音のまま、数分経った頃だ。先生が軽いあくびと共に大きく伸びをした。どうやら切りのいいところで仕事が終わつたのだろうか、彼女は俺の方に顔を向ける。

「何か飲む？」

「おすすめで」

「鈴木くん、炭酸いけるんだつけ？あまり飲んでるイメージないけど」

「それは単に普通のお茶より高いから買わないだけで」

「わかってる、わかってる。ここで好きなだけ飲んでいきなさいって」

いや、一本で十分だ。普段ならこんなふうに返しているはずだが、今はそんな気分にはない。俺が何も言わずにいると、先生はお気に入りの炭酸飲料を手にして戻ってきた。

いつもの先生なら一口飲んだ後に何からアクションを取るはすだが、彼女は黙つている。ただ静かに、まるで俺が口を開くのを待つてゐるかのようだつた。

頭の中を整理する。やはり一番に言うべき言葉はこれだろうか。意を決して、俺は先生へと声をかけた。

「……ベルコルは生きていた」

先生は微かに反応を見せたように思える。彼女が手にしていた缶が小さく歪み、再び先生はそれを呷つた。そして息をつく間もなく、先生は一本丸々飲み干してしまつたのだ。

「それで？まだ続いているんでしょう」

先生の瞳に俺の顔が映る。俺はその視線から避けるように、飲み物へと手を伸ばした。そして一口飲む。明らかに水分が足りてなかつた俺の喉に、炭酸飲料は少々刺激が強かつたが、おかげで口が回るようになつてきた。

「リニアがいなくなつた。それにニュースで騒がれている外国人襲撃事件の件。監視映像の内容がネットに流れていた。そこにあの男がいた。おそらくリニアはその映像を誰よりも早く知つていたんだと思う。いや、あのニュースが流れた時点で何か感づいたのかもしれない」

「そうね、私に一切の相談もしないで消えたわ」

先生はどこか情けないような素振りを見せていた。そして、窓の方をじつと見つめる。相変わらず外は雪が降っていた。窓の外の雪を眺める女性、それだけでも絵になるような美しさを俺は感じた。

「そもそも、私に相談をしていればリニアが勝手に走り出すこともなかつた。おそらく自身がetcの本体だとわかつていたから、狙いは自分だと真っ先にピンときたのね。そして自分だけでなく、周囲の人間にも危険が及ぶ可能性があると」

そういうつて先生はソファから立ち上ると、再び奥の方から二本目の飲み物を取り出してきた。

「それで、鈴木君。あなたはリニアを探しているのね。探し出してどうする？あの男と戦う気？」

「そうだと言つたら？」

俺の発言に、すつと、先生の目つきが変わった気がした。

「やめなさい。いくら勇敢な子犬でも、虎の前では一瞬だわ。まだリニアの方が勝算はいく

らかある。あなたはここで大人しくしていなさい」

「ingを使用したら、俺にも可能性が見えてくるんじやないか？」

先生はそれについては何も答えなかつた。ただその先を急かしてくるばかりだ、何をしに」こに来たのか、と瞳が問いかけてくる。

「俺は、俺はどうすればいい？」

「どうして私に聞くの？」

「俺はこっち方面については詳くない。だからこゝに来た。etcの覚醒、いやingを使うにはどうすればいいのかわからんんだ」

先生は真剣な表情で俺を見つめた。

運命開拓能力——ing、俺をずっと苦しめてきたものであり、皮肉にも今は唯一の頼みの綱だ。先生はゆっくりと口を開いた。

「etcの覚醒の仕方は既にわかっているはずよ。あなたが認めていないものを認めるというじる。でもそれが何かは教えられないわ」

「何でだよ」

「そもそも私が教える理由もない、それにここで教えるのはずるいわ。そんな能力があるのに、君は何一つ努力をしていない」

——何だ、それは。

腹の中から熱くなつてくるのを感じた。気づくと、俺は掌をきつく握りしめている。

「大体、ベルコルの件は全部、先生のせいだろ。あの男がいなければ、リニアが姿をくらます必要もなかつた、いや、金色の魔女があいつの体内にetcの文書なんてものを入れなければ、こんなことには……」

「そうね、アル……ベルコルの件はすべて私の責任ね。そこは認めるわ。けど、リニアが私に一切の相談もせずに出ていったのも事実よ」

先生は冷たい目をして言い放つた。確かに彼女の主張もわかる。わかるからこそ、俺は何も言い返せなくなつてしまつた。

「けど」

ふと、先生は自身の言葉を撤回する。

「そうね、あの男のせいで今この街は大変なことになつてる。ええ、とても迷惑ね。でも私は金色の魔女であり、天城紫乃よ。そう、だから天城紫乃ならどう行動するか」

先生、いや天城紫乃と言うべきだろうか。彼女は飲みかけの缶を見つめながら、ぶつぶつと独り言をつぶやき始めた。

「あの男への復讐はもうどうでもいいわ。でも、この街が危険になるつてことは、この幼稚園も危ない、奏もノエルも。私には家族を養う義務がある。リニアはきっと、みんなの、家族の、そして私のためにあの男を倒しに行つたはず」

しばらくして、先生が不意に顔を上げた。

「鈴木君、あなたにとつて現実つて何かしら」

現実、俺にとつての現実——、

「当り前のように学校に行き、当たり前のように友人と会話し、当たり前のように働いて、寝る。それが理想的な現実だ。だから、俺はこんな魔法だとか、協会だとか、研究所なんて、非現実的なものを現実に戻したくて」

いや、違う。現実はここだ。今現在、ここにいる時点で俺は――、

「現実はここよ、鈴木君。非現実だと勝手に決めつけてるのはあなた自身。とつくにあなたの人生は非現実という概念に現実が侵食されているの。あなたはもう立派な大人よ、三年前の子供のままでない。現実とは何なのか、どこにあるのか認めなさい」

まるで金槌で頭を殴られたような気分だった。

俺がずっと見ようとして見れなかつたものを、先生はこうも簡単に見せつけてくる。

お前はいつまで普通であるつもりなのかと。

「でも、あなたがまたこんな世界に関わってしまったのも私のせいだわ。それは本当にごめんなさい」

そういうと先生は、自身の机へと戻つていった。残りの仕事を片付けるつもりだろう。対する俺は、ソファーアに座つたまま動けずにいた。

一番指摘されたくないことを、一番指摘されたくない人物に当てられたのだ。

どんな聖人でも、心穏やかにいられるはずがない。

俺は懐に手を入れると、複数の紙切れを先生の机の上にばら撒いた。

「廃ビルの地下で見つけたんだ、先生宛のラブレター」

先生はじとりと俺に気だるげな視線を向け、その中の一枚を手に取つた。

「鈴木くん、あなたこういう所は本当に抜け目ないわね」

「俺なりの感謝を示したくて、ですよ」

妙に俺の頭の中はすつきりしていた。探していた情報は何一つ手に入らなかつたが、精神的にはここに来た時より、かなり落ち着いている。もう一度、あの雪の下を捜し歩く元気も出てきた。

俺は先生に背を向けて、再び白銀の世界へと繰り出していく。

\*\*\*

「はあ……なんである子たちは、肝心なところで不器用なのかしら。まあ、私も人の事言えないと」

一人残された室内で、天城紫乃はため息を零した。

「さてと、私も行きますか」

立ち上がり、彼女はいつものタンスの扉を開けた。

中に入っているのは、真っ黒なスーツ。夜の闇よりも深い色をしたそれを纏い、彼女は、キ

ルヘン・スイートは扉に手をかけた。

\*\*

『現実とは何なのか、どこにあるのか認めなさい』

先生の言葉が脳内で木霊していた。

「くそつ、俺は俺なりに生きるのに必死だつて言うのに」

幼稚園を出てすぐ、俺はひとまず廃ビルの近くへ戻ろうかと考えていた。なぜなら、ベルコ  
ルは傷を負っている。どこか周囲にも別の血痕が落ちている可能性もあるからだ。  
そう思い、バス停に向かおうと決めた直後のことだった。

ポケットの中から聞こえてきた軽快なメロディ。俺の携帯の着信音だ。相手は、公衆電話と

だけ表示されている。しかし、俺の胸の鼓動を速めるには十分だつた。

「もしもし」

「こんにちわ」

俺が電話に出ると、予想外にも相手の声は平然とした声音をしていた。

「お前、今どこにいるんだ」

本当なら、電話が出た時点でいろいろと愚痴を言つてやろうと思つていた。何してるんだとか、どうして一人で出ていったとか、ありとあらゆる愚痴を吐いてやろうと思つていた。

しかし、実際はこんなありきたりな一言しか言葉にならない。たつた一週間聞かなかつただけだというのに、俺は自分が思つてている以上に彼女の声に安心感を覚えていた。  
電話口の相手は何も言わない。向こうも外にいるのだろうか、受話器からは微かに風の音が聞こえていた。

「寒くないか？」

「寒いよ。けど、もう慣れたかな」

「そうか、それならまあ、よかつた」

何が良かつたのかわからないが、とりあえず俺は何かしら彼女に声をかけたかったのだろう。本当はもつと別の事を言いたいのに、言葉があふれては声にならずに消えていく。そんなもうかしさを抱えたまま、俺は携帯を握りしめていた。

「……それで、何してたんだよ。一週間も、連絡途絶えて」

「あ、うん。まあ御察しの通りかな」

「さつき先生に会つてきたんだ、何で私に何も言わずに行つたんだって、少し悲しそうにしてた」

「先生はもう十分疲れたかなつて。私一人で全部終わらせたら凄いんじやないかなつて思つた」

あくまでも普段通りに返事をするリニア。そんな彼女の態度が妙に腹に立つて、俺はほんの少し声を強めてしまつた。

「何が凄いんだ。周りの人間を心配させで、馬鹿野郎。どうせingだとか、etcだとか余計な」と考えてたんだろ」

リニアは何も言い返さなかつた。再び沈黙が落ちる。相変わらず、彼女は自分が今どこにいるかすら話そつとしなかつた。

「もしかして、そうちやん。私の事探してた？」

静寂を破つたのはリニアの方だつた。彼女の質問に答える前に、俺の心には疑問符が浮かぶ。何で、何でそんなにも震えた声で聞くんだよ。

「そうだよ、ずっと探してた。協会日本支部にも行つたし、廃ビルにもいつたし、お前の十倍はこの街を探しまくつてる」

「いや、十倍は盛りすぎでしょ」

彼女の笑い声が聞こえる。いつも通りのあの笑顔を浮かべているのだろうか。

「そつか、私を探してくれてたんだね。ありがとう、本当にうれしい」

彼女はいつになく穏やかな声をしてそう言つた。しかし次の瞬間には、いつもの明るい声に戻つていた。

「それじやあ私を見つけることはできるかな。結構、難しいよ。ヒントあげよつか？」

「いいや。俺はかくれんぼも鬼ごっこも得意なんだ。すぐに見つけてやる」

電話口から小さく笑う声が聞こえる。先ほどまで不安に押し潰されそうだったのに、今はすっかり冗談を言えるくらいにまで回復した。

「でも、降参する」

確かにリニアはそういった。そして俺が聞き返す前に、彼女は言葉を続ける。

「ベルコルはもうこの世にはいない。だからもうあの事件は起きないし、私たちの周りは平和になる。だから、降参します。もうすぐ会えるよ」

彼女の声はほんの少し、上ずつていた。俺の心臓は再び早くなる。

「いや、どういう意味だよ。ベルコルはもうこの世にはいない……？」

俺の質問にリニアはすかさず答えた。

「私が殺した」

妙に透き通る声が俺の鼓膜を通過していく。無意識の内に、俺は携帯をきつく握りしめていた。

「いや殺したって……お前、人を殺したらどうなるかわかつてるのは？警察に捕まつて、裁判受けて、刑務所入つて、場合によつちやずつとその中にいることになるんだぞ？」

「そうだね、でもあいつは死んでもいい存在でしょ」

「いや、そういうことじやなくてだな。違う……違うんだ、殺人つていうのはお前、もつと、もつと恐ろしいことで。一番やつちやいけないことだ」

リニアはわかっていると答える。むしろ、動搖を隠せずにいるのは俺の方だった。

「でもね、聰太。あの男は私たちに危害を加えようとしていた。そして、関係ない一般人にも手を上げた。研究所にも見捨てられて、協会にも目をつけられていた」

彼女の声はあからさまに普段と異なっていた。興奮しているというよりは、妙に早口になつていても関わらず、その声には全く抑揚を感じられない。俺はついに耐え切れなくなつた。

「リニア、お前今どこにいるんだ。俺が迎えに行く。そこで待つてろ」

「いいよ、私もう帰るから。そうちやんこそ、大人しく幼稚園で待つてて」

「いや、俺が迎えに行く」

「……聰太、私は——つ」

それは突然だった。

彼女が何かを言う直前、何かがぶつかる音と共に小さく聞こえた、彼女の悲鳴。  
そのすぐ後には、何かが倒れる音が聞こえた。

俺は、一瞬で全身に鳥肌が立つのを感じた。冷や汗もぶり返してきただようだ。

——なんだ、今の音は。いや、これもあいつの悪戯だろ。そう、きっと。

しかし、そんな俺の期待は淡い雪のように解けていく。

次に受話器から聞こえた声は、彼女のものとは程遠い声色をしていた。

「ほんにちわ」

男の声だ。それも、俺は以前に聞いたことがある。

「imgの本体だな」

「……ベルコル」

「用件は一つ。俺はあそこで待っている」

男の言葉を最後に、電話は切れた。

ツーツーと、無機質な機械音が耳に響き渡る。頬を流れる汗が一筋。それが雪の上に落ちる前に、俺は既に走り出していた。

真つ暗な室内。静寂が余計にその不気味さを増していた。外では未だに雪は降り続いている、いくら屋内といつても寒さは壁を伝つて入り込んでくる。

「ん……」

リニア・イベリンは目を覚ました。やがて頭部に残った痛みに顔を歪め、自身が何故ここにいるのかに気が付いた。

——油断した。

彼女は自身に対する情けなさと共に、まだ自分は人殺しではないという事実に安堵していた。そして、まずは状況把握へと移る。

リニアの体は椅子に座らされた状態で、手足を縛られていた。おまけに縛つてある縄も研究所特性の頑丈なものだろう。リニアの力でさえ、ビクともしなかった。

徐々に彼女の視界も暗闇に慣れ、辺りを見回す。そこはリニアも以前来たことがある場所だった。いや、彼女が来た時よりも一層荒廃とした空気が増している。おまけに腐臭も漂い、そこら中に壊れた家財や機械が散らばっていた。

——臭い。

リニアの頭は未だにぼーっとしていた。頭部を殴られたせいか、それとも室内に充満したこの匂いのせいだろうか。それでも彼女の心は落ち着いていた。普通の人間なら恐怖に押しつぶされている頃だろうが、彼女の精神は長年の経験の賜物だろう、必死にこの建物から脱出する手段だけを考えていた。

——そう、今の私は人質だ。

彼女はわかつていた。自身の中にあるetcの文書を使用するまで、この体には未だ利用価値

があるということを。

「それにしても、また迷惑かけちゃつたな……」

リニアは意識が途絶える直前まで会話をしていた男の顔を思い浮かべた。そして、申し訳なさそうに小さく笑みを零す。彼女の予想では、当然のような顔をして鈴木はここに来ると思っていた。いつも通りぶつぶつと言いながら、不機嫌そうな面を下げて、彼女のヒーローは迎えに来てくれるはずだと、リニアは信じていた。

「聰太……」

\*\*\*

そもそも私、リニア・イベリンが鈴木聰太を好きになつたのは何故か。

余裕のない姿が自分と重なつたから？それは半分正解の、半分不正解だ。

おそらく彼の人生

観にあるのだろう。

突然、非現実的な出来事に巻き込まれ、多くの悲しみを背負つたにも拘らず、彼は未だに前へ進み続けようとする。普通の人間なら、厭世的な態度になつて投げ出しそうになるというのに、彼はずつと同じように前に進み続けた。今までと変わらず、学生を続け、アルバイトを行い、淡淡と自分が行うべきことは何かを見極めて、それを実行してきた。

そんな彼の姿に、私は憧れていたのかもしれない。

私には出来なかつたことを、彼は当然のようにこなしていく。彼は私とは全く異なる存在だった。

だからこそ、私は彼に惹かれていつたのだろう。

——ただ純粹に、この人と一緒にいたいなど。

「誰かを好きになるのに理由はいらないのかも」

彼がここに来てくれるのはうれしい。けど、彼が危険な目に合うのは嫌だ。せつかく私一人で何とかしようと思つたのに、結局迷惑をかけている。

——ああ、そうだ。

——でも、彼が迎えに来てくれるという保証なんてどこにもないのだ。

\*\*\*

リニアは頭痛がひどく、顔を上げることすらしないまま、じつと床を眺めていた。

ふと、彼女の前方で足音が聞こえる。リニアは視線だけをそちらへ向けた。足音の主は、急

進派のトップである男、ベルコルだ。

「よく生きていたのね。数百年生きていると聞いたことがあるけど、その体も普通じゃないの？」

「その質問に答える義務はない」

男はリニアの質問を冷たくあしらつた。しかし、その顔は冷静というにはほど遠い。口元は僅かにひくつき、身体も微かに震えている。一言でいえば、彼は狂気を纏っていた。

「（）」が（）だかわかるだろう、以前君は（）に来た（）があるはずだ。Mr.Modificationを倒したのは、果たして君たちの中の誰だつたか

今にも大声で笑いだしそうな程、彼の口元は歪んでいる。そんな姿をリニアは、ぼんやりとした瞳で見つめていた。

実際、彼女の脳内は、目の前の男の仕草などどうでもよかつた。リニアはだいぶ前に金色の魔女が言っていた言葉を思い出す。それは、彼女が自身のetcの中のひとつについて説明した時の記憶だ。

曰く、その能力は「子供たちとの再会」という名前である。しかし、そこには多大な皮肉が

込められている。この能力を受けたものは、暗黒の空間に飛ばされ、そこから逃れられることはない。精神を破壊し、狂った最期を遂げるのだと、彼女は魔女から伝え聞いた。

しかし、ベルコルはその空間から脱出した。リニアの中でも、既にこの時点である程度の予想はできていた。男の能力は、「別の空間に移動することが可能な能力」だと。

リニアがしばらく黙りきつていたからだろう、いつのまにかベルコルは彼女の前に立つていた。彼はじとりとリニアを見下ろした。

「リニア・イベリン。銀髪の魔法使いとも言われた女がこのザマとは、情けないな」

「そうね」

「鈴木聰太がここに来るまで、そこまで時間もないだろう。お前にはいくつか聞きたいことがある」

「私がその質問に答える義務はないんじゃない？」

リニアは先ほどの男の言葉をまねた。すると、彼は彼女が思っていたよりも、至極冷静な態度でそれを受け取ると、

「どうか、なら私が一人で話す。お前が答えるか答えないかは勝手にしろ」

リニアはその言葉すら無視した。構わず、男は続ける。

「愛とは何だ？」

「は？」

思わず、リニアは口を挟んだ。しかし、男はなおも続ける。

「私にとつての愛は何百年も続く浪漫だ。それはもう傍から見たら残酷な物語に見えるだろう。私は彼女の美しい姿をもう一度見たくて、ずっと、ずっと生きてきた。彼女は俺の中での、唯一の『本物』であり、私がここにいるという現在を証明してくれている。これが、私の愛だ。私の愛は永遠不变のものだ」

リニアはただでさえ、ぼんやりとする頭で必死に彼の言葉を追っていた。

「わからないか、リニア・イベリン。残念だが仕方ない、お前は所詮キルヘンの弟子でもないからな。天城紫乃という亡霊の下で育ったに過ぎないから。そうだ、あんな研究所の失敗作なんかと。何で、あいつらは彼女を完璧に生き返らせることに重きを置かなかつたのか。愚かすぎて何も言葉が出てこない」

ベルコルは両手で顔を覆つた。しかし、相変わらず指の隙間から漏るのは狂気に歪んだ笑

顔だ。

「ああ、でもそれも終わる。私の思いはついに果たされる」

「どういうこと?」

「鈴木聰太のetc、いやingを覚醒させる。既に三年前の時点で、間接的に発動はできた。二回目はもつと簡単だ。仮に不可能でも、あいつを殺せばまた別の誰かが生まれる。etcは転生し続けるものだからな」

瞬間、リニアは大声をあげた。

「お前!!聰太に手を出したら許さない、殺す。今度こそ、確実にお前を殺す」

彼女は椅子が倒れてしまう程、身体を左右に大きく揺らした。必死で腕の縄だけでも振りほどこうとするが、適わない。彼女の手首は既に真っ赤に染まっていた。

対する、ベルコルはそんな彼女にまるで吠える猛犬を見下すかのように、冷めた視線を向けていた。

「私の愛は何よりも大切なのだ」

「相手が迷惑だと思つてゐるのに気づけないなんて、本当に愚かね」

「もともと、恋愛に迷惑はつきものだ」

「噛みつくような視線を向けるリニアだが、ベルコルは全く彼女の視線に反応することはなかった。

「キルヘン、彼女は本当に美しかった。私は彼女の元で騎士として、すべてを彼女に捧げていた。だが、彼女が道を違えてしまつたのも私の責任だ。私が彼女の心を壊してしまつた。だから私は彼女を以前の純粋で可憐で、美しい彼女に戻さなければいけない」

「はっ…あっはははは」

ベルコルの話が終わるや否や、リニアは大声で笑い始めた。両腕が縛られていたせいで、手を叩くことも、男を指さすこともできないが、その行為ができることすらも惜しんで彼女は笑っていた。

「何が可笑しい」

「何でつて…：おかしくつて。だつて、誰かを好きになるのに理由なんてないでしよう。なのに、あんたは必死で好きでいる理由を見つけているように見えて、ほんと…：あはははつ」

ベルコルは何も言わない。対する、リニアはやつと笑いを収めることができたようである。

「あなたのそれは、愛じやなくて執着よ。それに、先生はあなたのことが嫌いだつたに違いないわ」

「黙れ!!」

パンツと鋭い音が響き渡つた。ついにベルコルがリニアに手をあげたのだ。

「お前に……何も知らないお前に何がわかる!!」

リニアの口元からは血が流れていった。ベルコルに頬を叩かれたことで、口の中を切つたのだろう。それでも彼女の声が止まることはなかつた。

「お前こそ一度も誰かを愛した事がないだろ。お前が言う愛は違う。そんなもの、愛でも何でもない。何百年も生きてきてそんなこともわからないのか、ストーカー野郎」

「黙れ!!」

ベルコルは興奮した瞳で、再びリニアの頬を殴つた。

「ああ、そうだ。こいつの体からetcの文書を取り出せば用済みだ。あと少し…あと少しせ

終わる。鈴木聰太がここに来ればお前の役割は終わりだ!!

男の叫び声が何度も何度も、室内を反響する。

リニアは、何も言わずに彼を見据えていた。ふと、その視線が気になつたのだろう。彼はリニアへと顔を向けた。

「そうだ、安心しろ。私は鈴木聰太を仲間に誘うつもりでいる」

思わずリニアは目を見開く。この男が何を言つてゐるのか、理解できない。そう思つた彼女は自然と口元に嘲りを浮かべていた。

「笑わせないで、聰太があんたの仲間になるわけないでしょ」

「普通に考えればそらう。だが、この状況ならわからないだろ。リニア・イベリン、君は人質なのだから」

ベルコルの口元にも依然と笑みが残つてゐる。リニアはそれがおかしくて堪らなかつた。

「面白い。面白いわね、それじゃあ賭けをしない?私は聰太が断るに賭ける」

「何を賭ける」

「もちろん、私の命よ。彼が断わつても断らなくても、私の命は既に秤の上。その代わり、最後に言葉をかける時間くらいは保証して」

ベルコルはリニアの提案を承諾した。

「すべては鈴木聰太が決める、そういうことか」

\*\*\*

——雪が降る。世界は一面白銀の世界だ。それでも、どこか寂しげに見えるのは、俺の心に余裕がないからだろうか。

「はあ……はつ」

俺は全速力で、あの廃ビルを目指して走っていた。頭の中は真っ白で、携帯電話をポケットにしまったのかさえ覚えていない。

——世界が真っ白だ。

先ほどまで、確かに俺はこの白さを雪のものだと理解していた。だが、今はまるで何も書かれていないコピー用紙のように、無感動で、機械的な白さにしか思えなかつた。いや、本来の世界はこんな風だつたのかもしれない。もはや視界に映るすべてが、真っ白な紙に印刷してあるかのように見えてしまう。

自分が思つていたよりも早く、いや、焦りのせいだろう、俺は例の廃ビルに到着した。そのままの勢いで扉を開ける。

——怖い。

俺の心は、ずっとそう呟いていた。彼女の身に何が起きたのか。壊れた映写機のように、嫌な想像ばかりが俺の脳内を何度も何度も駆け巡り、再生される。

建物内は先ほど以上に暗さを増していた。何も見えない。おまけに、俺は走っている途中、どこかで懐中電灯を落としてしまったようだ。

だが、つい数時間前に来た場所である。何となく何がどの辺にあるのかは把握しているつもりだ。

俺は落ち着きを取り戻すと、階段の方角を目指して歩き出した。嫌な感触が足元から伝わる。おそらく影の死体だろう。構わず、俺はひたすら地下へと続く階段を目指した。

古びた鉄扉を開ける音。先ほどと同じ音に、俺は幾らか落ち着きを取り戻すことができた。  
暗闇——、俺は前方を確認するために、足元の石ころを闇の中へ投げ入れた。

小気味良い音が跳ね返つてくる。ただ、それだけだ。俺は「影」のようなものが襲つてこないと判断し、財布から適当な紙を取り出した。

記してある文字は「光」。俺はそれを身近な壁へと貼り付けた。

瞬間、ぼうつと軽やかな音を立て、周囲に光が満ちていく。壁自体が照明にでもなつたかのようないるさだ。俺は光に照らされた通路を注意深く眺めた。

——血が落ちていらない。

嫌な確認方法だが、これが一番手つ取り早い。俺はリニアが地下にいないと判断し、再び一階へと戻ることにした。

二階、あるいはそれ以上の階にいるのだろうか。俺は反対側にある上り階段の方へと向かつた。以前も一度来たことがある場所だ、それでも警戒は決して怠らない。俺は微かな物音にも反応できるように、鋭く感覚を研ぎ澄ませた。

がさがさ、と自身の靴とコンクリートの階段が擦れ合う音さえ、今は煩わしい。普段なら気

にはならないというのに、衣擦れの音さえも俺は厄介に思えた。

まもなく二階にたどり着く、そう思った瞬間だった。上方、二階よりもさらに上の方から、その声は聞こえた。男の下卑た、奇声のような笑い声が。

俺は階段を上る足を速めた。笑い声はなおも続いている。おそらく二アもあの男と一緒にいるのだろう。

彼女には利用価値がある。そして俺にも。だから、そう、簡単には殺すはずがない。

俺は軽く息をついて、三階へと続く階段に足をかけた。この先に見える光景が、俺の想像を軽く蹴散らしてくれるほど、何も起きていないのだと願いながら。

＊＊

三階——、辺りは真っ暗で、静寂に包まれていた。

「ほんばんは」

ふと、男の声が静寂を破った。未だ姿は見えないが、この声はベルコルだ。俺は冷静な口調で彼に話しかけた。

「リニアはどうだ」

すると、男は声に出して笑うことを堪えるかのように、小刻みに息を漏らす音を立てた。いや、実際は何度も口元から噴き出すような声が漏れている。一言で言うならば、完全に相手は俺の反応を見て楽しんでいるようだ。

「気が早いな、詰めが甘いとよく言われないか？俺を見習え、何百年と待ち続けているこの俺を」

声はやはり、上から聞こえてきた。おそらくベルコルは四階にいるのだろう。

「かつてMr.Modificationを倒した場所、わざわざ俺はこの場所を選んであげたんだ。早く上がつてい、鈴木聰太」

俺は周囲を気にすることなく、一直線に四階へと続く階段に向かって走り出した。

「改造人間にについての話は聞いているか？鈴木聰太。あれは研究所が協会に対抗するため、窮余の一策で見出した奇跡の兵器だった。研究所の人員が増えたのも、この開発が成功したからだ」

階段へと向かう途中、男はずつと関係のない話を続けていた。

「etcも同じだ。現代科学で改造人間という兵器が製造できたことが奇跡なように、etcの能力もあらゆる人間の可能性を秘めた奇跡と言える。それ故、多くの人間を使つた人体実験を行つた連中もいたが、組織というのは情けないな、奇跡はそう簡単に起きないからこそ奇跡だといえるというのに」

やつと俺は階段の手前にたどり着いた。

声は更に大きくなる。

「だが、研究所がそんな方向に走つたのも俺のせ이다。俺がキルヘンを復活させるために、

改造人間を開発し、人体実験を提案した

「いい加減にしろ、お前の自慢話も過去の話も聞きたくない」

「まあ、そう邪険にしないでくれ。ここからは俺からの提案だ。この数か月、君の活躍ぶりを見ていた。その結果、鈴木聰太、君とならうまくいきそうだ。手を組まないか？」

思わず、俺は足を止めた。そして、顔を上げてつぶやく。

「お前は、何を言つてるんだ？」

「私の目的はetcの文書とingだけだ。君が快く協力をしてくれるなら、俺はもう君の脅威にはならない。もう誰かが死ぬのは嫌だらう？知つてているぞ、三年前のあの時、君は友人を亡くしたそうじやないか。もうあんな体験をしたくないはずだ。だからこそ、今、俺と手を組むなら、リニア・イベリンの命は保証しよう」

「俺がここで倒れたとしても、先生がいる」

「キルヘンが俺を殺すわけ、いや、殺せるはずがない。あれはただの亡靈だ」

一步、また一步。俺は階段を上る。

男の声は依然として、俺の鼓膜に響いていた。

「後悔はさせない。君が望む世界を作れるんだ」

その言葉を最後に、男の声は静まつた。俺はやつと一息をつける。

ふと、階段の途中から光が漏れ出している箇所があった。建物内部は前回の戦闘で、幾らかヒビの入っている部分もあつたが、そこにはぼつかりと穴が開いていた。

本当に小さな、人差し指にも満たない小さな穴だ。

俺はそこから漏れ出す僅かな明かりに惹かれて、穴の中を覗いてみた。

外は、相変わらず雪が降つていた。未だに世界は機械的な白さで包まれている。

このまま降り積もれば、全部を綺麗に消してくれるような、この一日をすべてなかつたことにしてくれるような、そんな馬鹿馬鹿しい妄想までもが浮かんてしまう程に。

「目を逸らすな」

俺は自身の体を叱責するように咳くと、再び階段を上り始めた。

\*\*\*

三階から四階までの階段は、今までの半分なのかと思う程、短く感じた。おそらく逸る心臓の音がそうさせているのだろう。

四階は他の階とは違い、大きな窓が拵えてあつたおかげで、室内は外の光で明るく照らされていた。そんな部屋の真ん中に立ち尽くす男。

俺は二回ほどしか見たことがなかつたが、絶対忘れることはなかつた顔だ。

ただ以前と違う点は、興奮を隠しきれない口元と、ひどく充血した瞳。そして体も僅かに震えている。

「鈴木聰太、もう一度だけ聞こう」

ベルコルは興奮で震える手を、俺に向かつて差し出した。

「俺と手を組まないか?」

俺は何も言わずに、じつと男の顔を見据えた。相手も、俺の視線をまっすぐと受け止める。静寂。割れた窓ガラスから入つてくる風だけが、この場の時間は動き続いているのだと知らせてくれていた。

ふつと俺はため息をついた。そして――、

「お断りだ」

ベルコルは無反応だった。

「当たり前だろ、俺がお前と手を組む？冗談。ギヤグにしてはセンスがなさすぎだ」

俺は笑った。対する男は、何も言わずに奥の闇へと消えていった。そして彼は暗闇から何か、重たいものをずるずると引き摺つて戻ってきた。

——それは、リニアだった。

彼女は口にテープを張られ、両腕をきつく縛り上げられていた。ベルコルは勢いよく、彼女の口元に張られたテープを剥がす。僅かに痛みで彼女の顔が歪んだ。

——生きてる。

俺はその一瞬で、すーっと自分の体から熱が抜けていくのを感じた。

——生きてる、あいつはまだ生きてる。

そもそもetcの文書を持つてはいるのだから、そう簡単に殺されるはずはないのである。それでも、俺はひどく安心した。

「鈴木聰太、本当に手を組む気はないんだな？」

「何度も言わせるな、お前のような狂つてやつの仲間になるわけないだろ。お前は自分の快樂を満たすために、この街の人を何人も危険に晒してきた。そう、お前はただの目立ちたがりの勘違い野郎だ」

「黙れ!!」

男はリニアを放り投げて、俺に向かつて一直線に走り出した。そしてすばやく右足で俺の懷を蹴り上げる。鈍い音と共に、俺は無様に後方へ飛ばされた。腹が立つほど、綺麗な攻撃だ。そんな感想を抱くのも僅か、男はすかさず俺の目の前に迫り、胸倉をつかみ上げた。そして、先ほど蹴り上げた箇所を何度も殴りつける。

「ぐつ……」

苦悶の声が口から零れる。男は気が狂つたように同じところを殴っていた。

あまりの激痛に思わず俺は絶叫する。刹那、彼は糸が切れたように俺の胸元から手を離した。力の入らない俺の体はそのまま重力に逆らうことなく、地面に叩きつけられる。

「う……」

男は無表情で俺を見下ろしていた。

「起きろ、死ぬにはまだ早い」

そういつてベルコルは、今度は左足で俺を蹴り上げた。

「あああああああつ」

たださえ痛みが留まっている中、追い打ちをかけるように全身に痛みが駆け巡る。俺は耐え切れず大声を上げてしまつた。そんな俺をベルコルは嗤つていた。

痛みだけが加算されていく。この状態が一番辛いのだという事を彼もわかっているのだろう。

「おい……俺を殺すつもりか？」

そんなことはできないはずだ、俺はingの本体だ、できるはずがない。そう思つて、俺は男を挑発した。すると、彼は笑いをやめ、リニアの方へと歩き出す。

そして、彼女の髪を勢いよく掴み上げた。

「鈴木聰太、自分の立場を弁える。この女の命が惜しくないのか？」

くそつ、腸が煮えくり返るほど腹が立つ。今すぐにも、あの男の顔をぶん殴りたいほどだ。俺は実行し難いことを胸に、敵意を込めた瞳で奴を見据えた。

「わあ、鈴木聰太。わいわいetcを使え。ingを使って、リニア・イベリンの体からetcの文書を取り出せ。そもそも、今すぐ」の女を殺すぞ」

「う……」

ingの覚醒？ そんなもの、こいつが教えてほしいくらいだ。だが、それを言えば男が何をし出すのがもわからぬ。かと言つて、俺がingを使えるわけでもない。

くそつ……どうしろつて言うんだ、こんな時こそ先生に頼つてもいいんじゃないのか？

ふと、俺はぐつたりとしたりニアの瞳と目が合つた。お互ひ、口元からは血がこぼれている。ボロボロだ。

リニアは何も言わない。テープを剥がされた時もそうだった。俺に声をかけることもなく、助けてと悲鳴を上げることもなかつた。ただじつと、彼女は俺を見据えている。そして、ふつと小さく俺の顔を見て笑つた気がした。

窓から零れる光が彼女の横顔を照らしている。月明かりに映える銀髪が妙にきれいで、思わず俺は見入つてしまつた。

——何で、この状況で笑つてるんだ。

——わからない、俺には何もわからない。

「情けないな」

俺は両腕に力を入れて、ゆっくりと起き上がつた。そして壁を横に、何とか立ち上がる。あんな風に笑われるなんて、みつともない。

瞬間——

「Well you done done me and you bet I felt it. I tried to be chill but you're so hot that I melted. I fell right through the cracks and now I'm trying to get back ...」

「ん~」

俺は呆然と彼女を見つめた。対する、ベルコルは訳が分からなくなつた様子で、彼女の顔を殴らうと腕を上げるが、

「——I'm yours.」

「I know.」

自然と零れた声に、俺たちはじからいわなく、笑い声をあげた。先ほどの絶叫はあるで違う声が室内に響く。

「えいっして英語で答えたの?」

「ああ、何こなく。英語だつたから?」

180.psd

「何それ」

そしてまた笑いあう。ベルコルは、何も言わずに俺たちの顔を交互に観察していた。

そして、俺は口元の血を拭うと、大きく両手を広げた。

「ここは舞台、ベルコルとリニア、二人に何か演目を披露するかのように——、

「俺は、認める。俺は、現実から逃げていた。普通じやない、非常識だと決めつけて、俺はそれが現実だというにも関わらず逃げていたのかもしれない。俺の現実はこちら側なのだと、勝手に自分で線引きをしていた」

思えばそうだ、俺は一度もまともに向き合うこととはなかつたのかもしれない。心のどこかで、「早く現実に返してくれ」と願つていた。

だから、俺はずつと前に気づいていたはずなんだ、etcの発動方法、俺のingの発動条件は——

「現実を認めること。そう、今この瞬間だ」

瞬間、視界が暗転した。

古い遺跡のようなものが見える。だが、次の瞬間には違う建物が映つた。いや、違う。まるで録画したビデオを早送りしているかのように、視界が次々と切り替わつていった。

そして、体の中で何かが動いた。そんな感覚を抱いていると、いつのまにか俺の視界は先ほどどの廃ビルの中を捉えていた。目の前でベルコルが目を見開いている。

「ing……鈴木聰太、早くしろ!! 早くingを使うんだ!! 君の力なら世界を思い通りにすることができる、リニア・イベリンの体からetcの文書を分離しろ!!」

「嫌だ」

「は？」

男の汗が床に流れ落ちる。その音さえも俺の耳には届いた、そんな気がする。

「どういうことだ、鈴木聰太」

「俺はこの能力を使えば、世界のあらゆる事象を変えることができる。だが、この能力を使

うにはそれなりの代償が伴う。だから俺はこんな力を世の中に向けて使うつもりはない。俺が使うときは、俺の命を削つても使いたい時だ』

そつと、俺は胸に手を当てた。微妙に体の熱が胸元に集中した。そんな錯覚をしてしまう程、俺の体は希望というものを感じていたのかもしれない。

「——宣言する。etcの文書よ、リニア・イベリンの体と融合しろ。肉体の中ではなく、リニア・イベリンと一体になれ」

明らかにベルコルの顔が歪んだ。しかし、それを見ていたのも一瞬、俺は「加速」と書かれた紙を床に落とすと、その魔法の力を借りて、素早く男の手から彼女の体を受け止めた。そして再び、元居た位置に戻る。ベルコルがショックに陥っている今しかないと思つたからだ。おかげでリニアの奪還は安々と成功した。すぐに俺は縄を解き始める。リニアの手首からは血がにじんでいた。

この縄、千切ることは難しそうだが、解く分には問題なさそうだ。

「ああ、やつと楽になつた」

リニアは満足げな様子で手を閉じたり開いたりする。俺は一通りそれを見届け、彼女の体に異常がないことを確認すると、再び胸元に手を置いた。

——これで最後だ。全部、全部、終わる。

「宣言する。Ergoよ、永遠にその力を封印しろ」

体中を電流が流れたかのような違和感を覚えた。これが能力を使っている証拠なのだろう。

「けほつ」

血の味がする。

思わず膝から崩れ落ちそうな体をリニアが支えてくれた。やはり、今の命令はそれなりの精

神力と体力が必要なようだ。先ほど口元を拭つたはずなのに、また血がついてしまつた。

「お前……」

ふと、ベルコルを見る。

彼は目を見開いたまま、呆然と俺たちを眺めていた。

「お前、お前、お前お前お前お前お前……!!」

男の怒りも当然だろう。何百年も待ち続けていたものが、今の俺の一言で全部無に帰してしまつたのだから。

俺にはもう口の力はない。おまけに、俺が死んだとして新たなる保有者が現れる確率も必ずとはいえないくなつてしまつた。

「狡いと思われてもいい。俺の勝算は殆どゼロに近かつたんだからな、これぐらいの事をしないと勝ち目がないとわかつていた」

男は俺が口の力を自分のために使うとは全く考えていないかつたようである。それもそのはず、この能力は奴自身が使うために存在しているのだと信じ切つっていたからだ。

「賭けは私の勝ちね、残念ながら私は生きてるけど」

リニアは小さくつぶやいた。

賭け？俺には全くわからないが、今はそれを問い合わせている暇もなさそうだ。男の動向が気になって仕方ない。

「なぜだ」

ベルコルは俺の顔を見て、そういった。

「何故、<sup>日本語</sup>なんていう巨大な能力を持つていながら、何故、君はもつと別の使い方をしようと考えない。金銭、権力、名誉、ありとあらゆるものを使いに手にすることができるとうのに、どうして使わなかつた。普通の人間なら、それらに魅了されるはずだ。何故、君はやつと覚醒したその能力を封じた」

ベルコルの顔からは、とつくに狂氣は消えていた。むしろ、感情はすべて消え去つてしまつたかのようにも思える。

「どうか、<sup>日本語</sup>保有者の最高特権は、その能力を自分で封印することができるという点から、能力者の内、唯一その選択ができる……そういうことか」

男はそつと床を眺めた。まるで糸が切れたくるみ割り人形のように肩を落としている。

「鈴木聰太。私の計画上、君がそんな愚かな選択をする可能性はゼロだと思つていた。自分で自分の限界を体内に封じ込めるなんて……愚かだ、俺も本当に、愚かだ。でも仕方ない、また、また別の方法を考えればいい、俺はずつと死ぬことはないのだから」

「こんなことを何百年間も繰り返してきたのか」

「そうだ、キルヘンは俺の人生そのものだ」

ベルコルの声はとても落ち着いていた。まるで騎士が主君に忠誠を誓うかのように、まっすぐな自信と満足感に満ちていて、不思議な神聖さがあつた。

「俺は、絶対にキルヘンを元に戻してあげなければいけない……」

理解はできない、だが、男の切実な声には一切の虚構は見られない。本当に、ただ一心に彼女の復活を待ち続いているのだろう。

「哀れだ」

一人の女性を生き返らせるために、彼は多くの人間を傷つけてきた。それは許されるものではない。そもそも、自身が誰かの犠牲の上に成り立っていると知ったとき、復活した本人が喜ぶわけがないのだ。

俺は込み上げてくる怒りをそのまま、男に向けて放出した。

「お前の陳腐な野望にどれだけの人間が犠牲になつたと思う？・とんびゅ、Chaser♪、多くの人が死んでいった……」

「陳腐だと？ 愛する人を生き返らせたいと思うことが？ お前にはわからないのか？ 今までずっとと側にいた人が突然いなくなる苦痛も恐怖も、自分の体さえも崩れていくように思える絶望を、お前はまだ知らないのか？ 俺は彼女を生き返らせるために、ずっと生きてきた。俺はその感情ひとつでetcを覚醒させた。俺の人生は彼女の全てだ」

男は喚きたてる。そして、ふらりと顔を上げた。

「鈴木聰太、お前はこの俺の人生を否定するのか？ 無価値だというのか？」

瞬間、ベルコルは後方に退いた。そして右足を軸に、回転をかけると奥の物陰へと身を隠す

た。物陰に隠れたまま移動し、攻撃をしかける魂胆だろう。

俺とリニアは特に合図をすることもなく、無言で頷きあつた。やることは明白、呼吸を合わせて協力すればいいだけだ。

俺は暗闇に向かつて一步、前に出た。

「ベルコル。お前、さつき今までずっと側にいた人が突然いなくなる苦痛がわからないのかつて聞いたよな。俺にもある。茜がいなくなつた時だ。だけど、俺はお前とは違う。お前のようには狂うことはない。現実を認めろ、ベルコル。死んだ人間は生き返らない」

男の反応はない。それでも俺は闇に向かつて話し続けた。

「ベルコル、お前が追い求める女性は、もうこの世にはいないんだ」

「……認めない」

やつと男は暗闇から姿を現した。

「俺は、そんなこと、認めない……お前の生き方も、認めない」

そういうつて男は、全速力で俺たちに向かつて走り出した。

まずはリニアへと襲い掛かる。彼は何も武器を手にしていない。それは俺たちも同じだつた。手持ちに数枚の紙はあるが、ここに来るまでにペンを落としてしまつたようだ。

——完全に俺たちの方が不利な状況だ。

リニアは何とかして彼の猛攻撃を防ぎ、蹴りを入れようとするが、再び男は後退して闇へと消える。だが、今はそれがいい。体力と時間を稼ぎつつ、何かしら策を考える時間が欲しかったからだ。

俺はそつとリニアの手を握つた。

「勝算はあるか？」

「微妙かな。でも、数時間前の私の攻撃が効いているはずだと思うんだけど……」

「不死身じゃなければ、か」

ふと、室内に男の声が響いた。それとほぼ同時に、俺の目の前で爆発が起ころる。

「何だ？」

「そんな……音声魔法？」

リニアは驚いた様子で、爆発が起きた場所を見つめていた。

音声魔法——、文字に記すことなく、言葉を告げるだけで魔法を発動できる、高度な魔法使いにしか使用できないはずだ。俺が知る中でも先生くらいだというのに。

爆発は立て続けに起こる。単調な攻撃だ。だが、そのどれもが、俺たちに命中することはなかつた。単に命中率が悪いのではないだろう、興奮状態故に狙いが定まらないのか。あるいは――、

「そつか、私の攻撃に仕込んだ毒弾」

隣で彼女がさりと恐ろしい単語をつぶやいた。しかし、それで合点がいく。確かに先ほど男が接近してきたとき、こめかみの辺りに真新しい傷のようなものがあつた。おそらくそれがリニアの作った傷だろう、そこに毒が仕込まれていたのなら、なるほど視界に影響があつてもおかしくはない。

攻撃が止んだ。奴は毒に苦しめられているのだろうか。

再び、俺は奴が潜んでいるであろう物陰に向かつて声をかけようとした。

瞬間、リニアが俺を制止した。

「ベルコル、お前があのまま研究所の人間といたら、私たちを捕らえるのはもつと簡単だつた。でも、お前は一人を選んだ。これがその結果よ」

リニアは俺の手を取つて、ぐいっと引き寄せた。

「一人は二人に適わない。だから愛の力は、二人で作る愛の力は最強なんだ」

俺はこの場にどこか不釣り合いな彼女のセリフに、虚ろな視線を送る。だが、彼女は全く気にも留めていないようだ。俺は再度、自身の体に活を入れるように声を上げた。

「ベルコル、何百年の命に終わりを与えてやる」

彼女が振り返った。俺の合図を待つてゐるかのようである。

「リニア、俺がサポートしてやる」

「うん」

瞬間、俺たちが攻撃に出るよりも早く、ベルコルが物陰から姿を現し、一直線にリニアに向かつて走り出した。俺はすかさず、懷にしまつていた紙を取り出した。ベルコルは大きく腕を振りかぶる。対するリニアは必死にその軌道を見極めていた。

「リニア!!」

俺は声と共に、数枚の紙を空中に向かつて放つた。書かれていた文字は俺の血で書かれた、「止まれ」の文字。男の体は、まるでそこだけ時間が切り取られたかのように止まつていた。

「つ……鈴木、聰太!!」

こんな単純な策に引っ掛かるとは、やはり男の脳内は既に毒にやられているのだろう。リニアは、静止した男の体めがけて、勢いよく拳を振りかぶった。狙うのは、男のこめかみ。既に彼女が一度、傷を与えた箇所だ。

命中だ。リニアの拳は寸分の違ひなく、男のこめかみに命中した。魔法の効果が切れ、男の体は床に向かつてゆっくりと傾いていく。だが、ベルコルは片足で転倒を免れた。そして――

俺にもリニアにも予想ができなかつた。彼は、片足で体を支えていたのも一瞬、すぐに体制を立て直して、俺に向かつて走り出した。そして、男の拳が俺に向かつてくる。

男の予想外の行動に、俺は本能でそれを避けようと必死だった。僅かに体を傾ける。

しかし、そんなことで彼の攻撃を防げるわけがなかつたのだ。かろうじて、リニアの蹴りが男の腕にあたり、軌道は逸れたものの、ベルコルの攻撃は見事に俺の腕の骨にひびを入れた。それと同時に、俺も奴の懷に一步踏み込む。

だいぶ前に、先生に習つた護身術だ。奴は今までの敵と違い、武器を持つていない。だからこそ、俺はこの手に踏み切つた。俺はリニアの蹴りでよろめいた男の腕をつかむと、そのまま床に向かつて一緒に倒れこんだ。

無謀、無茶、あとでいくらでもリニアに叱られよう。俺は急いで紙を取り出すと、流れ出た血で文字を記した。『止まれ』。男の体は床にくつついてしまつたかのように、動きを止めた。

「リニア、走れ!!」

彼女に叫ぶと同時に、俺も素早く身を起こして走り出した。男とある程度の距離を取らなくてはいけない、そう考えたのだ。

もはやベルコルの体は化け物だ。髪の毛を真っ赤に染め上げるほどの大量出血をしているにも関わらず、男は依然として立ち上がり、俺たちに向かつてきた。

勝てないのならば、せめて時間を稼ぐしかない。もしかしたら、リニアの毒が完全に体中をめぐり、男の身体機能を制止させるかもしれないからだ。

「もう、うんざりだ……鈴木聰太が死ねば、別の誰かに、絶対、必ず、能力は移るはずだ。etcの文書は写本がどいかにあるだろう、それを探せば、全部解決だ。鈴木聰太さえ殺せば、鈴木聰太さえ殺せば……」

魔法の効果が解け、男はゆらりと立ち上がった。その瞳は虚ろとしていて、焦点すら定まっていない。

——くそつ、もう少し時間が欲しい !!

『——つ !!』

ふと、誰かの声が聞こえた。ベルコル——ではない。これは——、

俺の予想よりも先に、窓の外で何か白いものが急激にまとまり始めるのを目にした。あれは、おそらく雪だらうか。一点を中心にする球体を描くかのように、雪が収束していく。

『』

次の瞬間、白い塊となつたそれは、男に向かつて一直線に窓ガラスを破つて突つ込んだ。当然、呆然としていた男はその攻撃を避けることもない。男は瞬く間に、白い塊の中に押ししつぶされていった。そして、大きなガラス音と、瓦礫音を響かせながら、彼女は現れる。

長い髪をたなびかせ、雪の白さが映える程に真つ黒なコートを身にまとつた女性。彼女の顔はいつものように自身に満ち溢れていた。金色の魔女、マエストロ、数々の異名を轟かせる彼女は、やつと俺たちの前に現れたのだ。

先生は俺たちに軽く微笑みかけると、纏つていた黒いコートを脱ぎ、リニアの方へと投げた。黒いコートの下は、またしても闇のように真つ黒なスースだった。

前回のテロ事件でも着ていたものだ。俺はその見慣れた服を見た瞬間、どこか心の中で安堵

を覚えた。もう大丈夫なのだと。

先生は、ベルコルに向き直る。彼の体は、未だ先ほどの攻撃で雪の中に埋まっている。

『』

ふと、先生が何かをつぶやくと、雪の山は幻だつたかのように宙に霧散していく。そんな美しい光景に見惚れるのも刹那、雪の中からは血だらけの男が姿を現した。

『』

またしても、先生は何か呪文のようなものをつぶやく。すると、瞬く間に室内の電気がつき、おまけに周囲に散らばっていた瓦礫も、元の位置に戻り始めた。

——これが、本当の魔法。

ぽかんと、口を開けて眺めていると、先生がふつと小さく噴き出した。

「情けない顔をするな、全く。二人そろってなんて様だ……」

はつと我に返つて、俺たちは揃つて自身の姿を見た。俺もリニアも服は当然の如く汚れており、そこら中に血の跡がついていた。

「これ、お気に入りの服だったのに。また買わないとダメかな」

ぽつりとつぶやくりニア。ふと、彼女の視線を感じた。

「なんだよ、俺に新しいのを買えつてか？」

「うん、聰太からプレゼント貰いたい」

こんな状況でよくも、冗談が言えるものだ。俺はやれやれといった様子でため息をついた。

ふと、今度は先生の方からも視線を感じる。見ると、彼女は鋭い目つきで俺を見ていた。黒いスーツのせいもあり、やけに威圧感がある。

「だから、私は装備をしていけと言つたんだ。愚か者め」

「装備したところで、俺の戦闘力じや負けるつていつたじやないか」

「当たり前だ。だが、雑巾一枚でも纏つていれば、その服のシミひとつ位は消せたんじやないのか」

口では冗談を言つているつもりなのだろう。だが、その外見と普段よりも固い口調のせいであつて、妙に緊張する。ここは、素直に彼女の意見を認めるのが得策なのだろう。

俺が両手をあげて、降参を示そうとした瞬間——、

「キルヘン!!」

前方で声が上がつた。ベルコルだ。彼はボタボタと血を垂らしながら、まつすぐと先生を見据えていた。

「なんだ、お前。まだ生きていたのか」

「キルヘン!! 何で俺を攻撃するんだ、これも全部君のために、君を元に戻すために……俺を、俺を拒むのか? キルヘン!!」

絶叫する男に對して、先生の瞳はひどく凍てついていた。

「アルベル、そういうえばお前に言うのを忘れていたな。私は以前の体に戻るつもりはない。私は天城紫乃であり、キルヘン・スイートだ。二人の記憶と、二人の性格を持つている。私たちには紛れもなく二つの魂を持ちながら、一つの体で生きている。だから天城紫乃が嫌だというなら、私も嫌だ」

「違う、違う……お前はキルヘン・スイートだ。天城紫乃じやない!! 世界を明るいものへと導く、希代の聖女だ!!」

「いつの話をしているんだ、そんな歴史に忘れられた名前。わかつていなら、私の口から告げてあげようか、アルベル。お前はただのストーカーだ。そして、私も天城紫乃もお前を嫌っている」

ベルコルにとつて、それはかなりの衝撃だったのだろう。彼は両腕をだらりと落としたまま、大きく目を見開いていた。まるで魂の抜けた体だけが、そこに存在しているかのようである。「ち、がう……それは、天城紫乃の考えだ。君は、キルヘン、君は——、」

「仮にこれが天城紫乃の考えだとする。だがさつき言つただろう。私と彼女は一つだと。ならば、この考えは私のものだと言える」

「そんな……」

ベルコルは呆然とした様子で先生を見つめた。対する彼女は、既に男に興味はなくしたのか俺たちの方へと振り返る。そして、突然先生は、俺の体をべたべたと触りだした。

「ちよつ……先生つ、何するんだ、変態つ!!」

しかし、彼女の顔は至つて真面目だった。

「どうやら君を覚醒することはできたみたいだな。よくやつた、君は現実を見ているようで、肝心なところは無意識的に目を逸らしていたからね。でも、覚醒したばかりの君をまた封印するとは思わなかつたな、さすが鈴木聰太とも言うべきか」

そういつて彼女は、俺の頭をそつと撫でた。一方、リニアの方に向き直つた彼女は、正反対に冷たい瞳をしていた。師匠に黙つて出ていった弟子を窘めるつもりなのだろう。俺はあえて、何も言わずに静観を決め込むことにした。

「なぜ私に何も言わずに出ていった。私に言えば、ほんの数分で終わる話だらうに。まあ、

元はと言えばお前の体に文書を入れた私に責任がある。いろいろと思い詰めたに違いない。  
そこは不間に處すことにしてよう

そういつて先生は罰が悪そうに視線をずらした。そして、彼女は自身の頸に手をあてて考  
るような仕草をする。

「その原因のやうの文書なんだが、お前の中から感じられないな。彼が<sup>ジン</sup>を発動したことと  
関係があると思われるが、まあその経緯は後で詳しく聞くとしよう。ひとまず、リニア。お  
前の体から文書を取り出すことはできない。晴れて、普通の人間と同じ体になつたというこ  
とだ。私も一安心」

先生が小さく笑みを漏らす。そして、彼女は再び男の方へと振り返つた。

「アルベル、いい加減終わりにしよう」

「キルヘン……」

「お前は殺すことができない、ならどこかに閉じ込めるしかないな」

先生が腕を上げる。しかし、男はその行為すら認めないとでも言いたげな顔で、先生に向  
かって走り出した。

「ふざけるな !! 必ず、君を生き返らせる !! 必ず…… !! 天城繁乃 !! これ以上キルヘンの真似をするな !! お前は、ただの偽物だ !!」

先生は男が迫るよりも早く、動き出した。それも何かをつぶやきながら、空間を滑るように彼女は男の周囲を巡る。対するベルコルも、絶叫と共に何かを詠唱する。激しい爆発音が響き渡った。一方の先生もそれを宙で相殺する。

ありえない。これが魔法使い同士の戦いか。先ほどまでの肉弾戦とは桁違いの迫力に思わず俺は見入っていた。

ベルコルは魔法に頼らず、突進する。対する先生は余裕の表情でそれを避けると、未だ血の止まらないこめかみを勢いよく殴つた。

「諦める。既に毒も回つて辛いだろう。さすが私の弟子たちだ、戦力は低いが作戦面ではこちらが一枚上手のようだつたな」

「それなら……弟子の方から処理してやる」

男は急激に方向を変えて、リニアの方へと走り出した。思わず俺は走り出す。

どうやつて男を止めるかはわからない。それでも、俺は彼女を守らなければいけないという

ことで必死だった。

男の体がリニアに迫る。その前に、俺は勢いよく彼の体めがけて突進した。既に毒により視界は狭まっていたのだろう。男は突然ぶつかってきた俺により、そのまま俺と共に倒れこんだ。

「受け取れ!!」

瞬間、後ろで先生の声がした。不思議と、何を渡されるのかはわかつていた気がする。俺は空中で弧を描くそれを、しつかりと受け止めた。

「Chaserのワイヤー……」

その名前を口にしたのはベルコルの方だった。彼は驚いた顔を浮かべる。俺を跳ね除け、走り出す男の体に向けて、俺は腕を上げた。狙いは男の肩だ。

「くつ……」

男が苦悶の声をあげる。俺が放ったワイヤーは見事に、男の肩に命中し、彼の動きを封じ込めたのだ。

ふと、縛り上げる俺の腕に誰かの手が重なつた。リニアだ。

「一人じゃ大変でしょ」

そういつて彼女は俺の腕をそつと包み込む。実際、男の腕力で引き摺られそうになっていたところだつたので、非常に助かつた。

「くそつ……キルヘン、どうして私を拒絶する!!」

男はワイヤーを引き千切ろうと必死だつた。素手では決して切れないとわかつていながら、手からも、肩からも血を流しながら、何度も何度も挑む姿は本当に哀れだつた。そんな彼を見捨てるよう、先生は冷たい聲音で答える。

「私を恨んでくれるなよ」

そして、先生は何か俺たちにはわからない呪文をつぶやいた。

「黒い……門……」

声は俺のすぐ隣から聞こえた。リニアは驚いた顔で、その突然目の前に現れた黒い門を凝視していた。ベルコルの顔にも、やがて恐怖の色が浮かぶ。俺にはわからないが、この黒い門はとても恐ろしいものなのだろう。

「おい、まさか、また俺をあそこに送るつもりか?」

「どうせ殺しても死なない体だろう。今度こそ、お前は苦しみながら永遠の時をそこで過ごすことになる。迷惑をかけたら罰を受けるのは当然のことだろう、アルベル」

そういって、彼女は右手を上げる。

「さようなら」

今までに聞いたことがない、別人のような声で先生は男に別れを告げた。黒い門の扉が開く。こんな瀕死状態で、この空間に閉じ込められれば、いくら不死身といえども再び俺たちの前に現れる事はないだろう。

黒い門から、何か影のようなものが伸びる。それは、もはや抵抗する気力もない男を取り込むように、彼の体を包み込んだ。

このまま黒い物体に引き摺られていくのだろうと思った最中、ふと、ベルコルは顔を上げた。

「……今回は俺の負けだ。だが俺は何百年かかつても、必ずまた戻つてくる。俺の能力を忘れるな!!俺の能力なら必ずまた、キルヘン……!!君の前に……戻つてくる……!!」

207.psd

——ああ、なんて、可哀そうな奴。

——お前はもう誰とも戦う必要がないのに、お前は死ぬこともできないんだ。

次の瞬間、男の体は流れるように黒い門の中へと吸い込まれていった。暗闇に消える直前、確かに俺と男の視線は交錯する。

扉が大きな音を立てて閉められた。まだ扉越しに男の声が聞こえる気がする。しかし、完全に閉まりきつたことを確認すると、黒い門はあつという間に消えていった。

雪が解けるには早い、風に吹かれる砂のように、その最後は呆気なかつた。

——終わった。

そう思つた途端、突然全身から力が抜けていく気がした。

ふと、見上げた空はいつの間にか雪が止んでいた。割れた窓から、世界を見下ろす。僅かに空が白んでいた。

「朝だ……」

つい先ほどまで真っ白なコピー用紙のように思えた世界は、もう存在しない。ちゃんと雪の白さを、暖かさを、感動を——、

「今は感じることができる」

——これが俺の、現実だ。

「お、お前ら、こんな時間までずっと作ってたのか!?」

三人そろつて幼稚園へと帰ると、玄関先にノエルと奏の姿を捉えた。そして、彼女たちの後ろには何体もの雪だるまが列をなしている。まるで雪だるまロボット製造工場のような面立ちである。

「私は寝ようって言つたんだけど、奏がまだ作るつていうから」

「風邪でも引いたらどうするんだ!?」

ノエルの弁解を聞いて、俺は奏へと駆け寄つた。微かに頬が赤らんでいるような気もする。当たり前だ、三月後半といつても雪が降るほどの寒さだ。一晩中、寒空に下にいたら大人でも体調を崩すだろう。

しかし、奏はそんな俺の胸中を知つてか、ゆっくりと口を開いた。

「大丈夫、途中で中に入つたりしてたから。休んで、また出てきたの」

それなら、まだいい……いいや、よくない。そもそも何で寝てないんだ。俺が何かしら注意をしようと思っていると、後ろからリニアが顔を出してきた。そして俺の腕をつかんで、大きく頭上に持ち上げる。

「私たち今日から正式にカップルになりました。まあ昔からずっと聰太は私の彼氏だけど、ついにプロポーズを受け入れてくれたというか」

「ふーん」

ノエルは興味がないのか、適当に返事をする。一方の奏は——、

どこか黒いオーラを纏っている。そして、くるりと俺らに背を向けると、せつかく作り上げた雪だるまを端から壊していく。奏さん、ご乱心である。

そんな彼女を見て、ついに先生も笑い出す。

「おい……ちよつと待て、俺はカップルになつたつもりも、プロポーズを受け入れたつもりもないぞ？」

いらぬ誤解を生んではならぬ。俺はぱつと、彼女の手から逃れた。

「ちよつと、聰太!! さつき告白したじゃない!! 英語で!! 全部わかつてて、答えてくれたんじゃないの!? 私の人生、唯一絶対のプロポーズ!!」

そういうと、奏に追い打ちをかけるかのように、リニアは彼女の下へと駆け寄った。

「私がね、『I'm yours.』っていつたら、聰太が『I know.』って答えてくれたんだよ!?」

奏の動きが加速する。リニアに被害が及んでいないだけ、平和的と言えるのかもしれない。

ひとしきり奏に報告を終えると、再びリニアは俺に振り返った。

「聰太」

俺も彼女の瞳をまつすぐと見据える。

「あの時の言葉は嘘じやないよね?」

「嘘ではないな」

「じゃあ、私たちはカツブルだよね？」

彼女は、全身ボロボロ、おまけに体の所々から出血をしているのに、こんなにも穏やかな声で俺に問い合わせてきた。

「しようがない、俺の負けだ。認めるよ」

これから先、この女の隣を歩くということは、一生この女から逃れられないのだろう。俺は心のどこかでそう確信していた。まあ、でも。そんな人生も悪くない気がする。

——誰かに想われて、誰かを想う。

これこそ、俺の望んだ普通なのかもしれない。

気づくと、いつのまにカリニアは奏と一緒に雪だるまを破壊していた。何が楽しいのかわからぬが、興奮した彼女を相手するには丁度いい身代わりである。

「それにしても、一体いくつ作ったんだ」

気づくと、幼稚園の前はたくさんの雪の山ができていた。

「鈴木くん、あれ。帰る前に片づけていってね」

「はあ!? なんで俺!?!』

「全部君のせいだから」

俺は魔女に何も言い返す言葉が見つからず、ただ黙つて肩をうなだれた。

何で、俺が……。

ふと、元気にはしやぐリニアを見て、俺は今まで失念していた問題を思い出した。

「そういえば、リニア」

「なに?』

「俺、お前に春から休学して海外行くって話したつけ?』

「え?』

予想通り、俺はリニアに話していなかつたようである。彼女は、掴みかかるような勢いで俺の下に走つてきた。

「え、初耳なんだけど、何でそんな大事なこと言つてくれなかつたの？」

「色々とこたついていたからだろ。お前も急にいなくなるし」

「そ、それは……」

罰が悪そうに顔を背けるリニア。しかし、それはほんの一瞬で、再び彼女は俺に迫つてきた。

「え、なに海外逃亡？それとも、海外失踪？」

俺は犯罪者か何かか。

「違う……ちょっと、頭を冷やしに行くつていうか」

リニアは依然として茫然自失といった顔で俺を見つめた。そして、絶叫する。

太陽は既に昇つていた。

「おい!!近所迷惑だ、こらつ」

今にして思えば、俺は今回の出来事で少しだけ大人になれたような気がする。自分の人生をありのまま、現実だと受け止めて、前に進む。簡単なようで、難しい。

俺はあの事件から三年経つて、やっと認めることができた。

俺はこれからも前に進み続けなければいけない。前の俺なら、途中でまた目を逸らしそうになるけど、今は違う。前を見ようと、現実を見ようとさせてくれる人がいる。

「リニア」

「うん？」

「ing&etcも関係ない。初めて、普通の人間として、お前と話すことができるな」

彼女は、はつと驚いた顔をした。

でも、すぐその顔はいつもの笑顔へと変わる。

「うん!!じやあ、はじめまして、かな」

「何だそれ」

そう言つて、お互いの顔を見ながら笑いあう。

吹く風は暖かい。四月はもう、すぐそこだ。

——また新しい季節が訪れる。

- Track. 10 「I'm yours」 End.

219.psd

あの事件から数日後の出来事だ。

俺は突然、電話で先生に呼び出された。また面倒事を押し付けられるのだろうと警戒したが、妙に真剣な彼女の声音に、俺は素直に幼稚園に出向いてしまった。

そして、先生に会うや否や、彼女は無言で一枚の手紙を渡してきた。宛て名は不明、宛先人 ももちろん何も書いていない。

「何だよ、これ。手紙？」

「手紙、そう、それは手紙」

先生は一度頷く。

「何？ラブレター？」

隣にいたリニアも、ずいっと顔を近づけてくる。この間の事件以降、ずっとこの調子だ。引付  
き虫より質が悪い。

「それは尽紫茜からの手紙だ」

「どういうことだ？」

尽紫、尽紫茜——俺の頭に浮かぶのは、たつた一人しかいない。だが、彼女とはもう二度と  
会えないはずだ。

先生は俺の問いに何も答えない。ならば、俺の予想が正しいということだろう。

「あいつが、死ぬ前に書いたのか」

先生はやはり無言で頷く。

「何でそんな随分前に書かれたものを、今更……」

「読めばわかる」

俺は手紙へと視線を落とした。開封口はきつちりと糊付けされている。一度も開かれていない証拠だ。

びりびりと音を立てて、いざ三年間の封印を解こうと思つた瞬間——、

「リニア、一緒に見ないのか？」

先生の声に、俺ははつとなつて隣を見る。気づくと、彼女は俺から一步後ろに身を引いていた。

「別に秘密の手紙でもないだろ、見たかつたら見てもいいぞ」

「あら、じゃあ私も一緒にしていいかしら？」

「先生はダメだ」

むすつと頬を膨らませる先生。俺はそんな彼女から離れるように、逆にリニアの方へ下がつて、ゆっくりと手紙を開封した。

『『『飯はちゃんと食べててる？』』』

——全く。死んでも人の心配か。

思わず、口元が緩くなる。俺は彼女の——とんびの顔を浮かべた。

『この手紙を読んでるつてことは、私はもう——つてのは、ありきたりか。単に気が向いたから書いただけ。でも、この手紙を読むための条件は設けたの。君が、君の能力に気づいた時つて。さてさて、今の私はどうですか？生きてる？それとも死んでる？個人的には生きてたら嬉しいけど、死んでたらまあ仕方ないよね。そういえば、この手紙を読んでる君は何歳になつた？訓練所を出てすぐの男子高校生？それとも立派な二十代の社会人？はたまた、もうオジサンになつてるかな。そこまでは歳とつてないといいな。etcの覚醒に必要なのは現実を理解すること。でも、人間誰しもありのままの現実全てを受け入れられるようには出来ていなんだ。誰かしら皆、何かから目を背けて生きてる。だからさ、私はできるだけ早くこの事を君に気づいてほしいな。ところで、ここからが真面目な話なんだけど、聰太、いま幸せ？』

彼女の手紙は、綺麗にそこで紙の端までたどり着いた。

俺は二枚目の紙を捲った。

『etcを覚醒するまで、きっと色々なことがあつた。だろうね。今、君は何を思つてる？君が、君の周りが幸せだといいな。そして、私も成長した君の姿を見れてるといいな。きっと見れてるよね。あ、そうだ。私がこの手紙を書いたつてこと、葵には絶対に言わないでね。絶対に内緒だからね』

文章は（）で区切られ、一行ほど開けられて続いた。

『聰太』

『私を忘れないでください』

『この先、どんなことがあつたとしても、尽紫茜という、私という友人がいたことを忘れないでください。君の記憶の中から絶対に、私がいたということを忘れないでください。これが、私の唯一最後の願いです。私を忘れないでください。それだけで私は満足です』

いつのまにか俺の視界は白く霞んでいた。目元が熱い。少しでも動けば、何かが目から零れ落ちそうになる。

――忘れるものか。忘れるものか、馬鹿野郎。

俺は思わず、手紙をきつく握りしめていた。しかし、彼女の言葉はそれで終わりではなかつた。俺は本当に最期の彼女の願いが込められた一文を見ると、堪えられずに手紙を閉じた。そして、リニアの制止も聞かずに、俺は幼稚園を後にした。

——そうだ、俺にはまだやるべきことが残つてゐる。

\*\*

錦糸町。近年、再開発が進んでいるこの地域では、だいぶ前に新しい公園が建設された。錦糸公園と似た規模のもの。しかしそれは、三年前の事件で被害にあつた地域の再利用もあつてのことである。公園が建設されてからは、以前の廃墟とは見違えるほど穏やかな場所に様変わりした。

だが、敢えてこの場所を避けて通る者も少なくない。俺もその内の一人だ。

久しぶりに、俺はこの錦糸町という駅で降りた。

鼻をくすぐる慣れない空気。コンクリートの、花火の、あるいは何かが燃えているような——、実際にはありえないはずの匂いが妙に鼻につく。まるでずっとそこに漂つてゐるかのようだ。

本来なら近づきたくもない場所だが、今は仕方がない。

待ち合わせ場所には、あいつが先にいた。時宮葵。俺の数少ない親友だ。

時刻は夕暮れ、彼は夕日を背に立っていたため、一瞬顔を判別することが難しかった。

「よつ、鈴木。聞いたよ」

「何を？」

「img、覚醒したんだな」

「ああ」

挨拶も手短に、彼はさっそく本題に触れてきた。長年、付き合ってきた故の距離感だろう。

「悪いな」

葵は、唐突に謝った。

「今更、こんなこと言うのも手遅れなんだろうけど、ごめん」

「……何が？」

俺はそこまで重く受け止めてない風に答えたつもりだつたが、彼には逆に聞こえたのだろう。葵は先ほどよりも顔を俯けて、申し訳なさそうに口を開いた。

「お前が、あの当時、そのことを知つていたら、きっと今よりひどい状態になると思つたら、俺はお前に真実を告げるなつてみんなに口止めしたんだ」

ああ、そんなの知つてゐる。とつくり知つていた。でもそれ以上に、お前の方が大変だつたろうに。愛する人の死、親友の能力の真実、廃墟と化した街。葵が受け止めなきやいけなかつた現実は、俺の数倍もあつたはずだ。

だが、そのことを一切口にしないあたり、時宮葵という青年の優しさなのだろう。表面には出さないくせに、誰よりも優しい。本当に、こいつは不器用な奴だ。

「葵」

彼の名を呼ぶ。葵は、少し戸惑つた笑顔を俺に見せた。悲しみと絶望が内包された笑顔。あの事件からずつとそうだ。以前のような本当の笑顔を見せたことがない。

「俺は——、」

「鈴木。お前は現実を受け入れた。俺とは違う」

葵は、まるで俺の言おうとしていたことをすべて見抜いていたかのようだつた。

「お前は強い。これからどんな悲劇があつたとしても、お前は前に進める。でも俺は違う」

「茜は……茜はもう死んだんだ」

ずっと葵に言いたかつたこと、言わなければいけなかつたことを、俺は三年経つてやつと口にすることができた。俺たちは、あいつの死を受け入れなければいけない。前に進まなければいけない。

「わかってる」

彼はそう答える。だが顔を上げることはない。

「いいや、葵。お前はわかつてない。ずっとお前は過去に縛られて生きている。俺たちはもう、自分の人生を生きてもいいんじゃないのか？」

「自分の人生……か」

そういうつて葵は薄闇に染まる空を見上げた。何を考えているのだろうか。青みがかった雲を見つめる彼の横顔は、妙に寂しそうだった。

「俺の人生はあの日から壊れた。あいつの死によつて、俺の現実は壊れてしまつたはずなのに……何で俺は今も能力が使えるんだ。現実を認めてないはずなのに、何でこの能力は消えないんだ」

その独白はとても悲しそうな声をしていた。彼の質問に答えてくれるものはいない。だから、俺はほんの少しでも彼の支えになればと声をかけた。

「俺たちは、これからも生きていかなければいけない」

すると、葵は笑つた。先ほどの笑顔とは違う。以前のような明るいものではないが、多少は嬉しさを感じる、そんな笑顔だ。

「それはそうと、お前が俺を呼び出した理由は？」

葵は気を取り直したかのように、俺に向き直った。

「正確に言うと、呼び出したのは俺じゃない」

そういうって、俺は懐からあの手紙を取り出した。

「茜が死ぬ前に、俺に宛てた最後の手紙だ」

「茜の……手紙」

見るからに彼に動搖が走った。

「俺にはそんなもの、ひとつも残さなかつたくせに……」

葵は悔しそうな、寂しそうな一言を零した。俺は彼に手紙の一番最後の行を伝える。

一番最後に彼女が残した言葉。それは——、

『葵のこと、よろしくね』

おそらく、それが本当に彼女が願つた最後の望みだ。

錦糸町。何故俺がここで彼と落ち合つたのか。それは、ここが彼女の最期の地だつたからだ。  
茜はここで死んだ。今はもう、すっかり大勢の人々で賑わう公園。

あの場所は、たゞえ姿が変わつたとしても、俺たちの記憶の中ではずっと三年前のままだ。  
一生消えることはないだろう。

それでも――、

「葵。これ以上、茜の死を否定するな。あいつも悲しむ」

「悲しむ……？そんなわけないだろ!! 死んだ人間が……悲しむわけない。あいつは、茜は  
もう死んだんだ!!」

葵は声を荒げる。ここまで取り乱した彼を見るのは初めてだつた。

「俺はお前とは違う……俺は茜のことが……違う、俺たちは……!!」

そう、俺は確かに尽紫茜に恋をしていた。でも、葵は。いや、葵と茜は互いが互いを想い合っていた。

だからこそ、俺はこれ以上何も言えなくなってしまった。

「鈴木。確かにお前はもうあいつの死を受け入れたんだろう。Ingaを発動して、そのまま封印するなんて……そうだな、お前にはもう能力なんて必要ないからな。隣で守ってくれる人がいて、お前はその人と一緒に生きていく。まさしく運命を開拓していくんだからな」

葵は皮肉を込めた言葉を言う。それでもやはり、一番辛そうなのは葵自身だった。

「なあ、鈴木。俺はどうすればいい……あれから三年が経つた。でも、俺は毎日あいつの顔を夢で見る」

葵は顔を俯けたまま、そつと左腕に手をやつた。ふと、俺は三年前の光景を思い出す。彼女から流れ出る血が、葵の左腕を濡らしていったあの光景を……。

「何で、何であいつの最期を見届けたのが俺じやなくて、お前だつたんだ……」

葵は自身の左腕をきつく握りしめた。

辺りは一層闇が増していく。俯いている彼の顔は、今どんな表情をしているのかもわからな  
い。

「鈴木、きっとお前は俺のことも、茜のことも忘れて生きていくんだろ」

ふと、葵はどこか恨めし気な声で俺に問いかけた。

「忘れない」

「いや、お前は忘れる」

「忘れない……あいつが忘れないでって言つたんだ。俺は絶対に忘れない」

全部記憶の中にある。茜との思い出も、葵との思い出も。三人で過ごした学校生活も、全部抱えて俺はこの先へ進んでいく。

「だから葵。お前も——、」

「俺は何でも捕らえることができる」

「え？」

突然、葵はetcの話を切り出した。俺は訳も分からずに、じつと彼を見つめることしかできない。そんな俺に彼は指を向けた。

空気弾——、いつも葵が攻撃する際に用いる行為だ。空気を捕らえて圧縮し、それを放つ。指先を頼りに、それは一直線に軌道を描いて、俺に向かってきた。

「つ……」

俺は当たると思い、咄嗟に右手で顔面を覆つた。しかし——、

「消えた……!?」

弾丸が空中で突然消えた。そして、ふと背後に大きな風を感じた。まるで俺という存在、あるいは空間だけを避けて、放たれたかのようである。

「葵……これは一体……」

「理解できなか?」

「空間を超えたのか……？」

恐る恐る尋ねる俺の問いに、葵は無言で首を横に振った。

「——時間だ」

「時間？」

「説明するのは難しい。感覚だつて言つてしまえば終わりだけど。いつからか、俺の能力は時間と空間を掴めるようになつたみたいだ。さつきのは、お前のいる空間と時間を無視して、お前という存在を通り過ぎて、言わば未来に向けて撃つんだ」

「そんな……じゃあ、好きな時間に送ることも、空間を超えることもできるってことか」

ありえない。だが、ingという規格外の能力もあつたんだ。俺に葵の能力を否定することはできない。

「鈴木、俺は時間を掴むことができるようになった」

非常に乾いた葵の声に、いつのまにか俺の額には冷や汗が浮かんでいた。彼が次に何を言うのか、何をやろうとしているのかが自然と理解できてしまう。

237.psd

「帰れる。また、やり直すことができるんだ」

「過去に行くつもりか。そんなことして、どうする。それに成功するとも限らない、もし失敗したらどうするんだ!!」

「わからない。でも成功する確率が0%とも限らない」

「ダメだ」

俺は葵をまっすぐと見据える。対する葵も俺を見ていた。

辺りはすっかり真っ暗だ。それでも自然と互いの瞳だけは見えている気がした。

「何回か、テストはしたんだ。まあ、自分自身を動かすのは初めてになるけど」  
葵とは先日のテロ事件以降、連絡が取れなかつた。まさか、その間もずっとひとりでそのテストとやらを行つていたのだろうか。

「ダメだ、許さない。失敗するリスクがでかすぎる。もし失敗したら……ずっとどこか別の空間に飛ばされて、死ぬかもしれないんだぞ」

「やつてみないとわからない」

「葵!!」

思わず俺は葵の名前を叫んだ。瞬間、彼はふつと優しい笑みを見せる。それは今まで知っていた明るい笑顔でもなく、本当に初めて見せるような表情だ。

「鈴木、よかつた。俺がいなくても、お前はもう前に進むことができるな。お前の周りにはたくさん的人がいる。俺たちのような『過去は』もう忘れてくれ。お前には進むべき道がある」

——何言つてるんだ。

——そのたくさん的人には、お前も含まれてるだろ。

——何でそんなこと言うんだ。まるで自分はいなくなるみたいなこと。

「ふざけんな!! だめだ、絶対に行かせない。能力を使いたければ、俺を倒してからにしろ。骨折でも何でもして氣絶させてやる!!」

俺が怒鳴ると、やはり葵は余裕の表情で笑みを浮かべた。

「ははっ、まるで少年漫画みたいだな。うん、けどさすが鈴木だ。いいよ、その勝負受けて立つ」

「本気でかかるてこいよ」

「もちろん。俺はお前に勝つて過去に行く。そしてあいつに会いにいく。もう一度、あいつの声を聴きにいく」

すっと葵の眼が細くなつた。俺も腰を落として、戦闘準備に入る。

「行くぞ、葵」

「いつでもいいよ」

\*\*\*

「大丈夫？」

視界に広がる女の顔。その特徴的な髪色を俺は見間違えるわけがない。

「ずっと見てたのか？」

リニアは地面に横たわっている俺を見て、くすくすと笑った。それが彼女の答えといふことだろう。

「わざと負けたんじやないの？」

「そんなわけあるか。あいつ……もう、勝手にしろ」

圧倒的な戦力差だった。ただの平凡な俺と、etcの能力を保持している葵。初めから俺が葵に勝てるわけがなかつたのだ。

「本当に容赦しなかつたな……」

本気でやれとは言つたものの、まさか初手で空氣弾を打つてくるとは思わなかつた。戦いはあつという間に終わつてしまつた。そして葵は、俺の顔を見ることがなく一言、「ごめん」とだけ告げて消えてしまつた。俺の目の前で、葵だけが空間から消えた。

不思議と涙は出なかつた。成功する確率は限りなく0に近い。でも、俺はもしかしたら、葵なら帰つてこれるかもしれない、心のどこかでそう信じているのかもしれない。

それに、葵があんなにも苦しんでいたことを俺は知らなかつた。葵が選んだ道を、俺一人の感情でどうこうしていいわけでもないのだ。それこそ、自分勝手だ。

今となつては、何が正しいのかもわからない。だから、俺は全部が上手くいつた世界を信じて、彼を待つのが一番いいのだろう。

俺は体を起こすと、ポケットにしまつっていた手紙を取り出した。

「あいつにこの手紙くらいは見せててもよかつたのかもな」

こそつと俺は手紙を取り出す。すると、先ほどは気づかなかつたが、一枚目の裏に何かが書かれているのが見えた。不思議に思つて、俺は裏をめくると、

『P.S 美が言っていた、綺麗な外国人とはその後どうなりましたか？（笑）』

瞬間、ぼつと顔が赤くなるのがわかつた。

「綺麗な外国人？」

気づくと、リニアも横から手紙を覗いていた。不思議そうに首を傾げる彼女から、隠すように俺は急いで手紙をしまった。

「聰太、綺麗な外国人つてどこのどいつ？！」

不機嫌そうな顔をするリニア。俺はまた面倒くさいことに巻き込まれるのを避けようと、素直に白状することにした。

「……お前のことだよ。仕方ないだろ、当時はお前がどんな性格してるのかも知らなかつたんだから」

リニアは何も言わない。よく理解していらないのだろうか。

「だから、あの時はちよつといいなって思つてたんだよ!! 要は一目惚れみたいなもんだ!! もういいだろ!!」

そういうて、俺は立ち上がつた。リニアは顔を真っ赤にしてぽかんとしている。俺はそんな彼女を置いて、ここを後にすることにした。

『君は今、幸せですか?』

幸せ、わからない。俺は今、幸せなのだろうか。

現実を認めたからといって、必ずしも幸せだとは言い切れない。だからこそ、人は皆、現実をありのまま直視することはないとのだろう。だけど、少なくとも俺は現実を受け入れた。

「幸せですか、鈴木聰太さん?」

気づくと、リニアが後ろに迫り付いていた。彼女は後ろ手に組んで、じつと俺の瞳を見据える。

「幸せ、か。俺は今、親友と喧嘩して、そいつも生きている可能性は少ない。それでも俺が幸せと答えるのは非情か？」

「それはどうだろう。でも、少なくとも君の隣にいる私は幸せ。だから、きっと君も幸せ」「……意味がわからん」

「わからないか。じゃあ、ストレートに言うね。今、幸せな私が、君のことも幸せにしてあげる」

——なんだ、それは。まるで、

「プロポーズ」

「……こんな、タイミングでやるのか。しかも、それは男が言うべきセリフだろ」

「そんなの関係ない。それに、聰太が言ってくれるわけないもの」

リニアはそういうつて、幸せそうに笑つた。

どうやら、無理やりにでもその幸せとやらを押し付けてくるようだ。

——ああ、なるほど。そういうことか。

「今、幸せかどうかはわからないけど……とりあえず面白い人生は、送ることができそうだな」

「聰太」

「ただ……」んなやつだとわかつていたら、一目惚れなんてするんじやなかつた

「な……どういう意味!?」

「自分で考えてみろ」

リニアは頬を膨らませて、必死に俺の言葉の意味を考える。そんな彼女の姿を見て、ふつと

□元をほりるばせぬ、俺は大きく伸びをした。

空には月と雲。

ヒトモ穂やかな風が頬を通り過ぎた。春はもうすぐだ。  
やがて、気がいたら俺は懐かしい歌を口ずさんでいた。

〔I've been where you are before. No one understands it more. You fear every step you take...〕

ソロ歌を俺はじつまで覚えているのだからつか。

〔Nothing In My Way〕

俺と葵に捧げるプレゼントだ。

「やよいな、 葵」

- Bonus Track 「Nothing In My Way」 End. -

65.psd

-Take This Heart

——たくさんの人があいつのために泣いていたのに、俺は少し涙ぐめができなかつた。

初めは嘘だと思つた。俺自身、身近な人間が死ぬところを想像もしていなかつたためだらう。それに、あいつの性格上、またいつもの冗談だと思っていた。そう、ドッキリ。けれど、これは事実だつた。葬儀場に入つてからやつと実感した。隣にいた葵も泣いていた。きつと、お互いつまらない意地のようなものだらう。

周りの人々が悲しむ姿を見て、俺は初めて自分が生きていることを実感した。

——ああ、これが現実なのか。

『とんびつて呼んで』

最初に交わした会話はこれだつた。

俺が初めて茜に出会ったのは中学三年生の時だつた。今でも鮮明に思い出せる。男同士としか絡んでいなかつた俺と、仲良くなつた女の子は初めてだつた。彼女は一言で言えば、クラスのムードメーカーのような存在だつた。愛想がよくて、男女問わず仲良くて、まるで『とんび』のように空を飛んでいけるような、活発な性格をしていた。

彼女の葬儀は滞りなく行われている。俺はぼんやりとその様子を眺めることしかできなかつた。何か映像を見ているかのようだ。何をすればいいのかもわからない。何も頭に浮かばない。早くここから出たい、こんな重苦しい雰囲気は嫌いだ。

「葵くんはどうしたんだ？」

気づくと、何度か見たことのある顔が声をかけてきた。たしか、赤城周と言つただろうか。  
「トイレに行つた」

「そうか」

俺の適当な返事を聞くと、彼は誰かを探すように周囲を見回していた。すると、恋人らしい女性が笑顔で駆け寄ってきた。しかし俺と目が合つた瞬間、その女性はため息をついて声をかけてきた。

「最初に発見したのは、あなたなんだって？」

「……ああ」

「……彼女、本当に自殺だつたの？」

「……わからない」

いきなり何なんだ……この女。

「やめろ、聰太もまだ気持ちの整理がついてないんだ」

「でも……!!」

俺が明らかに不機嫌になつてゐるのを察したのか、赤城が彼女を制止した。おそらく彼にはわかつてゐるのだろう。ここで話していくても何も解決されない。死んだ者は何も話さないのだ。

赤城が視線で無言の圧力をかけると、女はあつさりと身を引いて丁寧な謝罪をしてきた。

「……ごめんなさい」

そして赤城は周囲を見渡した後、再び俺に視線を戻し独り言のように呟いた。

「少し場所を変えないとな」

この後にも何か呟いていたが、どうやら言語ではないようだ。俺には全くわからなかつた。

赤城が何か言い終わるや否や、俺と彼らだけを残して真っ白な空間が存在した。

初めて見た。これが空間創造能力なのか……。

「ここなら誰もいない。話しても大丈夫だ」

彼は冷静に俺の目を見ていた。何か強い意志があるよう思える。俺も赤城を注意深く観察する。果たして信用に値するかどうか……。

「あの」

不意に赤城が口を開いた。

「正直、俺もこんなことするのはあまり好きじやない。君が今、辛い心境なのはわかる。泣き叫んでもおかしくない。けど、俺だつて何があつたのか知りたい。お願ひだ、知つていてることがあれば全て話してくれ」

……何だ、いい奴じやないか。

俺は深呼吸をして、赤城を真っすぐ見据えた

「今回のこと、確かに俺は怒りを感じている。俺も被害者の一人だ。だから、俺はただこれからやるべき事をして先に進む。こんなところで泣きわめいてる暇はないんだ」

すると彼らは驚いた表情をしていた。俺は何かおかしなことを言つただろうか。

「うわ、凄いね……」

女は引いたような声を出していた。

「なんだよ、それ。どういう意味だ」

「いや、正直いって絶望していると思つていたから」

「当然、絶望しているさ。でも泣いていたつて仕方ないだろ。この件に関しては警察も国も関与しないつて言われた。『魔法使いに限られたことなら魔法使いを利用して、研究所に限られたことなら研究所を利用する』つてことだ。とりあえず、この件についての責任はそつちにあるはずだ」

赤城が俺を眺めている。すこし悲しげな表情だ。

「君は……大丈夫か？」

「ん？ああ、大丈夫だ。最初はあまり現実感がなかつたが、実際に葬儀場に来たら実感した。それに、俺が泣くことなんて茜は望まないからな」

「あんた……」

女が何かを言いかけて口をつぐんだ。そして一息吐くと、静かに口を開いた。

「人が死んだんだよ」

「そうだ、人が死んだ。」

「普通なら悲しむんだよ」

——ああ、それでも。俺には悲しむ暇がないんだ。

\*\*\*

数年前

「……て」

何か聞こえる。

「……起きて」

声だ。

「鈴木くん起きて !!」

驚いて目を覚ますと、俺の目の前には一人の女子が座っていた。

「これ、先生からのプリント」

「あ……ああ」

どうやら俺はすっかり寝ていたようである。前を向くと、顔なじみの先生が軽く挨拶をして

去つていった。周りの席の連中は知っている顔もあれば、初めて見る顔もある。

——そう、今日から俺は中学三年生になつたのだ。

ところで、

「お前、誰だ？」

先ほどプリントを回してくれた女子の名前が全くわからない。三年になつて初めて同じクラスになつた子である。

すると、ほぼ初対面であるはずなのに、彼女は呆れたような表情をして答えてくれた。

「学級委員長よ……」

「そうか、ありがとな」

どうやら俺が寝ている間に色々と決めていたようだ。俺はプリントを鞄にしまい、席を立つた。今日はホームルームで終わりだ、早く家に帰つて夕方の塾まで昼寝でもするか。

「じゃあ、俺はもう帰る」

「あ、うん」

教室では他のクラスメイトが新学期特有の空気で仲を深め合っていた。そんな様子を横目に、俺は教室の扉へと向かう。

「おい」

扉に手をかける直前、ふと、俺は一つ聞き忘れていたことがあつたことに気付く。俺はクラスの輪に入つていく委員長の背中に声をかけた。

「何？」

「名前……何だっけ」

振りむいた彼女は驚いた顔をしていた。

何でだ……そこまで驚かれると、なんか恥ずかしいな。

彼女は一呼吸開けて、ゆっくりと口を開いた。

「私は…尽紫茜」

「……尽紫さん、君の制服の第二ボタン外れてるよ」

つい、悪戯心が湧いてしまつた。俺は彼女にその一言を告げると、彼女がどんな表情をしていたかも見ずに足早に教室を出た。

さて、葵でも誘つて一緒に帰るか。課題も終わつているから、家に帰つてすぐに横になれるな。うん、新学期はやっぱり早く帰れるからいい。明日もまだ本格的には授業が始まらない

から、早く帰れるはずだ。明日は何もないから、どこか遊びにでも行こうかな。楽しい妄想ばかりが浮かんでくる。自分でも今日はかなり気分がいいとわかる。廊下を歩く足並みも心無し、どこか軽い気がする。

ドンドンドンドン

「なんだ？」

遠くの方で廊下を走る音がしていた。

——誰だよ、こんな勢いよく走っていたら危ないだろうが。いくら新学期が始まつたからって浮かれ過ぎじゃないのか、そんなに走りたいなら校庭にでも出て走つてこいよ。

内心悪態をつくが、正直俺にはどうでもいい話だ。たとえ、何かが起きたとしてもそれはおそらく俺とは関係ない所で起きるはずだ。

ドンドンドンドン

何故か、だんだんと音が近づいてきている。いや、こつちに向かってきているようだ。

俺は巻き込まれないように、廊下の端の方へと寄った。

ドンドンドンドン——バタンツ

突然、腰に大きな痛みが起こつた。そしてその衝撃のまま、俺は床に倒れこむ。どうやら誰かが俺にぶつかってきたようだ。

——畜生……誰だ。せっかく端に寄っていたのにわざわざぶつかって来やがつて。  
俺は腰を押さえたまま後ろを振りかえった。

すると、そこにはつい数分前に見た顔があつた。

「……委員長？」

「尽紫茜!!ちゃんと名前で呼んで!!」

訳が分からぬ。一体、彼女はどういうつもりなんだ。

俺はぽかんと口を開けて、彼女を凝視した。すると、そんな彼女は俺の様子に関わらず、ぐいっと胸元を掴み上げてきた。

「ちよつと!!君!!女の子のボタンがどうのこうのってね、どうして早く言わないのよ!!びっくりするでしょ。それにあんな大きな声で指摘しなくてもいいでしょ!!みんな揃つて私の方を見て、すごい恥ずかしかつたんだから!!ちよつと、聞いてるの!?」

矢次早に次々と言葉を浴びせられて上手く状況が掴めていないが、俺はとりあえず領いておいた。

「……謝つて」

「……悪かった、尽紫さん、ごめん」

素直に謝罪を述べると、意外と彼女はすぐに許してくれたようだ。先ほどまでの不機嫌な様子は一瞬にして消えていった。

「とんびつて呼んで」

「え？」

「とんびの方がしつくりくるの」

「…とんび？」

ぎこちない響きに首を傾げて返す俺。すると――、

彼女は柔らかい笑顔を返してくれた。

尽紫茜……そ、うだ、思、い出、した。聞、いた事、がある。学、校、一、おせつかい、な女。成、績、優、秀、で、交、友、関、係、も、広、く、男、女、通、して、み、ん、な、に、好、か、れ、る、人、気、者。た、ま、に、荒、れ、たり、も、する、が、そ、んな、所、も、魅、力、的、ら、し、い。度、々、噂、は、聞、いて、い、た、が、実、際、に、目、に、した、こと、は、なか、つ、た。

俺、は、ま、じ、ま、じ、と、と、ん、び、を、見、つ、め、る。対、す、る、彼、女、は、依、然、と、し、て、友、好、的、な、態、度、を、崩、さ、な、か、つ、た。

「謝、つ、た、な、ら、許、し、て、あ、げ、る、わ。いい？女、の、子、は、纖、細、で、傷、付、き、や、す、い、ん、だ、か、ら、ね」

い、き、な、り、男、の、胸、倉、を、掴、んで、くる、奴、の、ど、こ、が、女、の、子、だ。

「……勉、強、に、な、つ、た、悪、か、つ、た、な、」

——この、ま、ま、絡、ま、れ、る、と、面、倒、だ。

俺、は、服、に、つ、い、た、ホ、コ、リ、を、叩、い、て、と、つ、と、と、こ、の、場、を、去、る、こ、と、に、し、た。

「鈴、木、く、ん」

「……何、だ、よ」

——まだ、何、か、文、句、が、ある、のか。

俺、は、可、能、だ、け、眉、間、に、し、わ、が、寄、ら、ない、よ、う、に、半、分、だ、け、後、ろ、を、振、り、向、く。

「また、明、日、ね、！」

そ、こ、に、は、ま、る、で、太、陽、の、よ、う、に、清、々、しい、程、氣、持、ち、よ、く、笑、う、女、子、が、い、た。

「あ……ああ、また明日」

思わず拍子抜けな返事をしてしまったが、彼女は特に気にすることなく教室へと戻つていつた。

ぽかーん、と立ち尽くす俺を見て、数人の生徒が笑いながら通り過ぎていく。

数十秒後、やつと我に返つた俺だつたが、しばらく恥ずかしくて前を向けなかつた。

＊

数日後

昼休み。俺はクラスメイトの矢野たちと、軽く歌を口ずさみながら食堂へ急ぐ。今日は水曜日だ、この学校の食堂は一週間で何故か水曜日だけメニューが豪華になる。それ故、皆の楽しみは水曜日にあるといつても過言ではない。早く辿りつかないと売り切れも出てしまふほどだ。そして、何より次の授業に間に合わなくなる。

「やっぱ水曜は混んでるなー」

矢野の一言に前を見ると、食券売り場の前は多くの生徒でごった返してた。

「俺たちも走ってきたのにな」

「考えてみりや、体育の授業終えた連中の方が早いに決まつてるか。空腹であればある程早くなるつていうね、生存本能みたいなやつだな！」

俺たちもだいぶ腹が空いているが仕方がない。矢野たちとくだらない話でもしていたら、あつという間に順番が来るだろう。俺たちは行列の最後尾へと並んだ。

ふと、厨房から漂う香ばしい匂いに匂いに浸つていると、後ろの方が騒がしくなってきたことに気付いた。

「はーい、どいた。どいた」

振りむくと、派手な髪色にだらしない格好、不良と思しき二人組が列を割つて入つて来た。  
誰ひとり文句を言う人はいない。周囲の人間も関わり合いたくないのか、大人しく道を開けていった。

それが普通だ。事を起こさず、ただ自分の順番を後ろにすれば済む話だ。わざわざ面倒事に

進んで首を突っ込む奴なんて、そんなんはないはずである。

「ちよつと!! 順番くらい守りなさいよ」

——いるのかよ。

声からして大体予想はつくが、俺はちらりと前に視線を向けてた。

「やつぱり……」

俺の数メートル先に見慣れた顔があつた。とんびだ。

この状況でよくもまあ突つかれるものだ。俺も周囲の生徒も、何もせずただじつと黙つて、事の成り行きを見守つている。

「何でちゃんと列に並ばないのよ」

とんびは、両手を腰に当てて声を荒げていた。対する不良たちは、じつと彼女を見ている。男子なら暴力で解決できるが、相手が女子のため彼らも少し躊躇つているようだ。しかし、とんびは学校内でも人気者の類。このままとんびの指摘に従うのも瘤に障るのだろう。

「ちよつと、聞いてるの!?」

「はあ……うるせえな……殴るぞ」

しばらくして、不良の内の一人が心底面倒臭そうに呟いた。早くそこをどけという意味だろう。しかし、その一言にとんびもついに頭にきたようだ。

「……殴れるものなら殴つてみなさいよ!!」

——やばい……

俺だけでなく周りの生徒もよくない空気を察しているようだ。あいつが大人しくしどけ、こんな厄介事起きなかつたのに、とでも言いたげな顔がそこら中に散らばつている。せつかくのお昼休みが台無しだ。時間がどんどん過ぎていく。このままだとみんなお昼ご飯を食いつばぐれてしまう。

「……ちつ」

俺の近くで舌打ちが聞こえた。みんな空腹のせいでイライラが募つてゐるようだ。事実、この揉め事のせいで列が全く動かなくなつてしまつた。中には、とんびを睨んでいる生徒までいる。

——あいつは何一つ悪くないはずだ。あいつは皆のために割り込みを指摘しただけだ。確かに大人しくしていたら、今頃俺たちも飯にありつけただろう。でも本当に悪いのは割り込んだ奴らじやないのか？

——しかしこいつら三人とも、空氣というものを読めないのか。

「いい加減にしろよ」

——あ。

思わず俺は心の声を言葉にしてしまったようだ。瞬間、全員の視線が一気に俺へと向く。  
「あ、えつと……ほら、みんなお腹空かせているからさ、とりあえずご飯食べてからまた話  
し合いません？」

できるだけ腰を低くして、俺たちは中心にいる三人に提案をしてみる。

「そうね、ちゃんと並んで!!『ご飯食べてから私の所に来なさい』

——お前は何も言わなくていい!!

勝気なセリフを言い残す彼女に、思わず俺の愛想笑いが引きつってきた。案の定、不良さんはついに怒髪天を突かれたようである。

「ふざけんじゃねえぞ!!おい、お前いきなり出てきて何なんだよ」

「いや、ただ……みんな早くご飯食べたいだろうと思つて……」

「あ？そういうこと聞いてんじやねえんだよ!!死にてえのか？」

「ちよつと!!何であんたたちが怒ってるのよ!!」

——とんび……今は大人しくしてろよ！

「えっと、とりあえずご飯食べて一旦、冷静になりますよ。俺の位置、割と前なんで順番変わりますよ？」

だいぶ下手に出て提案をすると、やつと向こうも落ち着いてきたようだ。ふうと一息をつく。俺が、このまま事態の解決に向かうはずだと確信した瞬間——。

「待つて」

「は？」

とんびが物凄い表情で俺を見ていた。

「自分の意見も言わないで……周りの状況を整理するだけなんて、何の解決にもなつていなければ。彼らは間違っているのに何で指摘しないの？悪いのは向こうなのよ？それなのに何で悪いって認めさせないの？こんなな事態をもみ消しただけじゃない。君、最低だよ!!」

とんびの言葉、一つ一つが俺の胸に刺さっていく。俺だつて向こうが悪いのは解つてている。でも妥協することも大切だ。彼らにだつてプライドがある。だから仕方ないじやないか。俺が間違っているのか？

俺は彼女から視線をずらす。

すると、隣の矢野と視線が合つたが、彼は素知らぬ顔で視線をずらした。  
——こいつ……友達じゃないのか。

周りの生徒たちもこれ以上耐えられなかつたのか、色々な悪口が次々と飛び交い始めた。とんびを怪訝そうに見つめる生徒も増えている。不良たちも相変わらずこちらを睨んでいる。せつかく收まりかけたというのに……どうすればいいんだ。

「はい!! そこまで!!」

突然、食堂内に場違いなテンションの声が響いた。

「みんなご飯食べよ、授業始まっちゃうよ」

葵だ。こいつ、どこから飛び出してきたんだ。

そして、葵の一言で全体が動き出した。

本人は大したことない表情をしているが、不良たちは彼の顔を見た瞬間、何も言わずに列に並び始めた。つまり学校内における、彼の立ち位置はこういうことである。どうやら葵のおかげで事件は仲裁されたようだ。

「君も。ご飯食べよ? 何が言いたいのかはよくわかるけど、まずは空腹を満たしてからね」  
葵は、ただ一人当惑した表情のとんびも説得して席に着かせる。

「お前……いたなら、早く仲裁してくれよ」

「今来たところだよ。なんか喧嘩してると思つたら、鈴木の顔が見えたからさ。また厄介事に巻き込まれたみたいだから助けに来てあげたわけ」

——そんな嘘っぽい笑顔で心配されてもな……。

「仲裁を口実に割り込みに来ただけじゃないのか……？」

後から来たはずの葵は、何故か俺と同じ前の方にいる。

「そうかな？」

「そうだろ」

「じゃあ、それでいいよ」

はあ……なんだかこの昼休みで一気に疲れてしまった。

\*\*\*

ああ、おいしい。やつぱりうちの学食のカレーは絶品だ。早く食べたくなるのもわかる。

騒動の後、俺は矢野たちと一緒に飯を囮んでいるが、何故か葵も俺の目の前に座っている。この変わり者の友人、学校で見かけたのは久しぶりだ。

カレーを一口、食べながら俺は葵へと雑談を投げかけた。

「お前、まだ友達いないの？」

「さあ。別にこれといって付き合う必要もないだろ。というか、俺も何で友達ができないのか不思議だね」

ど直球に聞くも、葵は至つて表情を変えることなく返事をする。

「その性格だからじゃないか？」

「俺が変わり者だつて話か」

「違うのか？」

「違うと思うけど」

お互い食べ続けながら、上手い具合に会話を交わしている。この距離感は割と居心地がよくて、気に入っていた。

「じゃあ、自分が変わり者だと思つて人と付き合つてみろ」

「難しいな」

「ばーか。ただ会つて適当に会話しとけばいいんだよ。知り合いが増えるだろ」「でも、それは知り合いじゃないのか。友達ではないだろ」

「そうか？そんな変わらないだろ」

「うーん、考え方の違いつてやつかな」

隣で殺伐とした会話をしていたせいか、矢野たちは妙な顔で俺たちを見ていた。

そもそも葵自身、学校であまりいいイメージを持たれていない。むしろ避けられている方だと思う。だから俺と葵が話しているのを見て、彼らが驚くのも無理はないだろう。

昼食を食べ終わると、俺は矢野たちに先に教室に戻つていいと告げた。せつかく葵がいるならもう少し話そうと思い、食堂から校舎に続く渡り廊下に向かう。  
ちょうど座りやすい段差があるので。

春とは言つたが、まだあまり暖かくなつていない。寒い日はまだコートも必要な位の時期だ。ふと、校舎の隅に花が目に入るが、頭の中は家に帰つて何をするかしか考えていない。穏やかな昼下がり。友人と共に校庭を眺める。葵は昼ごはんが足りなかつたのか、唐揚げを

片手に同じく校庭を眺めていた。

サッカーをする生徒、野球をする生徒。たまに聞こえる掛け声が心地いい。  
平和だ。平和すぎる。

昼休みはあんな出来事に巻き込まれたというのに、数十分後にはこんなにも穏やかな世界になるのか。

「さつきの女の子さ」

唐突に、葵が口を開いた。

「ん？」

「あの子がとんびつて子？」

驚いた。俺よりも学校のことに関心がないやつが何でそんなこと知ってるんだ。

「な……何で分かつたんだ？俺だつて分からなかつたのに」

葵は何でもないという様子で答える。

「いや、別に。その子の話よく聞くからさ。人気なんだなって」

こいつの耳に入るつてことは、よっぽどなんだな。

「まあ、俺はあんまり好きじやないけどな。どうして人気なのか分からなーい」

葵はちょっと渋い顔している。

「うーん、誰とでも分け隔てなく気さくだからじゃないか？特に性格が悪いわけでもないし」「ふーん、ま、そんな感じはするね」

葵が適当に返事をする。それもそうか、俺たちには別に関係ないしな。

瞬間、予鈴が鳴つた。もうすぐ授業が始まる。

俺たちは慌てて階段を上り、きれいに別々の教室の方へと分かれる。

がらりと扉を開けて教室に入ると、真っ先にとんびの姿を見つけた。いつもと変わらない顔をしている。俺がそこまで気にする必要もないみたいだ。

席に着いた途端に先生が入つて來た。どうやら間に合つたようだ。

さあ、午後の授業の始まりだ。

\*\*\*

授業中に気付いたことがいくつかある。

とんびのやつ、いつもはまるで生徒の鑑のように真剣な態度で授業を聞いているのに、今日はどこか変だ。

ちなみにいつも見ているのは、深い意味はない。彼女の席が俺の目の前のため、毎回視界に

入つてくるのだ。本当にそれだけである。信じてほしい。

とにかく今日のとんびは変だ。落ち着かないというか、頑張つて集中しようとしている感じがする。

たまには優等生も普通の生徒に戻るということだろうか。こう、授業なんか聞いていても仕方がないというように。

ふと、気になつてちらりと斜め後ろを見てみる。矢野がよだれを垂らして寝ていた。

——こちらは、いつも通りか。

やつと授業が終わつた。家に帰つて一段落したら、塾に行かなくてはならない。

特に行きたい学校があるわけでもないが、親に怒られるのは嫌だから仕方なく通つている塾だ。もうすぐまとめのテストがあるが、やる気も起きない。とりあえず、家に帰つたら矢野に教えてもらつたゲームでもしよう。

「え」

教室の扉に向かおうとしていた俺の前に、突然とんびが現れた。

「……なに？」

「……」

彼女はそわそわしてどこか落ち着かないようだ。そして、こちらの様子を窺うように視線を向けていた。

「……ちょっと、手伝つてもらいたいことがあるんだけど」

また面倒事のようだな。

「嫌だ。大体、何で俺なんだ。他の奴に頼めよ、友達いつぱいいるだろ」

俺が冷たくあしらうと、とんびは一瞬悲しそうな顔をしたが、すぐにいつもの自信たっぷりの表情に戻っていた。

「頼める友達がいないから君にお願いしてるんだよ。私は君が思つてているほど友達いないよ？」

「ん？でも俺たちも友達じやないだろ」

「君はただ会つて話せば友達なんですよ」

——こいつ……昼間の葵との会話、聞いてやがったのか。

「悪いが、外で人を待たせてるから帰るよ」

すると、彼女は目を輝かせて前のめりになってきた。

「待たせている人つて葵くん？私よりも有名な人。いいわ、その人も呼んできて」

「それより用件は……」

「集まつてから言うから！」

笑顔で手を振るとんび。このまま帰つてしまつてもいいのだが、それが出来ないのが俺、鈴木聰太だ。俺は重い足を引きずつて葵の教室へと向かつた。

「は？ 帰るんじゃないのかよ。どこに行くんだ？」

「いいからいいから。葵、一緒に行こう」

「おい、放せよ」

「大丈夫、大丈夫。怖くないから」

「せめてどこに行くのかだけでも教えるよ」

「すぐ着くって」

「そうじやなくて、行き先だよ」

「あははははは」

「おい!! 鈴木!!」

訳もわからず当惑する葵の腕を掴み、連行していく。悪いが、一人で損するのだけは勘弁だ。

どうせなら二人で損しよう。

\*\*\*

「連れてきたぞ」

一悶着の末、やつと俺は葵をとんびと会わせることに成功した。クラスメイトは全員帰った  
ようで、彼女だけが教室で一人待っていた。

「面倒臭そうなことに巻き込まれそうだな……」

「大丈夫よ、心配しないで」

不機嫌そうな葵に対し、とんびは笑顔で答える。

そして机の上に何かを置いた。

MP3プレーヤー。

——今の時代によくもこんなものあるな。

とんびは一呼吸置くと、自信満々な顔で告げた。

「私のMP3プレーヤーを探ってきて!!」

瞬間、俺と葵はぴたり同じタイミングで顔を見合させた。

「鈴木、今日は俺が奢るから何か食べて帰ろうぜ」

「お、ありがとな。じゃあ俺ん家でゲームでもしようぜ」

「こないだのやつな」

「よし、今度は負けねえからな」

「待つて!!二人とも待つて!!」

必死な形相で、とんびが俺たちの制服の裾を掴んできた。

\*\*\*

今から数分前。とんびの制止を振りきり、なおも帰ろうとする葵をやつとのことで引き止めることができた彼女は、事の一部始終を説明した。

「つまり、学校でMP3プレーヤーみたいに高価な電化製品を盗むやつが増えたってことか?」

「そうそう」

とんびは笑顔で肯定する。

「それで、教師の信頼が厚い君が、囮になつて犯人を捕まえると」

「そう、まさにそれだよ！」

葵の指摘に、とんびは身を乗り出して答える。

「お願い、ちょっとでいいから手伝ってくれない？」

「とかうか……自分の物くらい管理しこうよ……」

俺が言葉を濁して感想を漏らすのに対し、葵は堂々と自分の言葉を述べた。

「大体、最初から自分の物をちゃんと管理してない方もどうかと思うけど。そこらへんに置いていたから、犯人も盗んでいいと思つたんじやないのか。自業自得だろ」

「でも」

葵に釣られ、俺も正直にとんびに告げる。

「あのさ、何で俺たちなんだ？普通に友達に協力してもらいたいよ。いっぱいいるだろ」

すると、とんびは一瞬びくつとした後、小さなため息をついた。

「私はただ外向的というか、人と話すことは好きだけど……眞面目な話とかできる友達いないよ」

それは本当に意外だった。彼女にとつて、クラスメイトは全員友達みたいに思つてたから。  
——ちよつと気まずいな。このまま断るのは無理そうな雰囲気にしてしまつた。

「それで……俺たちは何すればいいんだよ」

俺の一言に、一瞬にしてぱあっと嬉しそうな顔になつたとんび。もう少し眺めていたかつたが、俺は勢いよく顔を右に引つ張られた。

「おい、正気かよ。面倒だろ」

隣にいる葵がものすごく嫌そうな顔をしていた。

「い、いいんじやないか。犯人捕まつたら先生たちからの評価も上がりそそうだし、持ち主のいない物出できたら俺たちが貰えるだろ」

「……ほうほう、確かにそれは良さそうだな」

俺の提案に葵も誘惑にかられてきたようである。

「ちよつと、出てきたものは必ず持ち主に返すつもりよ」

後ろでとんびが何か言つてる気がするが、まあ気のせいだろ。

「それで、このMP3プレーヤーをどうするんだ？」

やる気になつた葵が、興味深げに机の上のそれを持ち上げる。

「簡単よ、明日の体育の時間とか昼休みに置いといて、犯人が持ち去るのを見守るの」

「ふーん、単純だな」

作戦内容にはあまり関心がないのか適当な返事をする葵。この件で、普段から教師がこいつに抱いてる悪いイメージが少しでも良くなるといいな。俺は心の片隅でそんな事を思つていた。

「それじゃあ明日、手伝えばいいってことだな」

「うん」

とんびは、嬉しそうな顔で葵に答える。

「この件と全然関係ないんだけどさ」

このまま今日は解散する流れだと思つていたが、ふと葵が口を開いた。

「君が友達出来ないのって、向こうも君が距離を取つているのを感じているからじゃない。誰にでもいい顔し過ぎだと思うよ。もつと自分が思つてること相手に言つてみたら」

葵の言葉に、とんびは頬を搔きながら乾いた笑顔を零した。

「……私も自覚はしてるんだけど……難しくて」

そんなどんびを葵はしばらくじっと眺めていた。そして、MP3プレーヤーを机に置いて教室の扉へと向かう。そんな彼の背中に俺が声をかけようと思った瞬間、葵は振りむいた。  
「明日やるつてことは、今日はもう帰つていいんだよね？」

「え　ああ……うん。お願ひします」

驚いた顔で返事をするとんび。俺もつい立ち尽くしてしまつていた。

「それで……、君たち帰らないの？」

葵は俺ととんびの二人の顔を見ていた。

\*\*\*

四時。ほんのり茜色に染まつた空の下、俺たち三人は揃つて帰り道についていた。特に会話もなく、お互にコンビニで買った食べ物を口にする。こんな時間に学校から帰るのは久しぶりだ。

視界の隅に入る遠くの街が夕日に照らされて、とても綺麗に見える。耳をすませば、どこから子供たちの遊ぶ声、風に揺れる木々の音、誰かが踏むペダルの音。様々な雑音が聞こえてくるが、何故か今は心地いい。

「じゃあ、俺こっちだから」

「おう、じゃあな」

分かれ道で葵と俺は別々になる。いつもなら俺はこの後一人で帰る予定だが、今日は違う。

どうやら、とんびも同じ方向らしい。葵は妙な顔をするが、すぐに彼は背を向けて帰つて行つた。

「そういえばさ」

俺は少し後ろを歩くとんびに声をかける。

「他にも人いるだろうに、何で俺が頼まれたのか結局聞いてないんだけど」

「別に。ただ君は断ることとかできなさそうな人だつたから」

「でも、昼間に俺のこと最悪とか言つてただろ。さすがに断られる可能性もあると思うけど」「……昼間のは単なるミスっていうか勢いで……みたいな」

罰が悪そうな顔をして言葉を濁すとんびだが、ふと真剣な顔に戻つた。

「……ごめん、あれは私も悪かった。仲裁しようとしたのに、なんか私の意見だけを押し通そうとしてた。私も彼みたいに、一瞬で場を鎮めるはずだつたんだけど」

「そうか。でもあれはあれで、すごかつたけどな」

「い、今だから言うけど私も実際、怖かつたよ」

あんな啖呵切つといて嘘つけ。と言いたいが、これを言つたら殴られるのはわかっている。

「そ、そだつたのか？」

「そうだよ。私、臆病者だからね」

「臆病者は不良に真正面から立ち向かわないだろ」

俺はつい苦笑してしまった。すると、とんびは頬を膨らませ、拗ねたようにそっぽを向いた。  
「あの時はすごいお腹空いてて……私も知らない内に声が出てたの」  
「空腹には抗えなかつたつてことか」

「仕方ないでしょ」

「でも仲裁しようと思つていたから声が出たんだろ」

「そうなのかな」

「そうだろ、じやなきや何も言わなかつただろうし。仲裁しようと思つたなら、それだけで  
臆病者つていうのは否定されると思うけど」

「そつか……そだといいな」

歩いているうちに太陽が沈み、だいぶ暗くなつてきていた。向こうを向いているため、顔は  
良く見えないが彼女は今笑つているのだろう。

外向的だが友達がいない女。

学校の人気者だが友達がいない女。

「あ、私こつちだから」

「じやあ明日な」

「うん、さようなら」

俺は色々な思いを巡らせながら、小さくなつていく背中をしばらく眺めていた。

\*\*\*

翌日。

「……朝から元気だな」

これは俺が言つた。

「もちろん!! 今日は歴史的な日だからね!!」

これは目の前の女子が言つた。

「……そうだっけ」

自分でも生氣のない声が出たと思う。

「うん、悪い奴をとつ捕まえて学校に私の正義を示す日!!」

「へえ……」

意識が遠のいていく。俺は朝に弱い、低血圧だ。

「ちよつと、寝ないでよ!! 最後の確認しないと」

「……」

とんびが力強い声を浴びせてくるのに対し、俺はひどく不機嫌な顔で答える。他人から見たら、正反対の表情で向き合っているように見えるだろう。

そうだ、今日はあの犯人を捕まえるためにこんな早く登校したのだ。

昨日はだいぶ気合いが入つていたが、塾に行きテストを受け、すっかりそのことを忘れていた。忘れてそのまま眠りにつけたら良かつたのだが、悲劇は寝る前に起きた。

三十分程度パソコンをいじり、寝ようと思い電源を落とす直前、メッセンジャーにとんびを発見した。

## 『明日七時前に学校ね』

そして俺が返事を送る前に彼女はログアウトした。半ば強引なことに色々言いたいことはあつたが、そもそもどうやつて俺のハンドルネームを見つけたんだ。

仕方なく俺は、もやつとした気持ちを抱えつつ、布団に入る事にした。

そして朝。どうやつて学校までたどり着いたのか、おぼろげにしか覚えていない。ただ教室のドアを開けたら、とんびが笑顔で迎えてくれたのは覚えている。

そして、自分の机まで行つて――、

現在。また机に突つ伏す俺を叩き起こし、彼女は説明を続ける。

「だから!! こういう風に置くの！ そしたら自然な感じ出ると思うの」

机の上に奇妙な形で置かれるMP3プレーヤーを茫然と眺め、俺は呟く。

「もうどう置いても同じだから、普通に置けばいいんじゃない」

「普通すぎたら、逆に変に見えると思うんだって」

腕を組んで真剣に悩むとんび。そして何かを閃いたかのように、大きく目を見開いた。

「そうだ!! 机の上に置かれているのが不自然なのよ。少しほみ出すように、机の引き出しに入れればいいんだ!」

「それだと犯人にそのまま持つてかかるぞ」

とんびは不機嫌そうな顔で俺を見返す。

——ん? ああ、持つてかれるようにはまくんだつけ。

「もう……いい加減目、覚ましてよ」

「朝に弱いんだから仕方ないだろ」

「根性でなんとかしなさい」

とんびは腰に手を当てて胸を張る。無駄に発育状態はいいみたいだ。

「とにかく、この状態で体育と昼休みを待ちましょう」

「ところで、教室のドアの鍵を閉めるのは班長の役割らしいけど、鍵はどうするんだ?」

「……」

### ——一瞬の静寂

「まかしながら笑うとんびを後にしても、俺は葵を探しに行くことにした。あいつ、こんな早い時間にもう来ているだろうか。

葵の教室は俺の教室とはかなり離れた場所にある。

静まり返った廊下を歩き、ドアを開けると葵が机に突つ伏していた。叩き起こすと、葵はかなり不機嫌な顔をする。おそらくとんびと会話していた俺もこんな顔をしていたのだろう。

「作戦はどうなったんだ?」

大きく伸びをして訊ねる葵に、俺は時間帯などについて説明をした。大まかに話し終えると、静かに聞いていた葵がやつと口を開く。

「もしその犯人が襲つてきたりしたらどうするんだ?」

「……どうなるんだろうね」

そこまで考えていなかつた。おそらくとんびも、向こうが抵抗するとは全く頭にないだらう。

葵は少し考えた後、じつと俺を見据えてきた。

「無理だつたら、これ。使うか？」

これ……？まさか……。

「いやいや、周りにその能力がばれたらどうするんだよ」

「でも、犯人を捕まえることの方が大切ななんじやないか？」

「それは……そうだけど」

「まあ最終手段程度に考えとけばいいよ」

葵の正論に黙つて頷くことにしといた。

葵と分かれ廊下に出ると、俺たち以外に登校してきた生徒をちらほら見かけるようになつた。  
だいぶ時間が経つたみたいだな。

自分の教室に戻ろうとしたところ、とんびがこちらに向かつてくるのが見えた。

「どこ行つてたの？」

「ああ、葵がちゃんと来ているかどうかね。それとさつきの説明をするために」

「なるほど」

「そういうえば、よく葵に連絡ついたね。俺から言つといても良かつたのに」

「え」

とんびは大きく目を見開いて、驚いた顔をしていた。

「どうした？」

つられて俺も驚く。意外な返事が返つてきた。

「私……彼には連絡してないよ。なんか嫌そうみたいだから、ちょっと連絡するの躊躇つち  
やつて。君が授業の合間にとかに色々と説明をしに行つてくれると思つてたから」

「じゃあ、あいつ……一人で勝手に朝早く来たつてことか」

「まあ……そういうことだね」

信じられない。葵のやつ、全然関心なさそくな雰囲気していたくせに。

教室に戻ると、矢野たちクラスメイトもだいぶ登校していた。やつと食欲もわいてきたので、俺が朝ごはん用の菓子パンを食べていると矢野が話しかけてきた。

「おい、お前とんびといつあんなに仲良くなつたんだよ」

「さあ。知りたければお前も秘密工作員になつたらどうだ」

「はあ？」

訳がわからなそうにしている矢野を余所に、俺は朝食を食べ続ける。

——そうか、俺とんびは仲良さそうに見えるのか。

授業中というのは本当に不思議だ。集中していると眠くなり、集中しなくても眠くなる。つまり授業中は常に眠い。

今も脳内で言葉を繰り返しているが、少しでもぼうつとすると周りの声が一切遮断されてしまう。学生である以上、先生の話はしつかり聞かなければならぬが、今日の俺は朝早くから学校のために色々とやつてきたので、非常に疲れており授業が始まると同時に眠気に襲われている。

以上、このようにあれこれと述べているのは決してこの居眠りを正当化するためではない。信じてほしい。

授業終了のチャイムに目を覚ます。クラスメイト達が慌ただしく着替えの用意を始める。そ  
う、次の授業は体育であり作戦決行の時間だ。

男子は一つ下の階の更衣室で着替えるため、俺はひとまず教室を離れなければいけない。  
廊下に出る瞬間、とんびと目が合い小さく頷き合った。

更衣室で着替えるフリだけをしていると、矢野たちが奇妙な視線を送ってきた。俺は上手く言い訳をして見過ごしてもらい、こつそり更衣室を抜け出し教室の方へと続く階段に向かうよし。ここまで順調に行っている。

階段を登りきると、葵は既に到着していて教室の様子を窺っていた。お互いに言葉は無く、ただ領き合うと俺も階段の脇から教室の様子を見る。わらわらと女子が大勢出ていくのを確認した。静まり返った教室にはとんびが隠れているはずだ。

そして、始業チャイムを待つ。授業が始まれば犯人は動き出すだろう。

緊張してきた。もし犯人が学生ではなく、本当に泥棒だった場合どうすればいいだろうか。しかし、よっぽどの馬鹿でない限りわざわざ大人が危険を冒してまで、子供の持ち物を盗みには来ないだろう。だとすると、犯人はこの学校の生徒になる。

はあ……全く盗みをするにしても限度つてものがあるだろ。いや、そもそも盗みなんてする

なよ。

——始業チャイムが鳴った。びくつとなつて一気に俺の身体は強張ってきた。

静まり返つた廊下に、時々他クラスから聞こえる先生の声。この、時が止まつてしまつたような感覺は俺は割と好きだつた。

＊＊

始業後、三十分経つたが未だに誰も来ない。冷えきつた廊下で待ち続けるにもそろそろ限界がきそうだつた。

「……なんだよ、誰も来ないじやないか」

俺がぼそつと呟いた、その時だつた。

「!!」

俺は声が出そうになる口を辛うじて手で押さえた。目の前で、二人の生徒が教室に入つていくのが見えた。その様子は自然で、元々鍵が空いていることも知っていたようである。

どこかで見たことがあるような顔だつたが、今は作戦に集中しよう。葵も少し緊張しているのか、息を殺して真剣に教室を見ていた。

彼らが教室に入つて、一分ほど経つた頃だろうか。

「こいつら、捕まえて !!」

教室で大きな音が聞こえると同時に、とんびの声がした。そして勢いよく生徒たちが飛び出し、俺たちは反対方向へ向かつて走り出した。

「くそつ、なんて早いんだ… !!」

俺と葵は急いで彼らの後を追うが、さすが盗みに慣れているのか、脱出経路と思しき道を揃つて逃げる。あまりにも素早い動きに、ついに俺たちのような素人集団は彼らを見失つてしま

まつた。

必死に窓や廊下を目をこらして見てみるが、見つからない。とりあえず違う階に行こうとした時、とんびがポケットから何かを取り出しイヤホンを耳につけた。

「まさか……」

「盗聴器よ」

真面目な顔でさらりと答えるとんび。

そんなものどこで……。

「どこにいる!!」

「一階の玄関!!」

とんびは葵へ間髪いれずに答えた。まさに阿吽の呼吸のようだつた。

彼女を先頭に、俺たちは一階へと続く階段へ全力で向かう。途中、窓から彼らの姿が目に入

つた。

「これ、 まざいんじやないか!?」

隣を走る葵も少し苦そうな顔をしている。

犯人たちの顔は一応見たが、 証拠がない以上しらばつくれることなど簡単だ。 もしここで取り逃がしたら、 今後捕まえることは困難になるだろう。 なんとしても、 捕まえて白状させなければいけない。

突然、 はるか先を走っていたとんびが止まつた。 そして窓を開ける。

「——1、」

おい、 まさか……。

「——2の、

——は、

「——3つつ!!」

「2階だぞ、馬鹿つ!!」

全力疾走でとんびに追いつく前に、彼女の身体は窓の外に飛んだ。必死に手を伸ばして焦る俺とは対照的に、葵は落ち着いて一部始終を見ていた。

そして、非常に綺麗な着地を決めたとんびは、笑顔で俺たちに振りかえる。どうやら傷一つないようだ。

盗聴器を聞いていたとんびは彼らの行き先を予測し、待ち伏せしようと考へたわけだ。

結果は大成功。犯人たちは見事、仁王立ちしたとんびの前に辿りついた。

「天罰つ !!」

脇腹に綺麗な足技を入れられた犯人たちは、その場に倒れこんだ。

全く容赦がない……。

一人はその場で倒れ、もう一人は逃げようと思つた所を葵に取り押さえられた。

「おまえら……」

よく見ると、二人は先日食堂で騒いでいた不良たちだつた。俺は大きなため息を零して、彼らの前に座り込む。

「何で盗みなんかしたんだよ、別にお家が貧しいわけでもないだろ」

返ってきたのは舌打ちのみ。俺はやれやれと言つた顔で後ろで腕を組んでいるとんびに振り返つた。

「……どうするんだ、こいつら。そのまま先生に渡して終了か？」

「私のＭＰ３を返せ!!」

とんびは俺の言葉を無視して、犯人に迫つた——が、彼らの態度は完全にこちらを舐めきつていた。

「返せ?俺らはちょっと借りようと思つただけなんですけど」

「そろそろ、たまたま好奇心で使つてみたかつただけ」

彼らの言葉に、とんびは顔を真つ赤にして今にも手を出しそうだつたが、大きく深呼吸をして何とか心を落ち着かせたようだ。

「今まで盗んだものを返しなさい。先生たちに白状すれば警察沙汰にはならないわ」

すると、彼らは嘲りと共に「盗んだことはない」と繰り返す。いい加減、この態度に俺も限界がきそうだ。

「ふざけないで!! 犯行方法が同じなのに、まだ否定するの!?」

ついにとんびが座り込んでいる方の胸倉をつかんだ。

「だから盗んでないものをどうやつて返すんだよ」

「あんたたち……ただじやおかないとわよ!!」

「ただじやおかないとわよ!!」

くすくすと笑いながらとんびを見返す不良二人。一方のとんびは今にも、殴りかかりそうな雰囲気だつた。

「本当に返さないのね?」

「だから、盗んでねえつて」

一向に進まない会話に俺も何か策はないかと考える。

ふと、葵の方を見てみると、彼はじつと犯人二人を眺めていた。彼は何か口を出すと思つていたが、ずっと黙りこんでいる。

——まさか。

俺が止めようとした瞬間、葵は一步前に出て彼らに笑いかけた。

「ねえ、君たち、本当に盗んでいないのか？」

葵の顔を見た二人は一瞬、緊張の色を見せたが堂々と彼に向かって言い返した。

「ああ、本当にこれが初めてだ。大体、俺らがやつたって証拠でもあるのかよ!? 証拠もねえのに全部俺らのせいにして終わらせようとしてるんじゃないのか?」

「……そつか」

葵がため息をついて、両手の指をほぐしはじめた。

「そこでじつとしてるよ」

葵は指先を彼らに向けた。そして次の瞬間、風が吹いたかと思うと、立っている犯人の後ろの壁に小さな穴ができていた。

まるで銃弾のような威力だ。

「あ、はずれちゃった」

頭を抱える俺をよそに、とんびと犯人たちは呆然と壁の穴を見ていた。

「ああ、これは単なるトリックだから」

愛想良く笑う葵。

「それより、お前ら本当に盗んでないのか？」

葵の攻撃に圧倒されながらも、彼らは負けずに首を横に振る。葵はまたため息をついた。そして、再び風船が破裂するような音と共に、今度は反対側に穴が開いた。

犯人は穴と穴に挟まるのような形でぴくりとも動かない。もう一人も同じ状況下にいるかのよう、固まっていた。

「本当は盗んだでしょ」

「ぬ、盗んでない!!」

——また一発。

葵は非常に淡淡とした表情で壁に穴をあけていく。それは少しずつ少しずつ、犯人の首元へと近づいていた。

「盗んだ？」

「盗んでねえって!!」

——一発また一発。

とうとう、葵の能力が犯人の首筋をかすめた。相手が息を飲むのがわかる。もう一人の仲間の方は怯えた顔をしていた。

「そろそろ最後になつちやうかもだけど……盗んだ？」

「……」

——沈黙。

犯人はじつと葵を睨みつけていた。

「盗んでねえつつてんだろ!! 証拠を見せる!! 証拠もねえのに、こんなことしやがつて…  
…これじやあ、ただの脅しじやねえか!!」

すっと葵は目を細めて、腕を上げた。指先は男の顔面を狙っている。

——いくらなんでもやばいだろ……。

「葵っ !!」

「盗みました!! すみません!!」

刹那、指先を向けられている彼ではなく、前に座り込んでいた仲間が声を上げた。

「……でしょ？君たち二人が盗んでいたんだよね？」

「…………はい」

仲間の白状に男は何も言い返さず、地面にへなへなと座り込んだ。緊張の糸が解けたのだろう。

「それで!? 私のＭＰ３は!?」

呆然と座り込む犯人に、とんびは胸倉を掴んで振り回している。

——相変わらずひどい奴だ。

一仕事終えた葵は大きな欠伸をしていた。

全く……こんな恐喝みたいなことするから悪いイメージがつくんだ。

ちなみに葵が行っていたのはトリックでも何でもない——魔法だ。葵は空気を掴むことがで

きる能力を持つている。さつきのは、空気を掴んで圧縮し、それを飛ばしたのだろう。空気とは言え、先ほどのものは拳銃と変わりない威力なのだが。

「最後、本当に飛ばすのかと思った」

「そんなわけないでしょ」

葵はニコニコと笑つてゐるが、俺は見逃さなかつた。仲間が叫んだ直後、葵が空気を戻すようになっていたことを。

結局、とんびが聞いただしたところ、彼らが三日前に盗んだものはまだ家にあるが、それ以前のものは中古ショッピングに売つてしまつたとのこと。早く売つてしまえば解らないだろうと思つたらしい。何故こんなことをしたのかと言うと、お金がなくて欲しい物が買えなかつたとか。

何はともあれ、一件落着のようだ。

あの後、俺たちは犯人を先生たちに引き渡した。とんびの自信満々な笑顔とは対照的に、先生たちは非常に困惑した表情を浮かべていた。校内であまりいい評価をされていない葵が、まさか協力をしていたとは思つてもいなかつたようだ。

おかげで彼らの葵に対する認識が少し変ったと思う。

教室に戻ると、体育を終えた矢野たちも声をかけてきたが、保健室に行つていたと話すとすぐには話題が変わってしまった。

正直、学校の危機を救つた正義のヒーロー的な自慢話をしたかつたけど。  
まあいいか。

＊＊

放課後。

職員室でこつびどく叱られたであろう不良二人組がとんびを訪ねてきた。とんびは謝罪と共にMP3を返してもらい非常に上機嫌で帰り支度をしている。そう、本当に嬉しそうにMP3を見つめているのだ。

「なあ、それってそんな大切なのか？」

「え!? う、うん……ええと」

とんびは少し考えてから、いつもの笑顔を向けてきた。

「うん、じやあ特別に教えてあげる。葵くんも連れてきて！」

いつもなら面倒臭がる俺も今日は快く受け入れた。

\*\*\*

下校途中。

教室に残つて話すにも下校時間が迫つていたため、三人で帰りながら話すこととした。

校門を出てすぐ、とんびは俺の耳にイヤホンを突っ込んできた。聞こえてくるのは、だいぶ前に流行したボップソングだ。

「……これ何？」

「私が好きな曲!!」

「はあ。それで？これがどうしたの？」

「ええと、何て言えばいいんだろ」

俺は片方のイヤホンを取つて、葵の耳に入れれる。

「へえ……なかなか良いね」

葵の感心した様子に、とんびは嬉しそうにはしゃぎ始めた。

「でしょ、でしょ？」

「でもこれがどうしたの？」

俺と同じ質問。とんびは、一度目を閉じると遠くの空を見て話し始めた。

「私、この曲大好きなの。前はCD持っていたんだけど失くしちやつて。まあパソコンに取り込んでいたから曲自体はMP3に入れればいい話なんだけど……でもあのCDには想い出がたくさんあつたから、その想い出ごとMP3に移したようなものなの。だから、どうしても返してほしかった。それに……」

黙つて彼女の話を聞いていると、不意にとんびは困ったような笑顔で振り向いた。

「なんか盛りを過ぎた。ポップソングをずっと聞いているなんて、ちょっと恥ずかしいとか。みんなにバレたら変な目で見られると思ってさ」

「俺はおかしくないと思うけど」

俺が言葉を返す前に、葵が話し始めた。そして続ける。

「俺はこういう洋楽の雰囲気も好きだし」

「お……俺もポップソング好きだけど別に変ではないだろ」

葵の態度に少し戸惑いながら、俺も相槌を打つ。

「周りの視線、気にしすぎだと思う」

「へ……へん、そういふのなんかな」

314, psd

「そういうもの」

「そつか……ありがと」

淡々と答える葵に、とんびはいつもとは違う穏やかそうな笑みを浮かべた。

「そういえば」

ふと、耳に流れてくる曲を聴いていると疑問が浮かんだ。

「この歌詞の意味ってわかるのか？」

俺の質問にとんびは立ち止まつた。

そして意外な返答をした。

「歌詞もわからないのに感動するっていうところが驚きなんじやない」

俺も葵も何も返さなかつた。

ただただとんびの持つMP3に映る曲名を見つめる。

「……寒い」

赤城の能力から解放された後、俺は葬儀場の外に行き、駐車場の壁に寄り掛かっていた。じつと車のナンバーに書かれている様々な地方の名前を一つ一つ見ていた。全国各地からこの葬儀場に来ているようだ。たつた一人の死が遠くに住んでいる誰かを呼ぶ。良く考えればすごいことだ。こんなにも彼女の最期に立ち会いたい人がいるという事実は。

何故かじつとしていられず、俺は少し出かけることにした。

何も考えずに歩く。歩く。

都心から少し離れたこの場所は落ち着いており、静まり返った路地を歩いていると物悲しい気分さえしてくる。

歩いていると大きく開けた場所が見えてきた。公園だ。そして、そこで見つけた。

「よう」

「……おう」

俺を見た葵は苦笑を浮かべて返事した。葵の隣に腰かけ、俺たち二人は黙つて夜空を見つめ

た。静かに時間が流れる。

「あいつ、本当に死んだのか」

「そう、本当に死んだ」

「もう会えないのか」

「そう、もう一度と会えない」

俺はポケットから携帯を取り出し、曲を流す。

### —Take This Heart

「……聞こえなー」

葵が文句を言う。隣にいても充分に聞こえる音量だ。でも俺は何も言わず、音量を最大に上げた。

「……鈴木、お前泣くの？」

「誰が泣くか」

「そつか」

沈黙。

突然、葵が立ちあがつた。そして拳をきつく握りしめる。まるで何かを決心したかのような目をしていた。

「俺、決めたよ」

「何を」

「茜のように死ぬ人が二度と現れないようにする」

葵の決意に俺は黙つて彼を見ていた。

いや、葵の決意がとても格好良くて、俺はただ見ていることしかできなかつたのだ。

＊＊

「……疲れが溜まつているな」

毎日、バイトと勉強の繰り返し。かと思ひきや、こないだは非日常的な仕事に付き合わされ。

——久しぶりに昔の夢を見た。中学の時と高校の時。振り返つてみると、決していいことだらけではなかつた。でも楽しかつた。毎日忙しく過ごしていると過去を振り返る余裕もない。今回の夢は中々良かつたのかも知れない。

ゆつくり感慨にふけっていると、その雰囲気をぶち壊すかのように着信音が鳴った。電話主はいつもの女。内容はいつもの夕食へのご招待。俺は仕方なく出かける準備をした。そういえば、最近葵を見かけないが仕事に忙しいのだろうか。怪我とかしてないといけど。

ぼんやりと考え方をしながら準備をしていると、時計が目に入った。もうこんな時間だつたのか。夕飯食べたら、早く帰ろう。明日も忙しい。

そう、俺は明日も生きる。

小さく笑うと、俺は寒空の下へと出た。

-Hidden Track 「Take This Heart」 End.-

320.psd